

# 青 藍

藍野大学年報 2023



藍野大学



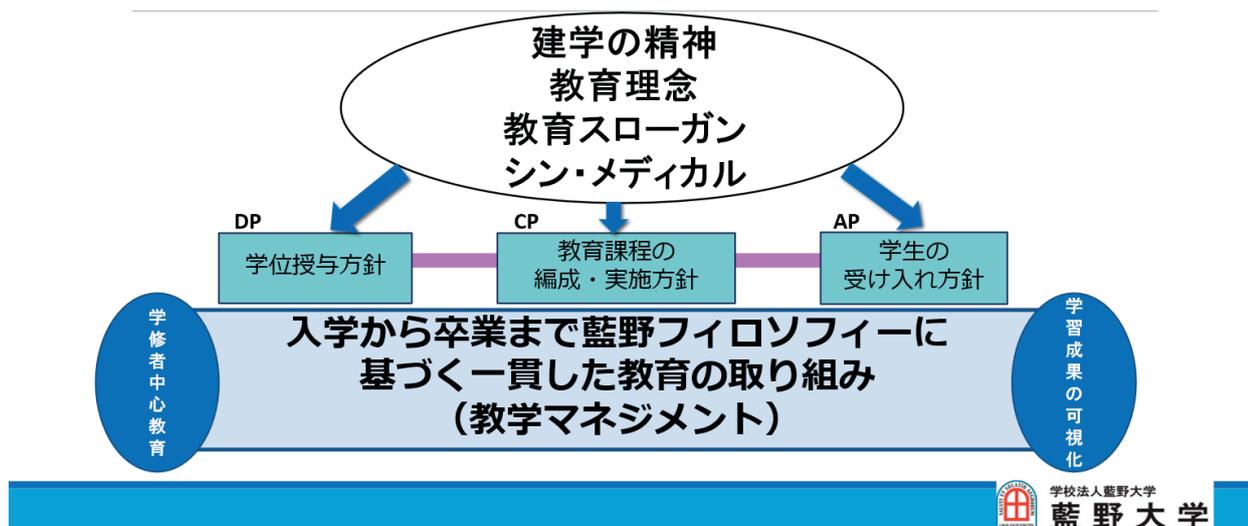
私が藍野大学学長に就任して2年が経ちました。この場を借りて、この2年の大学運営の取り組みと成果について紹介いたします。

## 1. ミッションの確立

＜建学の精神＞＜教育理念＞＜シン・メディカル＞＜教育スローガン＞をまとめて【藍野フィロソフィー】と名付け、入学から卒業まで【藍野フィロソフィー】に基づく一貫した教育に取り組んでいきます。(図1参照)

＜図1 藍野フィロソフィー＞

# 藍野フィロソフィー

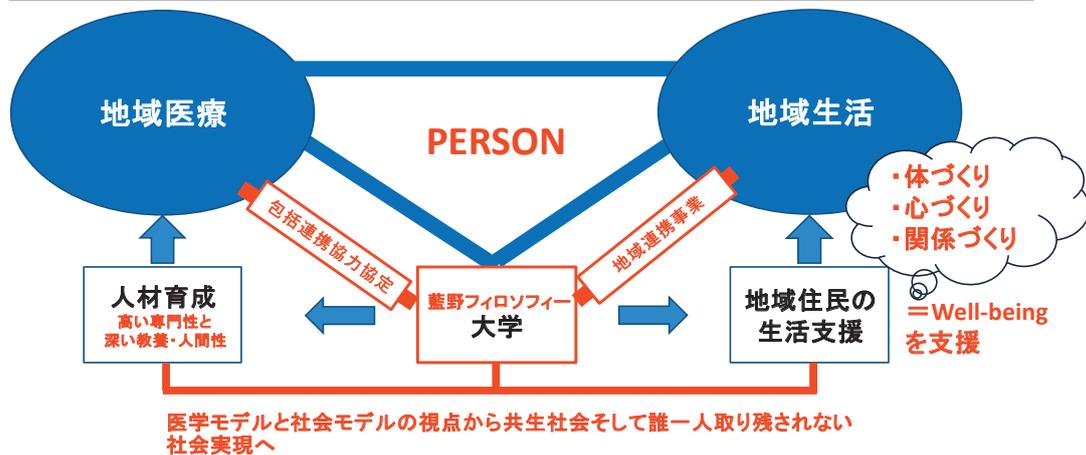


## 2. ビジョンの確立

超高齢社会の到来・疾病構造の変化により、日本の医療現場は「身体的な治療に主眼を置く医療」から「人の人生・生活を支える医療」へと大きく転換しつつあります。このような社会状況の下で、藍野大学が地域や社会から求められていることは、地域医療のみならず地域生活に貢献できる人材を育成し、地域医療や地域生活を直接支援できるシステムを築くことだと考えます。すなわち、藍野大学が地域医療と地域生活とトライアングルを形成し、「Person」すなわち地域の住民を支援していくというものであり、藍野モデル(図2参照)と名付けました。

<図2 藍野モデル>

## 藍野モデル



また、藍野モデルを進化させる取り組みのひとつとして、中長期を視野に入れた学部・学科・コースの設置構想を策定しました。具体的には、現在の医療保健学部看護学科を独立させ、看護学部と改組するとともに、医療保健学部の中に健康科学科(仮称)と臨床工学科に1年課程の専攻科を新設するというものです。現在、文部科学省に事前相談提出中であり、順調にいけば2025年には2学部5学科1専攻科の新体制がスタートする予定です。

大学院に関しては、すでに健康科学研究科の設置が認可されており、2024年4月より看護学研究科と健康科学研究科の2研究科体制が始動します。また、2025年以降に看護学研究科に助産師課程と教職課程(専修免許状取得)の設置も予定しています。

### 3. 大学に求められる4つの力(【教育力】【研究力】【連携力】【募集力】)

まず教育力について述べます。2022年度国家試験は卒業生1名以外全員合格となり、全国的に見ても非常に優れた成績でした。特に理学療法士国家試験では、全国3位となる88名の合格者を輩出し、看護師国家試験では、2年連続100%の合格率を達成しました。

また、2022年度私立大学等改革統合支援事業「タイプI Society5.0の実現等に向けた特色ある教育の展開」を初めて獲得することができました。

さらに、大学基準協会による2023年度大学評価の結果、適合しているとの認定を受領することができました。

次に研究力については、科研費配分額ランキングにおいて私立大学約560校中2022年281位、2023年239位と着実に順位を上げています。特筆すべきこととして、科研費で採択された研究の女性研究者比率において、国公立を合わせた全大学中で第2位となりました。我が国において女性教員、女性研究員の増員が喫緊の課題となっている中、本学の高い女性比率は教育・研究分野のダイバーシティを象徴する事例として各方面から大きな注目を集めています。

連携力については、京都・大阪を中心とした2つの医療法人と7病院と包括連携協定を締結し、地域医療のネットワークの構築を目指すとともに、医療人材の育成と医療の発展に寄与することを目的としています。高大連携では8校の高校と高大連携協定を締結し、幅広い学びの場の提供と相互交流の活発化に努めています。

最後に募集力についてですが、18歳人口と医療職志望の学生数が減少しつつある現在、募集力は大学存続の成否を分けるきわめて重要な要件です。充実した教育・研究体制を確立していても、募集力がなければ大学は競合のスタートラインに立つことができません。教職員の皆様の協力と努力の賜物である「教職協働」により、2023年新入学生は1.06倍確保することができました。しかし、今後、本学の募集をめぐる状況はますます厳しくなると考えられます。今年度は「募集力強化」が大学の最重要課題だと考えています。大学一丸となって、多彩なメディアを通じた情報発信やミッションである「藍野フィロソフィー」、ビジョンである「藍野モデル」を基盤とした学部・学科の新設等募集力の強化に向けた取り組みを推進していきたいと考えています。

文部科学省は、2030年の18歳人口を約103万人、2040年には約88万人と試算しています。今後、藍野大学の運営環境は一段と厳しいものとなることは間違いありません。藍野大学は常に変わり続け、進化し続けなければなりません。2024年は変革への意思を明確化したキャッチフレーズ―「Transforming Aino Blue」変革する藍野大学―を掲げ、教職員一同前進していきたいと考えています。

## 藍野大学年報 2023 の発刊にあたって 私の研究の歩み ランダムウォーク

副学長 飯田 英晴

立命館大学哲学科心理学専攻に在籍中に会った臨床心理学の本に「病棟内適応評価尺度」について紹介した頁があり、それは、なぜか運命的な出会いでした。乏しい英語の能力で入院中の精神疾患患者さんの行動のリストを訳出し、K 大学精神科の教授にお会いして、K 大学精神科病棟で行いましょうと言うことになり、半年以上ほぼ毎日、精神科の病棟で患者さんの行動の観察が始まりました。この行動評価を分析し、卒業研究にすると共に、精神科の専門雑誌に投稿、掲載されました。

このような縁もあって、K 大学精神医学教室の研究生として 2 年間在籍しました。その間、外来患者さんの心理学的評価をはじめ、自閉症児のプレイセラピー、母親の面談などを行い、医局には机はなく、病棟内の脳波室に机をもらい、脳波室の住人になりました。脳波検査の患者さんがいない時は研修医から脳波のことだけでなく、精神医学全般、神経学のことを広く学ぶことができ、貴重な時間でした。脳波の研究もこの部屋のお陰です。

2 年経った時に、今度新しく滋賀医科大学ができるので、どうかという話が来て、公務員の中級試験を受け、何とか 4 月から文部技官として任用してもらいました。まだ病棟は開かれてなく、医局はただ部屋があるだけで、机 1 つありません。病棟を開くための準備、外来で必要な備品の調達、医局で必要な物品の購入など雑用に追われる毎日でした。

10 月にやっと病棟が開かれ、耳鼻咽喉科と 60 床を分けて使う形で、何かと不便を感じました。脳波の研究グループに入り、脳波を使った脳内情報処理に関する研究で、通常の臨床脳波記録の数倍以上もの精度で電極を頭皮に着けるのが至難の業でしたが、持ち前の手先の器用さもあって、電極付けでは重宝してもらいました。その当時はまだ、パワーポイントのようなソフトはなかったので、学会発表のスライド作りは私の担当で、脳波のトレースやグラフ作りは烏口を使ってすべて手書きで作っていました。

睡眠時無呼吸症候群や REM 関連睡眠時異常行動の患者さん等の終夜睡眠脳波記録も徹夜で行い、この時の経験が、睡眠と成長ホルモン、プロラクチン分泌パターンとの関連の研究や高齢認知症患者さんの睡眠研究に大いに役立ちました。また、この時に、厚労省の研究班の班員になり、マタニティーブルーについての臨床研究を大阪助産婦業務研究会の人たちの力を借りて、千名以上の産婦さんからデータを得て論文にまとめました。

医局の事情で、脳波グループは解散され、メンバーはそれぞれ大学を離れバラバラになり、私はどういう訳か医局に残され、睡眠と内分泌の関連、睡眠物質の研究グループに吸収され、今までにはないスタイルの研究に入りました。これもまた、新しい刺激があって、面白みを感じました。良き友にも恵まれた時代でもありました。

滋賀医大を辞し、東京の国立精神・神経センター武蔵病院に移りました。元々陸軍病院だったこともあって、余りの旧態然とした態勢に驚き、ひたすら入院患者さんの臨床心理検査をしました。依頼伝票の古いものから検査をしますが、既に死亡退院の患者さんで、検査が酷く滞っているのに驚きました。僅か 1 年で辞めましたが、溜まっていた依頼伝票は全て片づけました。睡眠相後退症候群についての論文、アルコール依存症の高次脳機能検査についての論文などをまとめました。

埼玉医科大学の心理学教室のポストが空くので、行かないかという話があり埼玉医大に移ることになりましたが、いざ移ってみると、学生相談と精神科助手のポストで、「話が違うなあ」と思いながらも、新天地で大学院生の研究指導、性同一性障害の患者さんの評価と慢性統合失調症患者さんに対する社会技能訓練 (SST) など

に携わりました。認知症患者さんの重症度と睡眠構造との関連を分析し、認知症が重症化し、寝たきりになり、全面的に介助を受けるようになると、睡眠構造も大きく崩れ、睡眠・覚醒リズムも崩れるが、中等度の認知症では、睡眠構造が崩れても早朝の光刺激によって改善する傾向を明らかにし、これが学位論文になりました。終夜睡眠の記録で、体力的にも大変な研究でした。

藍野大学の開設に関わり、ここでは自殺予防戦略研究の班員になり、大阪地区の自殺予防対策に参画し、色々な地域で自殺予防についての講演会、うつ病の正しい理解についての講演などを行って来ました。丁度、立命館大学で講演をした時、そこに来ていた人の悲嘆反応が強烈で、それを機に悲嘆反応に興味を持ち、悲嘆に関する実践研究を始めるきっかけになりました。今は京都グリーフケア協会で、葬儀関係者、看護・保健師、納棺士・死化粧士等の葬祭業者等を対象にしたグリーフケアの講義も行っています。

一つのテーマ、同じ分野を何年にも渡って行うのではなく、その時々、それぞれの場所でできる研究を行うという姿勢でこれまで研究に携わってきました。こんな姿勢で良かったのかなとふと考えることもありますが、もう後には戻れませんから、これでよしとしておきます。研究のテーマになるような素材はその気になって眺めると結構あるものです。若い教育者は研究のテーマを誰かから与えられるのではなく、自らの足で歩き回って(ランダムウォーク)探してみるのもまた、楽しいものです。

## 発刊にあたって

理学療法学科特任教授 中央研究施設長 副学長 栗原秀剛

藍野大学に佐々木恵雲学長が就任され、新たな改革の動きが始動して 2 年目を迎えた今年、第 3 期認証評価を受診するという大きなイベントがありました。認証評価受審に必要な、自己点件・評価報告書の作成は、昨年春の時点で遅々として進んでおらず、残り少ない時間で対応できる体制の構築が必要でした。そのため、各委員会を整理して認証評価基準の項目に対応した新たな委員会体制を立ち上げ、各委員長で構成される内部質保証員会(後藤学部長が委員長)が、月に 2 度の会議を開いて、評価基準をクリアするために本学がすべき課題を精査し、改善を実行していくことになったのです。このように、学内の体制が整い、その成果を自己点検評価に盛り込むことで 10 月に行われた認証評価に、無事対応できたことは、奇跡的とも思えるものでした。これを執筆している時点では、認証評価の結果は受け取っていませんが、感触として概ね問題はないのではと感じています。この 2 年間で振り返って思うことは、旧体制では大学内の問題点を委員会レベルでは検討していたが、それを大学全体の問題として捉え、変えていこうとするムーブメントに昇華できなかったこと、委員会レベルで議論されていた問題がトップと共有されていなかったことが大きな問題であったと思います。新体制では決して外部から人材を入れたわけではなく、適材適所に委員長を定め、2 年間で結果を出せたことは、現在の藍野大学の本来の実力を示すものと考えられますが、この変化をさらに次のステップに移し、大学が大きく躍進していくことを願っています。

そのような年の初めには、4 学科のうち 3 学科で新卒業生たちにより、国家試験の 100%合格を達成するという快挙が成し遂げられました。大変誇らしいことです。国家試験の合格率は大学における教育力の良い指標となるため、これから入学者獲得をする上でもっとも重要視されると考えられますので、この高い国試合格率を継続していくことが大切です。

研究面では、文部科学省が行った今年度の科学研究費の助成事業において、採択された研究のうち女性研究者が占める割合が高い大学が報道され、本学が全国 2 位となったことが明らかになりました。今後も本学において働き方改革の一環として女性研究者が活躍できるよう、研究しやすい環境づくりや支援体制の強化が求められることとなります。

大学に進学する 18 歳人口が減少局面に突入していくことが以前より問題となっていますが、本学が「選ばれる大学」になるために、いかに行動すべきか教員一人ずつが真剣に考えること、そのためにはまず学生を大切に育て国家試験に無事合格させることを継続し、魅力のある学科、学部にするための弛まぬ努力を継続していくことが重要です。

# 目 次

I	大学および学科便り	
	2023年度の藍野大学医療保健学部の歩み .....	1
	2023年度 看護学科の取り組み	
	2023年度の理学療法学科の取り組み	
	2023年度の作業療法学科の取り組み	
	2023年度の臨床工学科の取り組み	
	2023年度 看護学研究科の取り組み	
	藍野大学 中央研究施設	
	藍野大学・藍野大学短期大学部事務センターの取り組みとこれから	
	中央図書館の役割：市民に開かれた図書館をめざして	
II	2023年度の出来事 .....	25
	特集1 2022年のFD・SD推進活動	
	特集2 卒業後アンケート調査からみえたもの(教学IR室)	
	特集3 〈研究紹介〉科学研究費補助金採択課題について	
	1. 学校で働く看護師のコンピテンシーを基にした教育モデルの開発	
	2. 高齢者の抑うつ症状改善のためのナッジを活用した 身体活動プログラムの開発と効果検証	
	3. 地域在住高齢者の転倒に及ぼす筋量・筋力の複合影響についての追跡研究	
	4. 高齢者の握り損ないを科学する ―握る力と腕の力の持続出力調整機能の研究―	
	5. 『宇宙環境における内耳前庭の発生維持とバイオメカニクス』 ―細胞／分子レベルでの力学的特性の解明に向けて―	
	特集4 看護学科教員による実習施設への研究支援の取り組み	
	特集5 令和4年度看護学科卒業生のための卒業前看護技術演習実践報告	
	特集6 藍野大学×茨木市南保健福祉センター 共同研究(活動報告)	
	―中高年者に対する運動継続が身体機能(骨格筋・呼吸筋)に与える影響―	
	特集7 ハードシェル静脈リザーバーにおける薬液拡散の性能評価 ―時定数および薬液濃度比による評価― (藍野大学令和5年度優秀研究賞)	
	特集8 拍動流および定常流脳分離体外循環における脳微小循環の検証	
III	学年暦・学生の状況 .....	63
IV	研究業績と社会貢献 .....	69
	科学研究費助成事業について	
	教員研究業績・発表等	
	編集後記	



大学および学科便り



## 2023年度の藍野大学医療保健学部の歩み

医療保健学部 学部長 後藤昌弘

2023年度は【学生教育】【社会貢献】【学生募集】【研究推進】という通年業務に加え、公益財団法人大学基準協会による第3期機関別認証評価の受審、健康科学研究科の設置認可及び学生募集開始、2学部5学科1専攻科という新学部・新学科構想を進める申請書類を文部科学省に提出するなど、藍野大学医療保健学部には所属する全ての教職員にとって非常に多忙であり、大学の今後を左右する重要な一年となった。

まずは、10月初旬2日間にわたり実地調査が行われた認証評価について述べる。

今期の認証評価の中心課題は基準2である「内部質保証推進組織の構築とPDCAサイクルを用いた内部質保証システムの実質化」であった。「学生の学び」をサポートするために教育環境や設備は整っているのか、その環境下でどのような活動を行っているのかを問う基準1から基準10に関する質疑に対して内部質保証委員会構成員である各委員長が中心となり対応した。当初は、2018年度から2020年度までの自己点検・評価結果を中間報告書としてまとめ、外部有識者に提出し、その意見と改善策を合わせて自己点検・評価報告書として提出する予定であった。中間報告書を作成し、外部有識者に提出したものの報告書の完成度が不十分であったため、評価を頂くには至らない結果となった。これを執筆している12月現在、大学基準協会からの認証評価の結果は受けていないが、大学基準協会の基準に即した報告書を年度ごとに作成し、定期的な外部評価受審システムを構築することが現在の本学内部質保証の課題である。自己点検・評価の目的は「学生の学び」をサポートすることであり、大学基準協会の認証評価を受けることが自己点検・評価の目的になってはならない。2025年度から始まる次の第4期で重視されるのは「学修者本位の教育の実現」である。具体的には、①DPに示した力の獲得に向けた学生の学修進捗状況を把握しているか、②DPに示した力の獲得に向け実施した本学施策によってどの程度の改善が見られたのか結果を示しているか、③ネットワーク環境やICT機器の整備を促し、情報倫理の確立や学修をサポートするオンライン教育方法を図っているか、④学修者本位の教育を実施するために大学は大学の施設、組織、教育の方法、就職について学生と共に考える機会を作り、その改善結果を示しているか、⑤本学の特色ある取り組みである「シン・メディカル」を多方向から評価し、更なる発展を図っているか、⑥学外有識者の意見を適宜取り入れた自己点検評価を実施しているか、について問われる。まずは、内部質保証委員会が中心となり、毎年度末に作成している各学科・研究科のPDCA様式を用いた自己点検・評価と事業計画書・事業報告書に前述した①から⑥の対応策と改善結果をいかに組み込むか検討する。さらに、「DPに示した能力の獲得」に向け、現状の課題改善策について、学生の意見を聞く場面を設定する必要がある。

次に、藍野大学大学院健康科学研究科であるが、2023年10月31日に文部科学省より設置認可を受けることができた。この設置認可に向けては5年ほど前から「修士課程教授もしくは准教授〇合6名以上」を目指し、業績を重ね、教職員一体となり努力し、結果を得られたことに感謝している。新研究科では、認知領域と身体領域の両面から健康増進を科学的に探究し、「一生涯健やかに暮らしたい」そんな思いに寄り添う医療の専門家を養成する。第1期生の募集を2023年12月より開始しており、2024年4月に開講する予定である。

最後に、藍野大学の新学部・新学科構想であるが、本学は現在単科大学であり、医療保健学部の中に看護学科、理学療法学科、作業療法学科、臨床工学科の4学科が存在する。新学部構想では医療保健学部を医療保健学部と看護学部の2学部に分け、医療保健学部の中に理学療法学科、作業療法学

科、臨床工学科、そして新学科である健康科学科（仮称）を置き、看護学部の中に看護学科を置く。2023年11月、文部科学省に事前相談書類を提出した。また、臨床工学科に1年制の専攻科を設ける予定である。この申請が問題なく受理された場合は、2025年4月より藍野大学は2学部5学科1専攻、大学院2研究科として教育、研究、社会貢献活動を展開することとなる。2024年1月以降にでる文部科学省の回答を受け、順次対応していきたい。

## 2023年度(令和5年度)看護学科の取り組み

看護学科長 本多容子

2023年度(令和5年度)は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が5類へ移行し、4年ぶりに制限のない臨地実習を計画することができた。しかし、感染拡大が終結したわけではないため、実習先の感染状況に応じた柔軟な対応を取りつつ、学習機会を保障し教育の質を担保することに尽力した。

### 1. 教育活動

#### 1) 1年生

2020年度入学生より定員が115名となり今年度は127名の新入生を迎えた。新入生歓迎オリエンテーションでは、学科紹介、学習方法、上級生からのアドバイス等の後、「玉入れ大会」を開催し学生間の親睦をはかった。

初めての臨地実習となる基礎看護学Ⅰは、2024年2月下旬～3月上旬にかけて、1クール1週間で実施予定である。



写真：新入生歓迎オリエンテーションの様子

#### 2) 2年生

基礎看護学Ⅱを2023年12月に1クール2週間で実施した。

#### 3) 3年生

領域実習を8月下旬～2月上旬で、順次、成人看護学実習Ⅰ(3週間)、成人看護学実習Ⅱ(3週間)、老年看護学実習Ⅰ(1週間)、老年看護学実習Ⅱ(3週間)、母性看護学実習(2週間)、小児看護学実習(2週間)、精神看護学実習(2週間)、在宅看護学実習(2週間)を実施した。感染症で一部延期となることもあったが隣地での実習を実施できた。

#### 4) 4年生

◎統合看護学実習

6～7月に、2週間の臨地実習を実施した。

◎公衆衛生看護学実習 I、II を実施した。

◎教育実習を各実習受け入れ校で順次実施した。

◎藍野大学×摂南大学「卒業前フォローアップ研修」

2024年3月14日に「卒業前フォローアップ研修」を今年度も開催予定である。



写真

昨年度(2023年3月)開催の様子

※梅花女子大学と合同開催

#### 4) 国家試験対策

過去の反省から2021年、2022年度は国家試験対策に力を入れ、看護師国家試験合格率100%を達成した。今年度も引き続き保健師・看護師国家試験全員合格を目指して、早い時期から学習支援に取り組んできた。適宜面接を実施、必要時は保護者にも連絡し、協力をお願いしながら支援にあたった。特に学習成果の思わしくない学生を対象とした支援に力を入れ、少人数(5名前後)での対面指導を実施した。心配な学生は教員が1対1または1対2~3で終日個別指導を行った。年始年末期間中も、zoomで個別指導を行い、被災地(2024年1月1日発生の令和6年能登半島地震)からzoom指導を続けた教員もいた。2月9日に保健師国家試験、同11日に看護師国家試験を全員が受験した。

## 2. 研究活動

本年度も多くの教員が科学研究費助成をうけ研究に取り組んでいる。その他、学内外の研究助成金の獲得など研究活動に意欲的に取り組んでいる。さらなる研究活動の活性化を目指し、若手教員の研究支援に力を入れていきたい。

### 3. 実習協力病院への臨床研究支援

臨床からの要請をうけ、臨床研究指導を実施した。

#### ①医療法人恒昭会 藍野病院 ※別途報告有

- ・研究方法の講義
- ・グループ別の研究指導（研究計画立案～まとめ）
- ・学会発表

#### ②京都済生会病院

- ・グループ研究指導（研究計画立案～まとめ、学会発表まで）

#### ③徳洲会吹田

- ・研究方法の講義
- ・研究指導（研究計画立案～まとめ、学会発表まで）

#### ④京都桂病院

- ・研究方法の講義
- ・グループ研究指導（研究計画立案～まとめ、学会発表まで）

### 4. 社会貢献活動

◇第15回日本医療マネジメント学会 開催運営ボランティアに学生引率°

日時：5月13日(土)7:30～17:00

内容：開催運営ボランティアとして、学生が受付・誘導の担当を行った。

場所：大阪国際交流センター



◇託児ボランティア

日時：5月20日(土)9:30～12:30

7月8日(土)9:30～12:30

場所：茨木市立障害福祉センター・ハートフル

内容：支援学級・通級支援を受けている小中学生のこどもを育てる保護者会時の託児ボランティア

◇令和 5 年度文部科学省 助成事業『大学・専門学校等における生涯学習機会創出・運営体制のモデル構築』運営スタッフ

日時： 9月 1日(金)9:00～17:00

10月15日(日)9:00～17:00

12月16日(土)9:00～17:00

内容：オープンカレッジに参加する小児がん経験者、重症心身障害児らの、学習参加へのサポート。

備考：令和 5 年度文部科学省 大学・専門学校等における生涯学習機会創出・運営体制のモデル構築 事業 「小児期に発症した医療的ケアを必要とする重度重複障がい者や小児がん経験者である AYA 世代の生涯学習ー「生きる体験」を目指しー」代表：大阪教育大学、協力：藍野大学など

◇「第 7 回スペシャルキッズサポーターの集い」運営スタッフ

日時：2023 年 3 月 12 日(日) 8:00～17:30

場所：エル・大阪

内容：受付や案内、ワークショップのサポート

※ 2023 年度（2024 年 3 月 16 日）は藍野大学で開催予定



写真：左・中央 スペシャルキッズ  
右 託児ボランティア

◇2023 いわてこどもまつりチャレンジ DAY ナース体験おしえてナース先生

日時： 8月 26日(土) 10:00～12:00

場所：高槻市立磐手公民館

内容：ナース服体験、聴診器体験、赤ちゃんの着替え体験

◇レビー小体型認知症カフェ・勉強会/ご本人とご家族の交流会

日時：毎月第 3 土曜日 13:00～15:00

場所：本学 MLC 棟 カフェ

内容：レビー小体型認知症のご本人・ご家族の交流

◇藍野まちの保健室

日時：5月21日(日)10:00~16:00

場所：藍野病院

内容：転倒予防のための足指力測定と転倒予防指導 ※藍野病院からの依頼で参加



写真：

右上下 レビー小体型認知症カフェ

勉強会とカフェの様子

左上 いわてこどもまつり

左下 藍野まちの保健室

5. まとめ

次年度以降も、さらなる教育の質の向上を目指していきたい。また各教員の研究支援のほか、学科としての社会貢献活動の活性化にも取り組んでいきたいと考える。

## 2023年度の理学療法学科の取り組み

理学療法学科 学科長 寺田 茂

2023年の理学療法学科の取り組みについて1年間を振り返り報告する。

2023年は、三年以上続いたコロナ禍が指定感染症法上の2類から5類へと引き下げられたことによりようやく終焉し、当たり前の日常を取り戻しつつある一年となったように思う。感染拡大の当初は、社会が混乱を極め、大学での授業も対面からWebに変更されて学生も登校制限を余儀なくされた。その後、ワクチンや経口薬が開発されるにしたがい、学校生活も徐々に以前の様相を取り戻してきた。構内でのマスクの着用は任意となり、少しずつ以前の学校風景が戻ってきたと実感できるようになった。

しかし、医療現場では厳格な感染管理が続いている施設もあり、学生教育においては、理学療法士教育の総決算となる総合臨床実習は、中断を余儀なくされるケースもあった。そのような状況の中でも、2020年度入学生から適用されている「理学療法士、作業療法士養成校新指定規則」によって、必須化された「地域リハビリテーション実習」が完遂することができた。これは、実習に協力いただいた多くの病院・施設、患者様や利用者の方々への理学療法士教育に対する理解や善意の賜物であり、この場をお借りして感謝の意をお伝えさせていただきます。

社会貢献については、藍野大学の認知度向上と帯同する学生の実践教育を目的に、茨木市との連携事業を推進した。内容としては、担当課と連携しての茨木市太田地区身体測定会を11月に実施し、約40名の地域住民の方々に参加を頂いた。また、全学的な取り組みとしての茨木市藍野大学連携講座の開催等が実施された。

また、学術活動については、大学の認知度向上、外部資金獲得と若手教員および学生に対する研究指導の強化を目的に、個々の教員が各専門分野で積極的な研究活動を行った。その結果、学科教員が筆頭著者の投稿論文数は10本（英語論文4本、日本語論文6本）となり、学会発表は、25演題（国際学会6題、国内学会19題）の報告がなされた。

その他の取り組みとして、卒業生や臨床実習でお世話になっている施設のスタッフを対象とした「藍野理学療法学科交流会」を2回開催した。第1回目は、2023年11月にテーマを『スポーツ損傷の理学療法 - 治療と予防』とし、小柳先生をお招きし開催し、参加人数は40名、内容はすぐに臨床応用が可能な実践的講義で参加者からは好評であった。第2回目は、JSMT（日本徒手療法学会）とコラボしてテーマを「Understanding and management of nociceptive pain : 痛覚変調性疼痛の理解と管理」とし、講師にRob Stanborough（University of St. Augustine for Health Sciences）をお招きして行った。内容は、侵害受容性疼痛、神経障害性疼痛の器質的疼痛の他に、非器質的疼痛として「Nociceptive pain」について解説し、今回は特に「痛覚変調性疼痛」に焦点をあて、その理解と管理についての講義と実技セミナーであった。

次年度以降も「教育」「社会貢献」「研究」の各分野において、所属教員が一丸となって取り組んでいきたいと考えています。

## 2023 年度の作業療法学科の取り組み

作業療法学科 学科長 酒井 浩

2023 年は新型コロナウイルス感染症の影響が薄れ、日本には海外からの観光客が大量に来訪し、大阪や京都では海外からの観光客であふれる光景が頻繁に見られるようになりました。一方で、医療機関においては新型コロナウイルス感染症による影響が継続し、患者数の増加と減少が繰り返されました。前年と比べて、臨床実習はコロナ感染を理由とする中止事由は激減しましたが、一定の影響が残存していました。

国家試験においては、前年度に試験対策プログラムを大幅に見直し、3 年生 1 月から講義形式の基礎対策セミナーを実施し、3 年生 3 月には国試対策グループ学習を開始しました。グループワークでは、過去問の中から毎日 15 問を振り分け、グループ内で問題を割り振ったうえで、各選択肢が正しいか否かだけでなく、その理由を他者に解説してもらう形式としました。解説にはホワイトボードを使用し、知識を視覚化し、その視覚化したイラストをもとに解説してもらい、さらに要点を整理して、効果的な覚え方を教示してもらいました。これは心理学的根拠としてラーニングピラミッドを用いており、記憶定着効果が高い視覚化、デモンストレーションを駆使して、「他者に教える」という方法を重要視したもので、心理学的には「他者に教える」ことで記憶の定着率は 90%を超えると考えられています。課題となるのは、教示する内容のクオリティの部分であり、学生に任せてしまうと、クオリティの低い内容で留まってしまいますが、教員がグループを回り、クオリティを調整することで、高いクオリティでのグループ学習が可能になったと考えています。このような教員の役割により、教員の負担が大幅に増加することが危惧されましたが、4 年生後半になると学生のみで同等のクオリティが維持できることがわかりました。2022 年度は、この方法により国家試験合格率 100%を達成し、2023 年度についても、前年度と同等の方法を用い、外部模擬試験の平均値は過去最高点を更新する結果となっており、その成果としての今年度国家試験結果が待たれるところです。

入学定員充足については、2021 年は定員を割り 37 名、2022 年はどうにか定員を満たし 40 名、2023 年は 45 名と復調の兆しを見せたものの、2024 年入試は苦戦を余儀なくされています。入試志願者の減少は全国的な課題であり、2024 年入試では高校 3 年生の母数をもっとも少なくなる年とされ、大学のすべての学科が一丸となって志願者確保に力を注ぎました。作業療法学科では「保育師国家試験」を卒業までに受験するための科目として「保育学入門」を設置し、高校訪問を積極的に行いました。しかしながら、高校訪問の時期が 12 月となってしまう、思ったようには効果が出ずに、定員充足が厳しい状況となっています。前述した新たな国家試験対策プログラムは成功し、国家試験合格率は高水準で安定化が望めるものの、入学定員充足への取り組みは深刻な状況に直面し、今後も継続して強化していかなければならず、作業療法学科における最重点課題であると考えています。

2023 年は、新型コロナウイルスの臨床実習に対する影響が減少し、安定した臨床実習を行えるようになりました。また、新たな国家試験対策プログラムは 2 年目を迎え、効果的であることを証明する結果となることが十分に期待され、加えて、待望のリハ系コースを含有する藍野大学大学院健康科学科の設置ができ、その入学者定員も充足の見通しがたっています。一方で、入学者定員充足には非常に深刻な課題が示されることとなり、2024 年度は大学および学科が一丸となり、このような局面を乗り越えていかなければならないと考えています。

## 2023 年度の臨床工学科の取り組み

臨床工学科 学科長 五十嵐 朗

2023 年度の臨床工学科の取り組みについてその概略を報告する。

まず教育については、5 月下旬に待望の模擬手術室が完成し、香川大学医学部附属病院・臨床工学部の技士長を招き、7 月 26 日に麻酔補助業務に関する特別講演を在校生向けに実施するなど、タスクシフトによる業務拡大へ対応するための教育環境の整備を進めている。タスクシフト関連では、次年度以降も学内での内視鏡関連の実習や現 2 年生に対する在学中の告知研修実施などを継続的に検討していく必要がある。また臨床実習については、新型コロナウイルス感染症が 5 類に移行してから最初の実習となったが、本学科の実習先の医療機関の協力や臨床系教員の尽力もあり、9 月末までに全ての対象学生の臨床実習を終えることができた。さらには 2023 年度入学生から学習に対するモチベーションを高めること、病院における臨床工学技士の重要性や役割を認識することを目的として、従来から行ってきた「国際くらしの医療館・神戸(医療機器や設備の見学)」での見学実習に加えて、早期臨床体験実習(Early exposure)を吹田徳洲会病院(臨床工学に関連する部門)で実施した。さらには 4 年次の臨床実習が間近に控えた 3 年次の学生達にも臨床現場の雰囲気を感じてもらうために病院見学を実施し、学内実習から臨床実習へのスムーズな移行が出来るような環境作りを行った。

学生募集については、新たに整備された模擬手術室を軸として、X(旧 Twitter)や TikTok 等の SNS 媒体による広報を積極的に進めることで、オープンキャンパスへの参加者は前年度を大きく上回る来場者数となった。また、近畿圏以外の臨床工学技士の養成校として大学が無い空白地域(山陰地方など)、県内に養成校にあることで進路指導部の先生方に臨床工学技士に対する知名度が高い北陸地方への高校訪問を行った。さらに地方からの志願者を増やすための施策として、大学病院等の地域の基幹病院を臨床実習先として確保することで U ターン就職への道筋をつけ、地方出身の受験生確保の試みを進めている。入試制度の改革としては、新たに「臨床工学体験型選抜入試」を導入することで、年内入学者の確保を早い時期に行えるようになった。今年度は、臨床工学体験型選抜入試の初年度ということもあり、入試内容の広報遅れ等の反省点もあり、次年度以降の学生募集にこれらの点を改善していきたいと考えている。また減少していた指定校入学者数が回復したが、前年度に引き続き定員確保には苦戦する状況が続いており、受験生確保のためにさらなる取り組みを行う必要がある。新設した模擬手術室やニプロ株式会社 iMEP での手術実践実習などの本学科の特色、臨床実習先である大学病院や公立病院に多数在籍している就職状況等の強みを前面に出して入学者確保に向けて広報活動を行う予定である。

2023 年度は模擬手術室の完成や新入試導入により、新たなるスタートを切った最初の 1 年であったと総括する。

## 2023 年度 看護学研究科の取り組み

看護学研究科長 西上あゆみ

大学院は「実践看護分野」として「成育看護学」「高齢者看護学」「精神看護学」「災害看護学」を、「看護マネジメント分野」として「地域保健看護学」「看護管理学」「感染看護学」と2つの柱と7領域から成り立っている。2023年度は8名の入学生を迎えた。入学生の背景は、5名が病院で勤務している看護師、2名は看護教育機関で勤務、1名は学生専任であった。院生総数18名とこれまでで一番多い学生数を抱えることになり、一層、活気のある看護学研究科となった。

入学生の募集について、学部のオープンキャンパスと同日に大学院の相談ブースを作成しており、広報をみて問い合わせる学生も増えた。2023年度も12月に開催の大阪府看護協会学会で学会ホームページへのバナー広告、会場では大学院ブースを出展した。150名の方にリーフレットを配布したが、大学院への進学希望の声も多く聞かれた。7月看護学科開催の実習施設との意見交換会や、研究科教員が近隣の看護協会等で特別講義を引き受ける時に大学院の紹介を行った。大学卒業でなければ、大学院に入れないと考えている看護師がまだまだ多く、出願資格認定審査の制度について丁寧に紹介するようにした。2023年度の入学生の獲得に関しては、関連施設や在学学生、修了生を通じて入学希望学生の紹介をうけることもあり、予定していた2回の入試で定員以上の入学生を確保することができた。入学希望者を見ると、4年制設置前の藍野短期大学部からの入学生も増えてきているようである。しかし、2024年度入学生の獲得に関しては、予定の2回の入試では定員数をみだせず、3回目を2024年3月に計画した。2024年度の入学時の面接試験に関して、ルーブリック評価を開始した。

教育実践について、コロナ禍となってから、時期や学生の希望に応じてWEBでの遠隔授業と対面授業を組み合わせた授業を展開するようになり、今年度も組み合わせの授業が行われた。しかし、どちらかという対面の授業のほうが要望が高いと感じている。今年度も学生の要望を取り入れ、週末や夜間帯の授業が中心となった。引き続き学生の希望に応じて、臨機応変な体制を取っていきたい。

2023年4月21日、例年どおり、修士論文を提出する予定学生の研究計画発表会が行われた。その後、6月～7月の本学の研究倫理部会において各自が研究計画の審査を受け、研究を進めた。加えて、2022年度より秋季の研究計画発表会を開催することとなった。昨年度の研究科委員会では3年コースの学生用として検討されたことであったが、学生の研究内容によっては2年コースの学生も秋季に発表をさせたいという要望が指導教員からも出たため、規制をかけないこととした。これにより11月15日の発表会では、6名の学生が発表を行った。

今年度より学位審査基準において、評価の仕方を見直し、修士論文審査、最終試験採点表の両方にルーブリックを取り入れることとし、研究科委員会で審議した。学生からの要望には、学年歴を早めに確定してほしいとあり、次年度には対応するよう準備した。FD活動については、近年の災害の頻発に備え、大学の危機管理マニュアルの見直しも進められていることから『災害と研究』として研究科長西上あゆみが講演を行った。次年度に本学が一般社団法人日本災害看護学会第26回年次大会を開催することから、教育における「災害看護」や看護における災害看護学の発展について紹介する機会となった。

新たな取り組みとして、教職課程（養護教諭）の専修免許、助産課程の設置に関する準備を進めた。学部では養護教諭の免許取得ができることから、大学院で専修免許を取得できることで卒業生の学び直しとして、大学院への入学者確保につながると考えた。さらに助産師免許については学部生や卒業生より一定の希望があることからこれも入学者確保につながると考え、設置を計画した。

2022年度より大学院に関しても修了生の中から優秀学生への表彰が行われることとなった。また、

2023年2月14日行われた修士論文発表会では、4月からの入学予定者や学外からの参加者にも広く公開をした。

大学院生の研究活動について、3名の学生が研究計画書作成時に行った文献レビューを2つの学会で3題発表した。1) 病院に勤務する看護師の災害対策に関する意識調査の研究の動向(日本災害看護学会第25回年次大会)、2) 災害発生時の病院看護師の参集に関する研究の動向(同年次大会)、3) がん患者への防災教育に関する研究の動向(第29回日本災害医学会総会学術集会)である。

教育・学習環境については、今年度も学生より希望を聞いて、SPSSの導入をするなど、学習環境整備に努めた。学生数が増えるについて、研究室も手狭となってきており、今後も検討を重ねたい。また、下記の資料に示すように修了生や関係者を含めた研究会(通称ANA会)を企画、4月より月1回程度で開催し、大学院生間の交流に努めた。大学院入学後に本格的に研究を始める学生も多く、修了生や先輩から研究の進め方を教わったり、学会発表の予行としたり、情報交換の場となっている。

博士後期課程開講に関して計画はあげているものの、今年度も現在開講している分野の教員の補充に難渋することもあり、しっかりと取り組みができていないといえない。次年度より開設される健康科学研究科との連携の下、今後も設置に向けて取り組んでいきたい。

### 2023年ANA会(2023年4月発足)

現在参加者：11名(2023年12月現在)

開催月日と内容

第1回	4月16日 13:00 - 16:00	①国内の看護系学会の紹介 ②日本災害看護学会提出の抄録の発表会 ③実施予定のアンケート調査の検討
第2回	5月14日 13:00 - 16:00	①防災フォーラムの参加報告 ②現在取り組んでいる文献に関する報告
第3回	6月17日 14:30 - 16:00	研究計画書の書き方
第4回	7月15日 13:00 - 16:00	学会発表について
第5回	9月24日 13:00 - 16:00	①学会参加報告 ②ぼうさい国体参加報告
第6回	10月22日 13:00 - 16:00	①修士課程学生の研究計画発表会予行 ②病院の防災に関するシミュレーション研修 ③国家試験と災害看護
第7回	11月23日 13:00 - 16:00	①日本看護科学学会発表予行 ②「稲村の火の館」見学報告 ③アンケートの作成方法 ④在宅ケア学会参加報告
第8回	12月17日 13:00 - 16:00	①日本看護科学学会参加報告 ②文献整理 ③文献レビューの作成
第9回	1月27日 14:30 - 17:30	阿倍野防災センター見学
第10回	2月4日 13:00 - 15:00	①修士論文発表会予行 ②日本災害医学会発表予行
第11回	3月	修士課程学生の研究計画発表会予行

## 藍野大学 中央研究施設

藍野大学中央研究施設 施設長 栗原秀剛

### 人的構成

構成員	氏名
施設長	栗原秀剛（副学長、理学療法学科 特任教授）
学内研究員	山田義博（理学療法学科 教授） 田浦晶子（臨床工学科 教授） 稲盛修二（臨床工学科 教授） 山崎康祥（臨床工学科 准教授） 宮本陳敏（作業療法学科 講師） 塚越千尋（作業療法学科 講師） 林部美紀（作業療法学科 特任講師） 横山雛子（看護学科 助手） 三木志帆（実験補助技術員） 斎藤直美（実験補助技術員） 藍野大学の学生：臨床工学科 9名、理学療法学科 1名
客員研究員	井出千束（びわこリハビリテーション専門職大学 教授） 山田久夫（びわこリハビリテーション専門職大学 教授） 中野法彦（びわこリハビリテーション専門職大学 教授） 兼清健志（びわこリハビリテーション専門職大学 准教授） 安部征哉（びわこリハビリテーション専門職大学 講師） 長井雅代（中央研究施設客員研究員） 玉地雅浩（中央研究施設客員研究員）

### 研究活動

中央研究施設は、藍野大学を中心に、びわこリハビリテーション専門職大学を含む学校法人藍野大学全体の研究活動を推進・発展させる拠点として活動している。藍野大学中央研究施設は医学部を除いた医療系大学では珍しく電子顕微鏡など大型の機器が充実しているのが特徴である。本年度より新施設長のもとで、開設から経年劣化が進む設備について継続的な使用を可能とするためのインフラ整備を行っている。また、大学全体の研究活動の拠点として明確に位置づけるため、学内教員、客員研究員との共同研究はもとより、学部学生の卒業研究指導等を積極的に行った。

#### （1）共同研究施設としての体制の整備と機能の推進

中央研究施設は、大学で唯一の実験研究施設として本学並びに関連施設の教員・医師および学部学生に実験の場と研究機器を提供し、優れた研究成果を生み出すことを目的として活動している。また、共同研究を推進しており、学会や国際誌も含めた論文発表、科研費も含めた競争的資金の獲得、産学連携も含めた外部資金の導入、特許取得などの成果をあげている。本年は、動物施設の適正な環境整備のため、環境制御飼育装置エバック L の大規模な保守点検を行った。

(2) 研究施設独自の研究の推進

研究に関する今後の展望としては、臨床に直結したトランスレーショナルリサーチを推進し、国内のみならずグローバルに通用する最先端の研究を実践している。

**主な研究内容**

- (1) オルガノイドを用いた内耳再生に関する研究
- (2) Lmo2 転写因子複合体による血管新生制御
- (3) 腎臓に発現する新規分子の解析
- (4) 脊髄損傷モデルラット、マウスを用いた神経再生治療法の確立

**「2022 年度 中央研究施設シンポジウム」開催**

日時：2023 年 3 月 6 日

場所：MLC F201 アクティブコモンズ

2022 年度より設けられた「優秀研究賞」「研究奨励費」の採択者、および科研費新規獲得者を中心に 11 名が講演を行った。学長、学部長も出席され、ご挨拶をいただいた。午前、午後の長時間に渡り行われたが、総勢 39 名の来場者があり、質疑応答が行われた。

安藤 卓	研究奨励費	高齢者における抑うつ症状を予防する活動量基準の作成
藤本 智美	優秀研究賞	The influence of coping types on post-traumatic growth in patients with primary breast cancer (原発性乳がん患者の心的外傷後成長に対するコーピングタイプの影響)
熊部 翔	科研費 新規取得	超音波画像診断装置を用いた中間広筋の効果的なトレーニング方法の検討
山田 義博	Scientific Reports 掲載	LM02 転写因子複合体による血管新生制御
中田 裕二	研究奨励費	次世代シーケンサーを用いた薬剤耐性菌の分子疫学解析
田中 貴広	研究奨励費	Interval cryotherapy が筋力トレーニング、パフォーマンス、遅発性筋痛に与える影響
梅田 英子	科研費 新規取得	1 型糖尿病患者の療養と社会生活の両立を支援するソーシャルサポートの開発と評価
福山 友見	科研費 新規取得	日本人アスリートのスポーツ損傷における発症頻度の個人差に遺伝子多型が及ぼす影響
大和 洋輔	優秀研究賞研究奨励費	下腿三頭筋に対するスタティックストレッチングが後脛骨動脈の血流量に及ぼす影響

真下いずみ	優秀研究賞	Effects of Home-visit Occupational Therapy Using a Management Tool for Daily Life Performance on Severe Mental Illness: A Multicenter Randomized Controlled Trial 生活行為向上マネジメントを用いた訪問作業療法による重度精神障害者の社会機能改善効果—多施設共同ランダム化比較試験
松本 晃子	研究奨励費	看護学生から新人看護師への役割移行の実態

## 研究成果 (抜粋)

### 論文

- ・Yoshikawa K, Kunishima S, **Kurihara H**, Takahashi K, Fukuda A, Murai K, Echizenya T, Nakaya I, Soma J: Renal injury associated with MYH9 disorder with 5773delG mutation: a case report Clin Nephrol 99(3):153-160, 2023
- ・Takahashi K, **Kanekiyo K** (equally contribution), Sakuda K, Muto Y, Iguchi M, Matsuda N, Hashimoto Y, Kanai K, Ogawa H, Hirase H, Kakita A, Bizen N, Takebayashi H, Kawaguchi Y, Uzuki M, Kitazume S. Brain-specific glycosylation of protein tyrosine phosphatase receptor type Z (PTPRZ) marks a demyelination-associated astrocyte subtype. Journal of neurochemistry, 166(3):547-559, 2023.4
- ・**Nagai M**, Kaji H. Thermal Effect on Heat Shock Protein 70 Family to Prevent Atherosclerotic Cardiovascular Disease. Biomolecules 2023, 13, 867. <https://doi.org/10.3390/biom13050867>
- ・**TAURA A**, OHGITA H, FUNABIKI K, SUJI J. A study of the head positional nystagmus in a PPPD case successfully treated with SSRI and vestibular rehabilitation (a case report) AINO JURNAL: 2022. Vol.20:11-16
- ・高畑脩平, **塚越千尋**, 江尻知穂, 松本康志, 津田勇人. 視機能の専門家と作業療法士の協働～「見る」ことに問題を抱える2事例を通して～ 大阪 OT ジャーナル 2023 ; 37 (1) : 33-39
- ・高田昌寛, 阪上奈巳, 熊部翔, 青山宏樹, **塚越千尋**, 山科吉弘. キャンパス内における障がい者の働く場所と学生がつながる仕組みの創出. 地域理学療法学, 2023; 3: Online ISSN : 2758-0318
- ・森田真美, **田浦晶子**, 伊藤通子, 宮崎眞和, 辻純, 嘉田真平, 安里亮. 喉頭蓋顆粒細胞腫例. 耳鼻咽喉科臨床 ; 2023 年 116 卷 6 号 p. 593-599
- ・**中野法彦**, **兼清健志**, **井出千束** : 脊髄再生のメカニズム、細胞、55 (10)、810-812、2023
- ・**井出千束**, **中野法彦**, **兼清健志**, **安部征哉**, **塚越千尋**, **宮本陳敏**, **玉地雅浩**, **横山雛子**, **林部美紀** : 脊髄の再生—再考—、びわこ健康科学、1 巻、11-17、2022 (12 月 28 日公開のため 2022 年度には未掲載)

### 学会発表等

- ・**Yamada Y** : The basic helix-loop-helix transcription factor LYL1 stabilize the tumor blood vessel. The 82nd Annual Meeting of the Japanese Cancer Association (Yokohama)

September 21-23, 2023

- ・ Ejiri C. Luo Z. **Tsukagoshi C.** Nagao T. Tanemura R. The Characteristics of the Alpha/Beta Ratio in Patients with Fatigue after Traumatic Brain Injury in Relation to Workload. INS Taiwan Meeting, Taipei, July 7
- ・ Wakashima H, Kishino K, Iizuka S, **Tamachi M.** Wesugi S. Design of Wearable Tensegrity Structures Focusing on the Tension Propagation Function throughout the Body. Proceedings of the Design Society, 3. P.1287-1296, (2023.7.27)(Bordeaux in France)
- ・ Nakanishi E, **Tamachi M.** Hashimoto T. EFFECTIVENESS OF STIGMA REDUCTION PROGRAM THROUGH CO-PRODUCTION WITH DIALOGUE IN HEALTH SCIENCE STUDENTS AND PERSONS WITH MENTAL ILLNESS. 23rd WPA World Congress of Psychiatry.(2023.9.28) (VIENNA, AUSTRIAVIENNA, AUSTRIA)
- ・ **Miyamoto C.** Application of SI in ASD: Occupational Therapy Perspectives (ASDにおけるSIの応用:作業療法の展望) . 2023 The 4th Interdisciplinary Public welfare forum on Autism Spectrum Disorders (Online Conference, Chengdu, 2021.4. 20)
- ・ **Miyamoto C.** Trends in stroke rehabilitation treatment in Japan (日本の脳卒中リハビリテーション治療の動向) 2023 China Guangdong Stroke Non-acute Rehabilitation Forum (Online Conference, Shenzhen.2023.12.2)
  
- ・ 紅林秀治、**山田久夫**: 折り紙における手指の関節の動きの調査. 第28回基礎理学療法学会, 広島 2023年12月3日
- ・ 高田昌寛, 阪上奈巳, 熊部翔, 青山宏樹, **塚越千尋**, 山科吉弘. キャンパス内における障がい者の働く場と学生がつながる仕組みの創出. 第60回日本リハビリテーション医学会学術集会, 福岡, 2023.7.2,一般口演 127
- ・ 江尻知穂, 羅志偉, **塚越千尋**, 長尾徹, 種村留美. 頭部外傷者における作業負荷時の易疲労・ストレスの特徴—疲労可視化と易疲労コントロールのための予備的研究— 第57回日本作業療法学会, 沖縄, 2023.11.11, 口述発表 OK-3-5
- ・ **安部征哉**, 権野めぐみ, 野村照夫, 来田宣幸, 森原徹. 足趾動作の定量的評価による足趾機能評価の可能性 第34回日本臨床スポーツ医学会学術集会 (横浜) 2023.10
- ・ **田浦晶子**, 大西弘恵, 西村幸司, 扇田秀章, 伊藤壽一, 大森孝一. ヒト内耳オルガノイドを用いた前庭再生への試み. 第22回日本再生医療学会、京都、2023年3月24日
- ・ **田浦晶子**, 扇田秀章, 西村幸司、伊藤壽一. 内耳前庭における血管新生と低酸素応答についての検討. 第82回日本めまい平衡医学会、新潟、2023年10月26日
- ・ **玉地雅浩**. 歩き続けるために生み出される身体の変容について -哲学と脳科学及び神経生理学の観点から-. 第42回日本医学哲学・倫理学会(2023.10.14)(上智大学, 東京)
- ・ 井上寛介, 青木芳樹, **玉地雅浩**, 上杉繁. 触圧覚刺激法に着目した運動機能向上のための肘関節を対象とする実験的装置の開発. スポーツ工学・ヒューマンダイナミクス 2023 (2023.11.12)(名城大学, 名古屋)
- ・ 青山凌太, 玉木 岳, **玉地雅浩**, 上杉繁. 歩行時における下肢動作の支援を目的とした装着型テンセグリティ構造体の開発. スポーツ工学・ヒューマンダイナミクス 2023 (2023.11.12)(名城大学, 名古屋)

- ・中西英一、玉地雅浩、橋本健志. 対話・共同創造プログラムの作業療法学科学生と精神障害者に対するスティグマ低減効果. 第57回日本作業療法学会(2023.11)(沖縄コンベンションセンター)
- ・玉地雅浩. 脳卒中やパーキンソン病を発症した方の知覚世界を、哲学、生態心理学、医学、認知科学を基に考察する. 第4回ヒューマンパフォーマンス研究所シンポジウム, 日本科学未来館, 2023.5.13.
- ・宮本陳敏. 地域在住高齢者における呼吸機能と握力の関係. 第57回日本作業療法学会(沖縄、沖縄コンベンションセンター、2023. 11.10 - 12)
- ・宮本陳敏. 外国籍の生徒のご家庭に適切に対応していただけるためには. 大阪府立西淀川支援学校, 2023.8.30
- ・宮本陳敏. 母国の働く文化と日本の働く文化の違い. OFIX 外国人材を受け入れ企業向けの研修、マイドームおおさか、2023.9.7
- ・森本康一、兼清健志、中野法彦、國井沙織、永井宏平、尾前薫、井出千束、宮本裕史：ラット脊髄挫滅モデルでの細胞低接着性コラーゲン埋植による組織修復再生機能の検証、第52回日本脊椎脊髄病学会学術集会、札幌コンベンションセンター(札幌)、令和5年4月13-15日(一般口演)
- ・中野法彦、兼清健志、森本康一、國井沙織、永井宏平、井出千束、宮本裕史：ラット脊髄損傷モデルにおける細胞低接着性コラーゲン注入による組織再生の検討、第38回日本整形外科学会基礎学術集会、つくば国際会議場(つくば)、令和5年10月19-20日(ポスター)

#### 新聞、雑誌、放送等

- ・玉地雅浩. なぜできないのかを考えることも大事ですが、なぜできるのかについて考えることも同じくらい大切です. PT ジャーナル 2020 ; 54(7) : 828.

### 中央研究施設管理運営委員会

#### 構成(令和5年度)

栗原秀剛、中田裕二、山田義博、宮崎浩、田浦晶子、宮本陳敏

#### 令和5年度 委員会開催日

	開催日	審議事項
第1回中央研究施設管理運営委員会	2023年8月7日～8月9日	・2023年度第2次補正予算について
第2回中央研究施設管理運営委員会	2023年12月5日～12月8日	・2024年度中央研究施設予算について ・新たに提出された「利用登録申請書」について

### 動物実験部会

#### 構成(令和5年度)

栗原秀剛、中田裕二、山田義博、田浦晶子

令和5年度部会開催日

	開催日	審議事項
第1回動物実験部会	2023年5月8日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2022年度動物実験報告書、および自己点検票について</li> <li>・「動物実験計画書」の書式変更について</li> </ul>
第2回動物実験部会	2023年5月17日～5月19日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・追加申請のあった「動物実験計画書」1件の審議</li> </ul>
第3回動物実験部会	2023年11月20日～11月22日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・提出された「動物実験計画(変更・追加)承認申請」1件の審議</li> </ul>
第4回動物実験部会	2023年12月4日～12月5日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「中央研究施設使用細則」の変更について</li> <li>・「動物実験規程」の改訂について</li> </ul>

承認された研究課題 (2023)

承認日	研究課題名	実験責任者	備考
2023年 3月28日	脊髄損傷モデルラット、マウスを用いた神経再生治療法の開発	兼清健志	更新
2023年 3月28日	終系上衣細胞の培養方法の確立と移植効果の検討	井出 千束	更新
2023年 3月28日	Lmo2 転写因子複合体による血管新生制御	山田義博	更新
2023年 3月28日	骨髄間質細胞をはじめとする体性幹細胞由来の神経突起伸長因子の解析	中野法彦	更新
2023年 3月28日	脊髄損傷における新規電気刺激リハビリ方法開発へ向けた生化学的解析によるアプローチ	宮本陳敏	更新
2023年 3月28日	ラット体外循環での長期生存モデルの確立と体外循環での炎症反応抑制に向けた検証	山崎康祥	更新
2023年 3月28日	オルガノイドを用いた内耳再生に関する研究	田浦晶子	更新
2023年 3月28日	微小重力環境における内耳に関する研究	田浦晶子	更新
2023年 3月28日	内耳再生に関する研究	田浦晶子	更新
2023年 3月28日	Lmo2 転写因子複合体による内耳血管新生制御に関する研究	田浦晶子	更新
2023年 3月28日	脊髄損傷ラットに対して集団での自発歩行の運動機能と形態学的分子生物学的効果の検証	林部美紀	更新
2023年 3月28日	腎臓に発現する新規分子の解析	栗原秀剛	新規

2023年 3月28日	体外循環・補助循環における生理的拍動流発生装置の開発および拍動効果の検証	稲盛修二	更新
2023年 3月28日	脊髄損傷モデルラットを用いた自発的リハビリテーションの有効性の検討	塚越千尋	更新

#### 動物使用数

年度	ラット	マウス	合計
2022年	158匹	136匹	294匹

#### 動物実験講習会の開催

##### 第28回 動物実験講習会

開講日：2023年3月3日

参加者：9名

##### 第29回 動物実験講習会

開催日：2023年3月7日

参加者：12名

##### 第30回 動物実験講習会

開催日：2023年3月15日

参加者：4名

##### 第31回 動物実験講習会

開催日：2023年12月14日

参加者：12名

## 実験動物慰霊祭の举行

昨年に引き続いて実験動物慰霊祭を举行した。

举行日：2023年11月13日

出席者：佐々木恵雲学長、栗原秀剛施設長、田浦晶子教授、山田義博教授、稲盛修二教授、井出千束教授、中野法彦教授、兼清健志准教授、宮本陳敏講師、安部征哉講師、横山雛子助手、三木志帆実験補助員、臨床工学科4回生5名

- 一、 開式の辞
- 一、 学長挨拶                    藍野大学 学長 佐々木恵雲
- 一、 黙祷
- 一、 慰霊のことば              藍野大学中央研究施設長 栗原秀剛
- 一、 献花
- 一、 閉会の辞



## 藍野大学・藍野大学短期大学部事務センターの取り組みとこれから

大阪茨木キャンパス事務局  
事務局長 小林 正明

2023年度、AINO VISION 2030 REPORT Vol2 のロードマップに示された各設置校の取り組みが確実に進められている。藍野大学においても健康科学研究科の設置認可、3学部改組転換及び新学科設置計画は、文部科学省への事務相談を踏まえ検討を進める中で、2学部への改組に向けた検討を進めている。また、大学基準協会による認証評価においても教職協働による取り組みの大きな成果として適合の評価を受けることができた。

学生募集においては、大学全体としてオープンキャンパスでは一定の参加者があったものの志願者数の減少がみられ、合格者の歩留まりについても例年と異なる状況があった。

近畿圏の同系統の学部・学科を有する他大学においても同様の状況があり、近畿圏において医療系の大学（学部・学科）の厳しい状況が続く。

昨年度からの学生募集の取り組みとして、①次年度予算で示されている入学者数の目標数値を、入学試験の形態毎に過去複数年の志願者、受験者、合格者、戻り率等から勘案し設定②各オープンキャンパスからの受験者数を過去複数年の参加者から受験率を算出し、学科毎にオープンキャンパスの参加者目標を設定③各オープンキャンパス終了時には当該オープンキャンパスの増減を踏まえ目標設定の修正などおこなった。

また、入学生に対するアンケートを実施し、その分析を踏まえて特に募集媒体の見直しや、オープンキャンパスではヒアリングしづらい情報を収集し新たな募集戦略に向けた取り組みをおこなった。

学生募集全般的に一般選抜を中心としていた大学が年内入試にシフトを切ってきていること、作業療法士、臨床工学技士など社会的に職業認知度が低い問題、全般的に同系統の志願者減等の要因で学生確保が厳しくなっているため、今一度、年内入試による学生確保の募集戦略を再考していきたい。私見ではあるが、一般選抜が中心だった大学の募集戦略から募集媒体とオープンキャンパス参加者のフォローアップを中心とした専門学校の募集戦略を経て、中学校、保護者、生徒、オープンスクール参加者のフォローアップを中心とした高等学校の募集戦略へと移行していつているように強く感じる。

一般的な取り組みではあるが、如何に高等学校の低学年の生徒にアプローチし藍野大学の魅力、医療職の魅力を、時間をかけ本学に対する興味・関心を高め安定的な学生募集に繋げていきたい。

昨年度、18歳人口の減少、競合他校の増加を背景に資料請求、オープンキャンパス等の反響者数の減少も顕著に現れている。本学では、高大連携の強化として高等学校と高大連携協定を締結しているが、今年度より本法人の一員となった明浄学院高等学校（普通科）との高大連携協定の強化について、教育の連続性を含めた高大接続を模索していきたい。

今後の募集戦略において、明浄学院高等学校との高大接続が安定した学生募集に繋げるための重要なポイントとなる。

一般的な高大接続の取り組み強化として、同法人内の高等学校との一貫教育の強化、他法人の高等学校との連携協定の締結など、年内入試を視野にした選抜から、接続へと高等学校と大学の学びの接続が重要な取り組みとなってきている。

本学においても今後、明浄学院高等学校との一貫教育、高大接続・連携が重要な取り組みであり具体的な検討を進めていきたい。高等学校との連携に伴う大学にとっての大きなメリットについて、大阪府下の中学校、生徒、保護者などに「藍野大学」「医療職」の魅力を低学年から時間をかけて広報することが

できる。もちろん、入試広報のように単年度の成果にはつながらないが、ブランディング広報としての効果は絶大なものがある。

明浄学院高等学校が、監督官庁（大阪府）、大阪府下の中学校・生徒・保護者から大きく注目を集めていることは今年度の入試結果からも伺える。

（入試結果）

普通科	入学定員 180 人	専願 206 人合格	併願 163 人合格
衛生看護科	入学定員 120 人	専願 153 人合格	併願 39 人合格

明浄学院高等学校は 2024（令和 6）年 4 月に、衛生看護科を設置、藍野高等学校衛生看護科の教育を継承し、大阪の中心街で新たに地域医療を担う人材養成に着手することとなった。併せて、支援契約の大きな事業である大阪阿倍野キャンパス総合整備計画第一期明浄学院高等学校新校舎及びアリーナを竣工し、生徒、教職員及び明浄学院高等学校を選ばれる方々に安心して教育活動や課外活動等を提供できる教育環境の整備をおこなった。

また、学校法人藍野大学大阪阿倍野キャンパス総合整備計画第二期として、2025（令和 7）年 4 月、藍野大学短期大学部第一看護学科と同短期大学部第二看護学科を統合し、大阪阿倍野キャンパスに移転し、明浄学院高等学校から藍野大学短期大学部及び藍野大学への接続を一貫教育によりを強化し、大阪阿倍野キャンパスにおける「AINO NURSE ISLAND構想」を推進していくとしている。

これに伴い、大阪茨木キャンパス事務局においては、2025 年 4 月に向け 2024 年度が事務組織体制の再編で現在の藍野大学と藍野大学短期大学部第一看護学科、専攻科を一元化した事務組織体制を新たに見直す最終年度となり、前任者の垣尾局長が取り組まれた業務の標準化、業務の効率化、業務の省力化、教務事務システムの見直しについて、継続して取り組み、業務が高度化・多様化する中、管理運営業務を担うことができる問題発見と解決策の立案・実行力を兼ね備えた事務職員の育成に繋げていきたい。

## 中央図書館の役割：市民に開かれた図書館をめざして

藍野大学中央図書館長 山田義博

昨年から、中央図書館は佐々木学長の方針にそっていくつかの老朽化した設備や内装を一新して“市民に開かれた図書館を目指す”方向で動き始めている。設備更新の3年の初年度が本年であったが設備面の充実は多くの方々の努力で初年は大きな前進があり、設備面は充実してきている。ただ、本年の前進はあまり目につかないところの前進が多く、パッと見ただけではわからない。常時利用をされている先生方や学生たちは随分快適になったことが実感できるはずです。

さて、今後は来年度から内装のうち照明や床、入口ゲート等パッとみてわかる改善が進むと期待され、2年後には茨木市で最も美しい建物の一つになると館長周囲は期待している。

市民も利用できる図書館となると、今後は広く近隣の方々に知的な（読書を中心とした）リクリエーションを提供する場となっていくわけだが、原点に立ち返って大学図書館の研究サポート機能について本年は書いておきたい。中央研究施設を中心に整備されている機関リポジトリは、以前から図書館にあったリポジトリを拡張整備するかたちで整えられている。今後も本学より発表された論文のPDFをリポジトリにも登録可能で、教員の研究活動の広報に役立つはずである。国立大学の図書館では、論文の投稿先の選び方、レファレンスの作成法、Pubmed等の論文検索のためのデータベースの利用法等についてのガイダンスや講習をアップロードしているところも多く筆者もよく利用している。本学中央図書館でも利用できるデータベースについては導入時に講習会を開いたし、図書館員も随時利用のしかたは伝えてくれている。予算の関係で、論文の全文を入手する場合は個人研究費からの支出をお願いする場合があると思うが、図書館同士の相互利用による文献の取り寄せサービスは大変お得で、雑誌社から買うと3000円程度かかる文献が相互利用により300円でコピーできた時は涙がでるほど嬉しかった。

今後は、知的なリフレッシュを味わえる場に図書館を前進させていくとともに、本来の研究サポート機能もレベルを落とすことなく充実させていきたい。蔵書数や本の収集のレベルはすでに誇れるものがあり、中身だけでなく内装が一新された中央図書館にご期待ください。

(令和6年1月15日)



# 2023 年度の出来事



## 2023 年の FD・SD 推進活動

FD・SD 推進部会長 酒井 浩

本学における FD・SD 推進委員会は、内部質保証委員会が行う自己点検と改善における PDCA サイクルに従い、主として、

- 1) 授業アンケートの実施、
  - 2) ベストレクチャーアンケートの実施と選出、
  - 3) FSDS 研修会の開催、
  - 4) その他、必要に応じた教育研究における研鑽活動
- といった 4 つの活動を行っている。

2023 年は新型コロナウイルス感染症が収束に向かい、世の中は再びコロナ禍前に戻りながらも、コロナ禍による影響が人々の暮らしや心に残存し、それにどう対峙するかが課題となる 1 年であったといえる。

コロナによって人々の暮らしが変化し、一度はリモートワークの効果が叫ばれたものの、日本社会がこれまで築いてきた集団の統制には不向きな一面もあり、リモートワークの解消を求める動きが始まった。大学教育においても、一部の学習意欲の高い学生にとって、遠隔授業は時間を有効に活用し、何度も繰り返し視聴できる意味で遠隔授業は効果的であると考えられるが、他方、受身的な学習を基本姿勢とする学生においては、知識定着が難しく、授業の視聴を時間内で継続することそのものが困難な場合もあると考えられ、このようなタイプの学生には不向きであると考えられ、本学においても対面式授業（対面授業）を全面的に再開し、感染予防の工夫をしながらその割合を増加させることに努力し、2023 年度からは対面授業を基本とすることになった。

このような学習効果をもとにした見解だけではなく、これまでコロナ禍で対面的交流が疎となったことの影響は、人々の心理的な側面にも影響を与えており、画面上での交流が我々の心理面に与える影響が問題視された。2023 年度 FSDS 研修では、このようなコロナ禍でのコミュニケーションが、心理面に与える影響を考え、「しんどい学生をどう発見するか」「ポストコロナにおける学生・保護者との関わりを考える」という研修会を開催した。

また、昨今の価値の多様化のうち、性の多様化である LGBTQ を取り上げ、「LGBTQ の理解と大学として取り組むべきこと」というテーマでの研修会を行い、多様な価値を受け入れたうえで、学びの場である大学がどのように対応していくべきかを考える機会を得た。

これらの研修内容を踏まえて、従来以上に学生や保護者と丁寧なコミュニケーション機会を持ち、多様な心の変化、価値を理解し、そのうえで大学として最善の学びを提供していけるように努力していくことの必要性を感じることができた。

さらに、少子高齢化が加速するなかで、2023 年度は高校 3 年生がもっとも少なくなる年であるとされており、我々は大学存続をかけて、大学のブランディングに注力しなければならない状況となっている。実際、2024 年度入試では志願者減が明瞭になり、高校生から選んでもらえる大学になっていくことは、待ったなしの課題と位置づけられている。この厳しい局面を打開するべく、当学において、新学部・新学科・新コース等の設置を構想しており、構想を教職員に周知するための機会として、「学部・学科・コース等の設置について」をテーマとし、学長からの構想説明の機会が持たれた。

下の表に、以上のことを含む2023年度開催のFDSD研修会一覧を示す。

表 2023年度 FDSD研修会一覧

---

**【研究倫理・コンプライアンス】**

- ・研究倫理FD研修会
- ・研究倫理教育(コンプライアンス)研修会

**【科研費・競争的資金獲得に向けた内容】**

- ・「採択されるための研究計画書作成のポイント」
- ・「採択にむけた工夫(採択者からの提言)①」
- ・「採択にむけた工夫(採択者からの提言)②」

**【大学院研究に関する内容】**

- ・「災害と研究」

**【授業改善に向けた内容】**

- ・「ティーチングポートフォリオの作成・活用と成果の可視化」

**【学習環境改善・多様化に関する内容】**

- ・「しんどい学生をどう発見するか」
- ・「ポストコロナにおける学生・保護者との関わりを考える」
- ・「LGBTQの理解と大学として取り組むべきこと」

**【大学の将来構想に関する内容】**

- ・「学部・学科・コース等の設置について」
- 

その他、授業アンケートやピアレビューを通じた授業改善の取り組みを行っているが、参加率やアンケート回収率が伸び悩んでおり、この対策として対面での研修会のみでなく、リモート参加を容認することや、研修会後のビデオ視聴機会を持つことで、参加率やアンケート回収率向上に努めている。

今後も将来構想に沿ったもののみではなく、その時代における本大学の課題を認識し、改善していくための活動を継続し、よりよい大学を目指していきたいと考えている。

## 卒業後アンケート調査からみえたもの

教学 IR 室 杉山芳生

### 1. はじめに

教学 IR 室では、毎年さまざまな調査の分析を行っています（例えば、MLST、授業アンケート（学習状況把握用）、授業アンケート（実践把握用）、学習行動調査、卒業時アンケート調査など）。その中でも今回は、2022 年度から新たに実施され、昨年度本誌で紹介させていただいた「卒業後アンケート調査」の、2 年目の調査結果について報告させていただきます。大学教育において、在学中のみならず、卒業後の卒業生の生活を見据え、卒業生と卒業生の就職先からの意見を大学の教育改善に活かすことが求められるようになり、「卒業後アンケート調査」の重要性が増しています。なお昨年度同様、「卒業後アンケート調査」は、本学の大学院修了生も対象として実施しておりますが、まだ修了生が少なく、回答が少なかったことから、本報告では省略させていただきますことご了承ください。

### 2. 卒業後アンケート調査の背景と調査デザイン

昨年度本誌で紹介させていただいた内容と重複してしまう部分もありますが、まず「卒業後アンケート調査」の背景と調査デザインについて説明させていただきます。

大学教育の質的転換において、大学には、既存のシステムを前提とした「供給者目線」を脱却し、学位プログラムが、学生が必要な資質・能力を身につける観点から最適化されているかという「学修者目線」で教育を捉え直すことが求められています（中央教育審議会大学分科会, 2020）。つまり、大学側が一定の資質・能力を備えた卒業生を一方向的に供給するだけでは不十分であり、社会において実際に必要とされる資質・能力を見定め、学生が社会に出た後に実際にその能力を活かしているかを確認しながら、教育改善の PDCA を回していくことが要求されているといえます。

本学でこれまで実施してきた「卒業時アンケート調査」は、卒業時点での満足度や学習成果を継続的に把握する上では、非常に重要な調査ですが、在学生を対象としたものであり、時間的にも空間的にも大学内の範囲に収まったものでした。そのため、卒業後に働いた経験を通じた本人の能力の獲得感やその必要性の認識、大学の満足度、就職先からの客観的な評価や、求める資質・能力、教育活動のニーズを調査する「卒業後アンケート調査」が必要になり、2022 年度から本調査を実施しています。

卒業後アンケート調査は、卒業生本人に答えていただく「卒業後アンケート調査（卒業生用）」と、卒業生の就職先施設の担当者に答えていただく「卒業後アンケート調査（就職先の施設用）」の 2 つに分かれています。卒業生用は、本学を卒業後 1 年、3 年を経過した（卒業後 2 年目、4 年目の）卒業生を対象に、実際に働いてみて感じた DP の獲得感や重要性の認識、必要な資質・能力、現場での課題への向き合い方、本学の教育・研究活動の満足度などを聞くものです。一方、就職先の施設用は、本学と他大学の卒業生の DP 獲得状況や課題への向き合い方の違い、就職試験等を想定した場合に特に重視する資質・能力などを聞くものであり、特に、本学と他大学の卒業生に対する就職先担当者からの評価を比較し、本学卒業生の特徴を明らかにすることに重きを置いています。両調査とも昨年度と同様に 7～8 月頃に実施しました。

### 3. 2023 年度卒業後アンケート調査（卒業生用）の結果概要

卒業後アンケート調査（卒業生用）では、看護学科の卒業生 2 名、理学療法学科の卒業生 41 名、作業療法学科の卒業生 33 名の、計 76 件の有効回答を得ることができました。臨床工学科の卒業生は 1 件の回答がありましたが、質問項目についての回答がなされていなかったため、無効回答となりました。全体としては前年度より回答数が増えましたが、一部回答が少ない学科もありましたので、学部として全学科をまとめた回答結果の中から、特徴的なものを紹介していきます。

#### 3.1. 卒業生の能力獲得感と重要性の認識

まず、卒業生の DP に掲げられている能力の獲得感とその重要性の認識に関する各項目の平均値を図 1 にまとめています。この項目は 5 件法（当てはまらない:1～当てはまる:5）のため、3.0 が理論的な中心（真ん中の値）になります。能力の獲得感と重要性の認識のどちらにおいても、3.0 を下回る項目は無く、本学が現在掲げている DP において、獲得が不十分であったり、重要だと思われていなかったりするような項目は無いと考えてよいでしょう。また、能力の獲得感と重要性の認識において最も差が出たのは、「協働的な問題解決」で 0.79 ポイントの差がありました。つまり、卒業生は、比較的に他の能力よりも、「協働的な問題解決」が重要だと思っているが身につけていないと感じているということになります。ただし、前年度の卒業後アンケート調査では、「協働的な問題解決」の平均値が 3.51 であり、その重要性の認識は 4.28 でした。今年度は獲得感と重要性がともに前年度よりも少し高い得点となっており、より「協働的な問題解決」の重要性が認識されるようになってきていることもうかがえます。また、「汎用的な技能」（前年比+0.20 ポイント）、「アカデミックな探究」（前年比+0.10 ポイント）も他の項目に比べ、前年の調査時よりもより重要視されているようです。

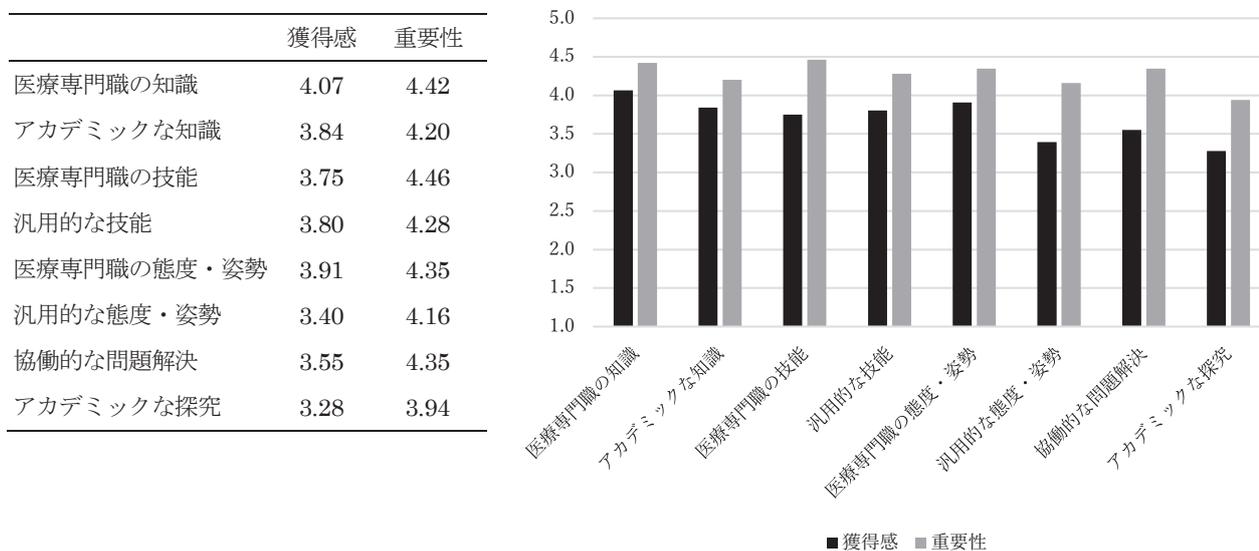


図1 卒業生の能力の獲得感と重要性の認識

#### 3.2. 卒業生の大学満足度

次に注目したいのは、卒業生の大学満足度になります。こちらについては、5 件法のそれぞれの選択率を円グラフでまとめました（図 2）。一般的に、大学満足度は「少し満足している」と「とても満足している」を選択した割合で出されるため、今回の本学卒業生の大学満足度は 68.1%ということになります。前年度調査の 70.6%よりは低くなってしまいましたが、ベネッセ教育総合研究所（2021）が全国の大学生を対象に実施している調査では、2021 年度の大学満足度が 55.6%、最も高かった 2008

年度でも 64.1%なので、依然として本学の満足度は高いといえそうです。

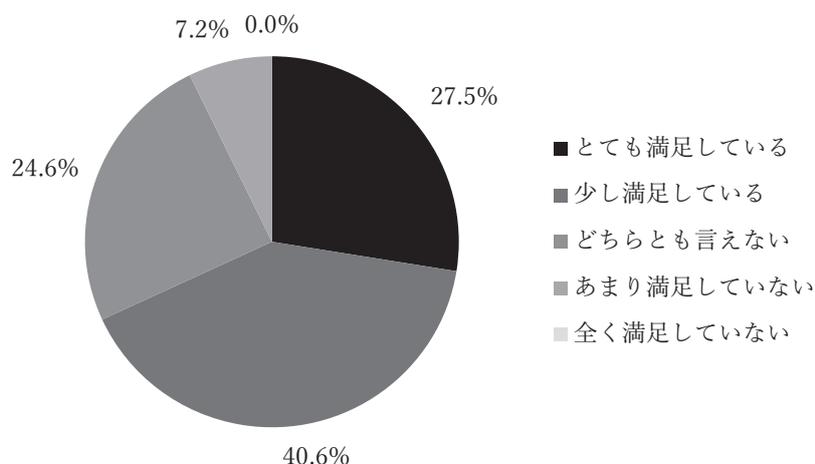


図2 卒業生の大学満足度

#### 4. 2023 年度卒業後アンケート調査（就職先の施設用）の結果概要

次に、卒業後アンケート調査（就職先の施設用）の結果についてみていきます。こちらは、看護学科卒業生の就職先施設 37 件、理学療法学科卒業生の就職先施設 50 件、作業療法学科卒業生の就職先施設 46 件、臨床工学科卒業生の就職先施設 18 件の、計 151 件の有効回答を得ることができました。前年度は 90 件でしたので、回答数が 1.68 倍増えたこととなります。なお、同施設から複数回答があるものもありましたが、回答者が異なると判断し、それらも有効回答として集計しています。この回答結果の中から、特徴的なものを紹介していききたいと思います。

##### 4.1. 本学と他大学の卒業生の DP 獲得状況の違い

この質問項目では、卒業生の就職先施設の担当者に、「藍野大学を卒業している看護師（この部分は学科によって変更）に対する、あなたの評価をお伺いします。藍野大学を卒業している看護師は、次に挙げる資質・能力等を身につけていると感じますか」と尋ね、本学の DP の各項目について 5 件法（当てはまらない:1～当てはまる:5）で回答していただきました。また、同様の形式で、「藍野大学以外の大学を卒業している看護師に対する、あなたの評価をお伺いします...」と他大学の卒業生についても回答していただき、その結果を比べたものが図 3 になります。全学的には「医療専門職の知識」「医療専門職の技能」「医療専門職の態度・姿勢」「協働的な問題解決」について、他大学の卒業生と比較し、本学の卒業生の方が有意に資質・能力が高いという結果になりました。ただし、学科別では、理学療法学科卒業生の「医療専門職の知識」「医療専門職の技能」「医療専門職の態度・姿勢」「汎用的な態度・姿勢」、臨床工学科卒業生の「医療専門職の知識」のみ有意に高く、それ以外は統計的には誤差の範囲ということになります。有意に低いような項目はありませんでしたが、このように学科ごとに違いがあるという点には注意が必要です。

2023年度の出来事

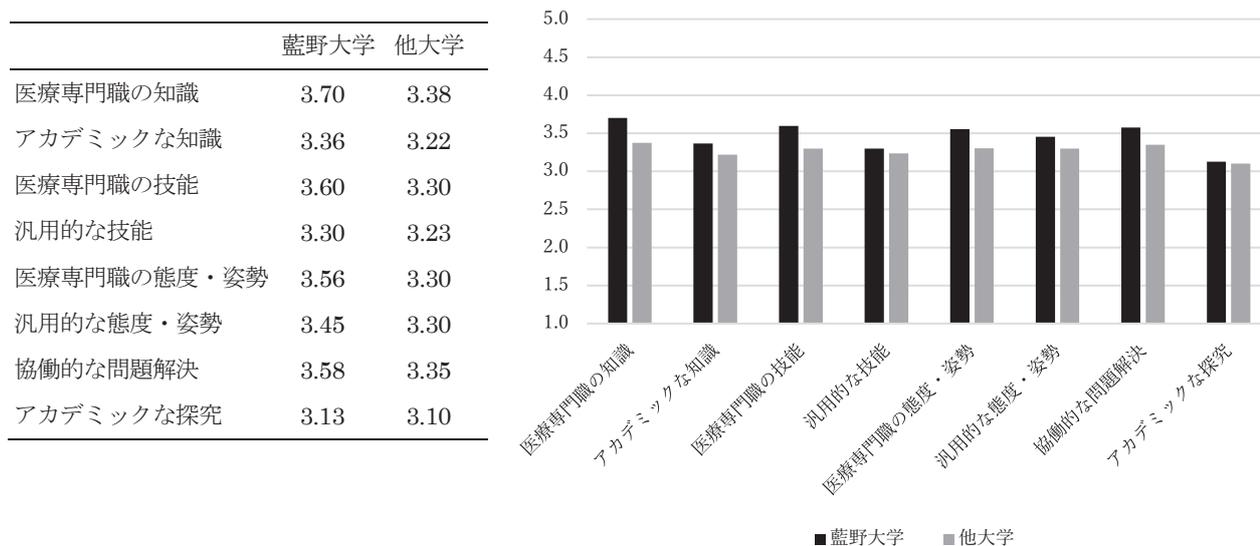


図3 本学と他大学の卒業生のDP獲得状況の違い

#### 4.2. 本学と他大学の卒業生の学習や課題への向き合い方の違い

こちらは、在学中に学習行動調査で調査している主体的学習態度など、学習や課題への向き合い方に関する一部の質問項目について、卒業後の状況を6件法（全く当てはまらない:1～非常によく当てはまる:6）で担当者に回答していただいたものになります。前述の項目と同様に、他大学の卒業生と比較できるように調査しています。その結果、図4のように、全学的には「エージェンシー」「成長的マインドセット」「主体的学習態度」が、他大学の卒業生よりも有意に高い結果となりました。これまでの年報で報告させていただいているように、「成長的マインドセット」は、これからの未来を生きるための主体的な学習にとって必要な資質・能力といわれており、「エージェンシー」や「主体的学習態度」もDPに掲げている能力を下支えするものとして重要なものとなります。本学卒業生の就職施設担当者に、高く評価されていることは、非常に喜ばしいことであり、今後もこのような評価が得られるように、教育改善を続けていくことが望まれます。なお、こちらも学科ごとに様相が異なる点には注意が必要です。

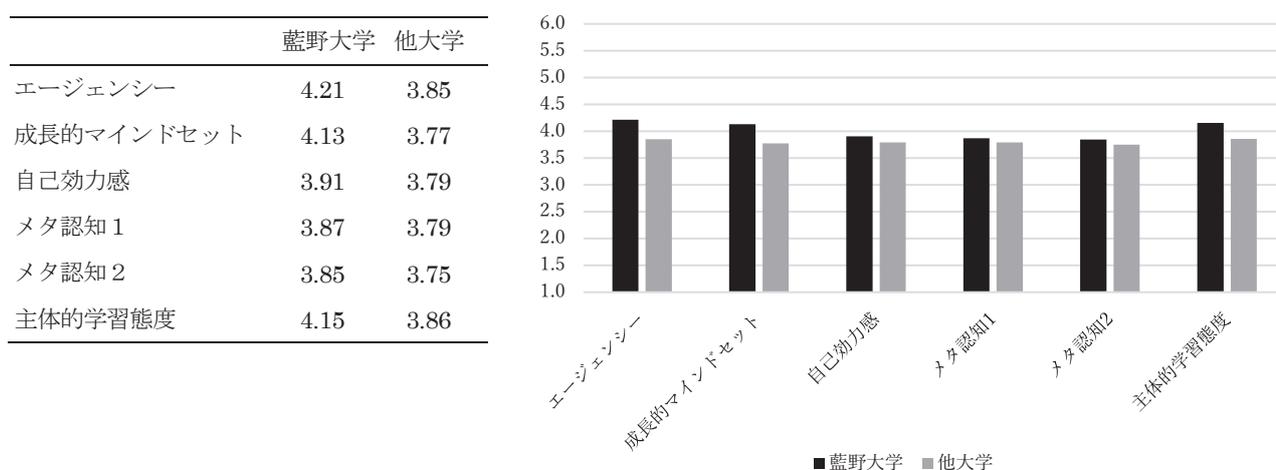


図4 本学と他大学の卒業生の学習や課題への向き合い方の違い

【引用文献】

- 1) 中央教育審議会大学分科会(2020)「**教学マネジメント指針**」([https://www.mext.go.jp/content/20200206-mxt\\_daigakuc03-000004749\\_001r.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200206-mxt_daigakuc03-000004749_001r.pdf))(2023 年 11 月 9 日)
- 2) ベネッセ教育総合研究所(2021)「**第 4 回 大学生の学習・生活実態調査報告書 データ集[2021 年]**」(<https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=5772>)(2023 年 11 月 9 日)

## 〈研究紹介〉 科学研究費補助金採択課題について 学校で働く看護師のコンピテンシーを基にした教育モデルの開発

看護学科 岩佐美香

### (1)本研究の学術的背景、研究課題の核心をなす学術的「問い」 (学術的背景)

医療技術の進歩等により、学校において医療ケアを提供する学校看護師を取り巻く状況は大きな変化を見せている。近年“インクルーシブ教育システムの構築”により、「障がいのある子どもも、ない子どもも、共に学び共に育つ」教育がなされはじめており、疾患を持つ子どもが、特別支援学校だけでなく、地域の小学校、中学校に通学するケースが増加している。2021年9月より“医療的ケア児及びその家族に対する支援に関する法律”が施行され、学校に在籍する医療的ケアの必要な子どもが保護者の付添いがない場合でも適切な医療的ケア、その他の支援を受けられるようにするため、看護師等の配置、その他の必要な措置を講ずるものとした。これにより、学校で医療的ケアの必要な児童生徒への対応体制を整備し、医療職の専門家の活用を推進していくことが急がれる。それに応じるためには、雇用形態・教育・研修体制等々、問題が山積みされている。学校看護師は病院と異なる環境下でのケアや判断を行うため、戸惑いも少なくない。その際、リーダー的な指導係がない、もしくは少ないという課題を抱えている(泊ら,2012)。学校看護師は病院看護師のように指導や教育を受ける機会が少なく、コンピテンシーモデルやスキルラダーもない。よって、これからの法的施行に伴って学校看護師を育成していかなければならない。現在、教育委員会や学校における指導的立場の看護師は、67自治体(47都道府県と20指定都市)のうち、47自治体(70%)が配置等されていない。そのうち、34の自治体では今後の配置の予定もない(文部科学省、2018)。

### (本研究の学術的「問い」)

学校看護師が自信をもって看護活動を行うための指標となる**学校看護師のコンピテンシーモデル**が必要であると考え。コンピテンシーモデルを作成したのちに、コンピテンシーの向上につながる**教育プログラムを開発・普及**し、学校で働く看護師のケアの向上を図っていく必要があると考える。

### (2)本研究の目的および学術的独自性と創造性

#### (本研究の目的)

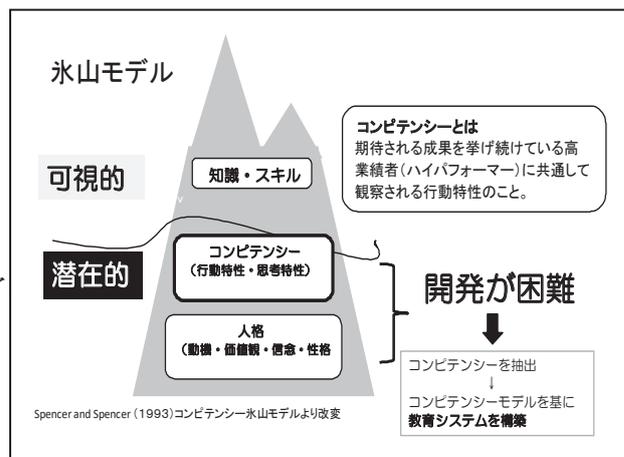
学校で働く看護師が自信をもって看護活動を行うための指標となる**学校で働く看護師のコンピテンシーモデル**を作成し、コンピテンシーの向上につながる**教育プログラムを開発**することである。

#### (学術的独自性と創造性)

これまでの研究では、学校で働く看護師の緊急時の対応、活動支援、研修の必要性や困難感についてはなされている。しかし、学校で働く看護師のコンピテンシーに関する研修はなされていない。また、コンピテンシーに基づいた教育プログラムも構築されていない。学校で働く看護師のコンピテンシーが明らかになれば、コンピテンシーの向上につながる教育プログラムを開発・普及し、ケアの質の向上をはかることができる。

### (3)本研究の着想に至った経緯や、関連する国内外の研究動向と本研究の位置づけ

#### (着想に至った経緯)



これまで、申請者は学校で養護教諭が行う看護技術、救急処置などの研究をおこなってきた。令和元年の調査によると、全ての幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特定支援学校（専攻科は除く）で医療的ケアを必要とする幼児児童生徒の数は 9,845 人である。そのうち、学校で医療的ケアに対応する学校で働く看護師の数は 全国でわずか 3,552 人である（文部科学省,2019）。慢性疾患をもつ子どもとその保護者が学校で安心して過ごせる環境を提供するためには、学校で働く看護師の役割は重大である。これからの社会に求められる学校で働く看護師の質の向上と地位の確立のために、学校看護学という専門的な分野の発展が求められると考える。

#### (4)本研究で何をどのように、どこまで明らかにしようとするのか

本研究では、まず指導的立場の看護師から学校で働く看護師のコンピテンシーを抽出する。次に学校で働く看護師のコンピテンシーを基にした“学校で働く看護師のプログラムを構築”し、その実施可能性と有効性について検討し普及に向けた示唆を得る。

#### 研究デザイン

本研究は、学校で働く看護師のコンピテンシー抽出はデルファイ変法を用いた記述研究デザインとする。教育プログラムは受講前後における比較研究および、質的記述研究とする。

#### 研究対象

- ① コンピテンシーの作成：全国の学校で指導的立場の学校で働く看護師（特別支援学校、小中学校に勤務）という役職もしくは役割を担っている者10名とする。参加者である指導的立場の看護師の条件については、看護師としての資格を有するというだけではなく、学校看護の分野で実践をしていることとし、経験年数が 10 年以上であることとする。
- ② 教育プログラムの実施:全国の特別支援学校に勤務する学校で働く看護師を対象とし、ランダムで 50名前後の研修参加者を募る。

#### 標本抽出法

本研究では、調査協力の承諾が得られた者のみでの標本抽出となるため、非確率的な便宜的標本抽出である。

#### 研究方法

##### 令和 4 年

- ① 暫定的なコンピテンシーに関するドラフト案の作成する  
指導的立場の看護師 10 名とブレインストーミングし、ドラフト案を作成する。ドラフト案には WHO のコンピテンシーモデルを基に各コンピテンシーの柱を中心に検討して調査票を作成する。

##### 令和 5 年

- ② 1回目の調査として対象者に調査票を配布回収し、パネルミーティング資料を修正する。
- ③ 2回目の調査は対象者に修正した調査票を郵送回収し、コンセンサスの程度を分析する。

##### 令和 6 年

- ④ 3回目以降の調査は2回目と同じプロセスを行い学校で働く看護師のコンピテンシーを完成する。
- ⑤ コンピテンシーを基に教育プログラムを作成し50名に対し実施する。
- ⑥ 受講1週間後にアンケート調査を行う。
- ⑦ 調査内容：a.プログラム全体に対する満足度、b.事前自己学習に関する評価、c.対話形式のグループワークに関する評価、d.教育プログラムの学校現場での有用性、e.教育プログラムの良かった点と改善が必要な点、f.総評・全体に対する意見
- ⑧ コンピテンシーを基に“教育プログラム”としての実施可能性について検討する。

〈研究紹介〉 科学研究費補助金採択課題について  
 高齢者の抑うつ症状改善のためのナッジを活用した  
 身体活動プログラムの開発と効果検証

理学療法学科 安藤卓

## 1. 研究背景

抑うつ症状の存在は、うつ病のリスク因子であることに加え、要介護状態の予測因子となることも示唆されている。本邦の大規模調査において、抑うつ症状を有する地域在住高齢者は14.3%であり、加齢とともに増加していくことが報告されている<sup>1,2)</sup>。抑うつ症状の改善は、うつ病への進展のみならず、要介護状態への移行を抑制する可能性がある。高齢者の健康的かつ自立した生活の維持のために、症状早期の改善アプローチは喫緊の課題である。

抑うつ症状の改善には、薬物療法だけでなく非薬物療法による介入の効果が示されている。特に身体活動促進は、うつ症候に良い効果を与えることが報告されている。本邦の大規模な学際的研究においては、歩数4,000歩/日（うち速歩5分）でうつ病が予防できることを示している<sup>3)</sup>。米国スポーツ医学会においても、抑うつ症状の予防・改善に30分～60分間の中等度の身体活動に従事することが推奨されている<sup>4)</sup>。しかしながら、抑うつ症状として、意欲の低下、集中力の低下、倦怠感・疲労があり、運動継続の弊害となる。抑うつ症状に対する身体活動促進には、運動継続の観点から、より制約・負担のない行動変容が必要である。

ナッジ (Nudge) は、「そっと後押しする」ことを意味し、人々を強制することなく望ましい方向に誘導する（行動変容させる）仕組み・シグナルを指す<sup>5)</sup>。また、ヒトの行動に影響を及ぼす要素として「MINDSPACE」(“Messenger”、“Incentives”、“Norms”、“Defaults”、“Salience”、“Priming”、“Affect”、“Commitments”、“Ego”の頭文字) が発表されている<sup>6)</sup>。この要素の使用頻度上位3要素は、“Priming”「潜在意識が行動のきっかけになる」、「Ego」 「自己監視機能。自分自身の心地よいことを行う」、「Norms」 「他者の行動に影響される同調効果」である。ナッジ要素を用いた身体活動促進のRCTにおいて、“Priming”は93.8%、“Ego”は81.3%、“Norms”は53.1%使用されている<sup>7)</sup>。

ナッジは、国内では、経済、環境、教育、栄養などの分野でナッジを用いた研究が行われている。健康分野では、ナッジを用いて身体活動促進目的の研究は行われているものの、若年者対象や、行動変容のみに焦点をあてており、本研究のようにナッジを活用した身体活動プログラムによる症状改善の効果検証を目的とした研究は見当たらない。国外では、2008年にThalerとSunsteinによる著書が出版されて以来、行動学的洞察とナッジの使用は、公的機関や民間企業の間で関心が高まっている。Haileらは、デジタルで配信されたコンテンツが身体活動を促進させ、うつを改善させることを報告した<sup>8)</sup>。しかしながら、Laiouらが報告した、ナッジを用いた身体活動促進のレビューでは、その効果については一定の見解を得ていない<sup>9)</sup>。

今回、地域在住高齢者に対して、ナッジ理論を活用した身体活動プログラムにおける身体活動の行動変容は、抑うつ症状の改善に寄与すると仮説を立てた。

## 2. 研究目的

**目的1:** 地域在住高齢者の身体活動量を客観的に定量化した上で、抑うつ症状を調査し、その結果に基づいて抑うつ症状に関連する適切な活動量の基準を作成する。

**目的2:** 目的1で作成した基準を、ナッジ理論を用いた身体活動プログラムへと応用し、ランダム化比較試験により抑うつ症状の改善効果を検証する。

## 3. 研究方法

## 2023 年度 研究計画（調査 1）

初年度は、活動量基準開発のための観察研究を行う。

対象は地域在住高齢者100名とし、65歳未満の者、明らかな認知症を有する者は除外する。基本属性として性別、年齢、身長、体重、認知機能、学歴を調査する。また、抑うつ症状は、Geriatric Depression Scaleの短縮版（GDS-15）を用いて評価する。身体活動量については、3軸加速度計センサー内臓型の活動量計（Active style Pro HJA-750、オムロン社製、京都）を7日間腰部に装着し（入浴、就寝時除く）、1日あたりの歩数およびMETsを測定する。測定時期は身体活動の季節性の影響を除くため、春季および秋季に実施する。

身体活動の指標（歩数、Ex）を2群化し、抑うつ症状の割合を $\chi^2$ 乗検定にて比較する。また、ROC解析により、抑うつ症状の有無に対する身体活動のcut off値を求める。

## 2024 年度 研究計画（調査 2）

2024年度は、調査1の観察研究の結果に基づいて、身体活動を促進する行動変容プログラムにて、抑うつ症状改善効果を検証する。研究デザインは、評価者をブラインドしたシングルブラインドのランダム化比較試験を用いる。

対象は地域在住高齢者100名とし、除外基準は調査1に準ずる。対象者を介入群および対照群に分け、介入群には調査1の研究結果をもとに、ナッジ理論を用いた身体活動促進プログラムを実施する。介入として、期間は12週間とし、以下の図1に示す身体活動促進プログラムを実施する。介入スケジュールを表1に示す。対照群に関しては[プログラム1]のみを実施する。測定項目は、両群に調査1と同様に活動量計を用いて、介入前後7日間の歩数、METsを測定する。また、GDS-15を用いて介入前後の抑うつ症状の状況を調査する。さらに、身体機能評価として握力および歩行速度を測定する。

解析は、対応のないt検定および $\chi^2$ 乗検定にて、介入前の各群の測定項目を比較する。介入の効果判定は、二元配置分散分析を用いて、群（介入/対照）と時間（介入前/介入後）の二要因の交互作用を検討する。

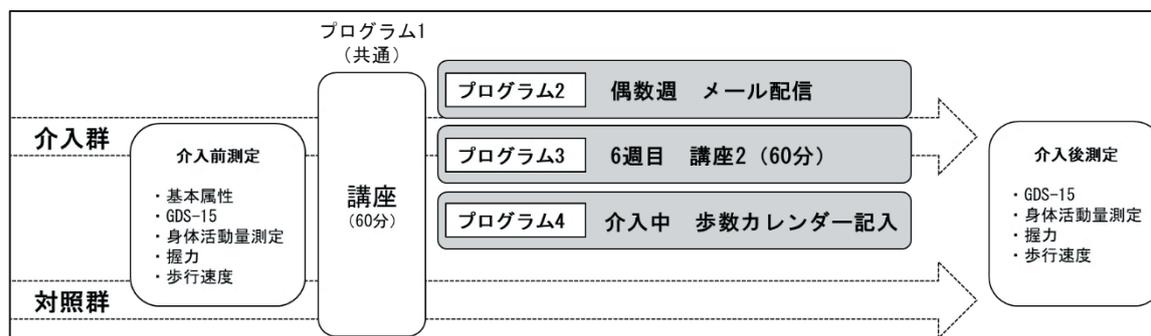


図1 介入群に対するナッジ理論を用いた身体活動促進プログラム

表1 介入スケジュール

	ナッジ要素	内容	1週	2週	3週	4週	5週	6週	7週	8週	9週	10週	11週	12週
プログラム1		(共通) 身体活動促進、運動習慣継続について一般的知識を補充する講義	実施											
プログラム2	“Priming”	(介入群のみ) 調査1の結果をもとに、身体活動に関するクイズをメールにて発信(Dadaczynski et al., 2017) <sup>10)</sup>		実施	実施		実施	実施	実施	実施				実施
プログラム3	“Norms”	(介入群のみ) 現時点までの歩数カレンダーを集計し、調査1の結果と照らし合わせて、現時点での他人の行動(歩数)状況を共有させるアクティブラーニング型講義						実施						
プログラム4	“Ego”	(介入群のみ) セルフモニタリングによる毎日の歩数カレンダーへの自己記入(Glynn et al., 2010) <sup>11)</sup>	実施	実施	実施									

注釈) “Priming” 「潜在意識が行動のきっかけになる」手法、“Norms” 「同調効果」を用いた手法、“Ego” 「自己監視機能、フィードバック」を用いた手法。

### 参考文献

- 1) Makizako H, et al.: The combined status of physical performance and depressive symptoms is strongly associated with a history of falling in community-dwelling elderly: cross-sectional findings from the Obu Study of Health Promotion for the Elderly (OSHPE). Archives of gerontology and geriatrics. 2014; 58(3): 327-331.
- 2) Shimada H, et al.: Depressive symptoms and cognitive performance in older adults. Journal of psychiatric research. 2014; 57: 149-156.
- 3) Aoyagi Y, Shephard RJ: Sex differences in relationships between habitual physical activity and health in the elderly: Practical implications for epidemiologists based on pedometer/accelerometer data from the Nakanajo Study. Archives of Gerontology and Geriatrics. 2013; 56(2): 327-338.
- 4) Haskell WL, et al.: Physical activity and public health: updated recommendation for adults from the American College of Sports Medicine and the American Heart Association. Medicine & Science in Sports & Exercise. 2007; 39: 1423-1434.
- 5) Thaler R, & Sunstein C: "Nudge: Improving Decisions About Health, Wealth, and Happiness." New Haven: Yale University Press, 2008
- 6) Behavioural Insights Team: MINDSPACE. Behavioural Insights Team. <https://www.bi.team/wp-content/uploads/2015/07/MINDSPACE.pdf>. 2015
- 7) 石倉恭子, 他.: "身体活動促進を目的とした無作為化比較介入試験と国内実装例に用いられたツールのナッジ戦略—MINDSPACE 要素の分類—." 日本健康教育学会誌. 2021; 29(3): 254-265.
- 8) Haile C, et al.: Pilot testing of a nudge-based digital intervention (Welbot) to improve sedentary behaviour and wellbeing in the workplace. International journal of environmental research and public health. 2020; 17(16): 5763.
- 9) Laiou E, et al.: Nudge interventions to promote healthy diets and physical activity. Food Policy. 2021; 102: 102103.
- 10) Dadaczynski K, et al.: Promoting physical activity in worksite settings: results of a German pilot study of the online intervention Healing fit. BMC public health. 2017; 17: 1-9.
- 11) Glynn LG, et al.: Interventions used to improve control of blood pressure in patients with hypertension. Cochrane database of systematic reviews. 2010; 3.

〈研究紹介〉 科学研究費補助金採択課題について  
地域在住高齢者の転倒に及ぼす筋量・筋力の複合影響についての追跡研究

理学療法学科 高田昌寛

1. 研究背景および研究課題

加齢に伴う転倒は、骨折罹患率および死亡率に影響し、医療経済費用の増大に関連(Alexander, 1996, Tinetti, 2003, Dargent-Molina et al., 1996)するため、高齢者の転倒予防は、リハビリテーション科学および公衆衛生学上、重要な課題である。一般に、地域在住高齢者 65 歳以上の約 30%が 1 年間で転倒を経験すること(Gillespie et al., 2012)、加齢およびバランス障害などの危険因子(Maki et al., 1994, Tinetti et al., 1988)が知られている。中でも、大腿四頭筋筋力と転倒の関連を調査した横断的研究(Ahmadihangar et al., 2018)、握力と転倒の関連を調査した横断的研究(Yang et al., 2018)では、転倒発生率は筋力と負の関連、転倒経験群の握力は有意に低値を示すことが報告されている。近年、地域在住高齢者における骨格筋量と転倒有病率に関する疫学研究が注目されているが、骨格筋量および筋力などの複合的な要因が、その後の転倒発生と関係するかどうかについての見解は不一致であり、上肢・下肢・体幹などの部位別骨格筋量が転倒に及ぼす影響について、明確な見解は得られていない。さらに、世界的に、地域在住高齢者を対象とした転倒に影響を及ぼす疫学調査では、二重 X 線吸収測定法 (Dual-energy X-ray absorptiometry: DXA 法) で測定された骨格筋量および各種身体能力の複合的な要因について、言及している追跡研究は確認されない。

骨格筋量の測定(Cruz-Jentoft et al., 2010)は、EWGSOP(European Working Group on Sarcopenia in Older People)および AWGS(Asian Working Group for Sarcopenia)において、コンピューター断層撮影(Computed Tomography: CT)および磁気共鳴画像診断装置(Magnetic Resonance Imaging: MRI)が標準的な方法とされ、さらに、DXA 法および生体電気インピーダンス法(Bioelectrical Impedance Analysis: BIA 法)も知られている。中でも、DXA 法は、2 種類の X 線を用いて全身スキャンを行うことにより、脂肪組織、除脂肪軟部組織および骨組織から構成される体組成を評価する方法であり、得られた全身画像より、上肢・体幹・下肢・腹部・臀部等、部位別評価が可能である。しかし、CT、MRI および DXA 法は、医療機関等に備え付けられた装置でなければ測定が困難であり、一般住民を対象とした疫学調査には不向きとされてきた。

そこで、本研究は、地域在住高齢者において、「DXA 法で測定された骨格筋量、筋力および各種身体能力などの複合的な要因を評価することは、その後の転倒発生の危険性を予測することが可能なのか」ということを研究課題とする。地域在住高齢者を対象とし「前向きコホート研究」を行う本研究は、対象者バイアスを軽減でき、転倒(アウトカム)よりも複合的な要因(曝露情報)が先んじている関連の時間性を示すことが可能であり、この集団から得られる結果を広く一般化できる点に学術的独自性・創造性を含んでいる。

2. 研究目的

地域在住高齢者(奈良県在住男性骨粗鬆症コホート研究参加者 = FORMEN 研究参加者)を対象とした前向きコホート研究において、「DXA 法で測定された骨格筋量および体力検査において測定された筋力などの複合的な要因が、その後の転倒発生と関係するかどうかについて検討すること」を目的とする。従来の筋力検査、歩行・バランスなどの身体能力検査に加え、DXA 法による体組成評価結果等の複合的な要因を組み合わせることで、潜在的に有する転倒の危険性をよりの確に予測することが可能となり、転倒予防対策に資する学術の発展および社会貢献に繋がると考える。

### 3. 研究方法

本研究の対象は、FORMEN 研究における「一次コホート研究 15 年次(2022-2023 年：約 1500 名)」および「二次コホート研究 5 年次(2024-2026 年：約 600 名)」の追跡調査である。一次コホート研究では、2017-2019 年に初めて DXA 法による骨格筋量測定を実施し、ベースライン調査は完了している(図 1)。

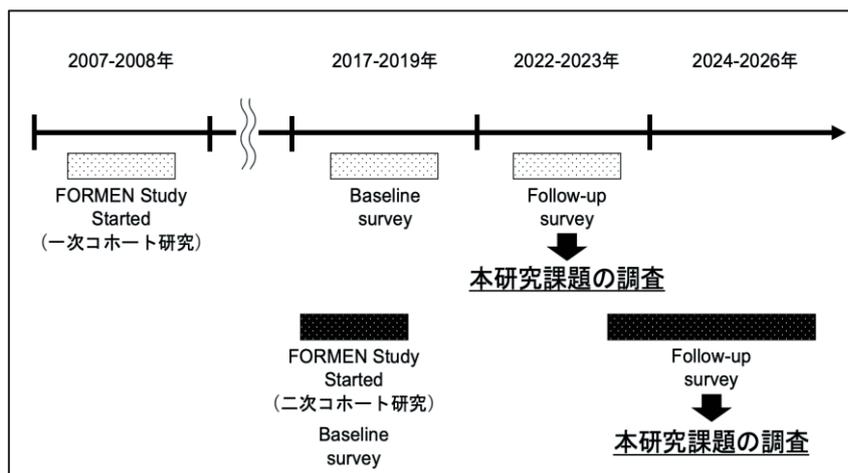


図 1：FORMEN 研究の進展と本研究課題の位置付け

FORMEN 研究は、「藤原京研究 (Fujiwara-kyo Osteoporosis Risk in Men Study)」と呼び、奈良県 4 都市(橿原市、奈良市、大和郡山市、香芝市)に在住(図 2)、65 歳以上で独歩可能な男女 4500 名の内、男性を対象に 2007 年より開始した骨粗鬆症研究である。本研究の対象者は、FORMEN 研究における一次コホートおよび二次コホートにおけるベースライン調査参加者全員とし、質問紙票の有効な回答が得られた者とする。過去 1 年間における転倒歴の有無を明らかにするため、調査に参加しなかった者、期限内に返答が得られなかった者を対象とし、補足的な郵送調査、電話調査および現地訪問調査を実施する。

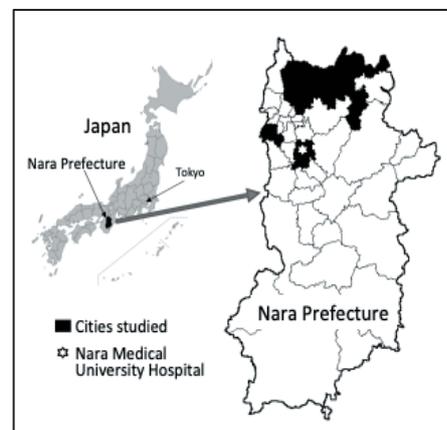


図 2：FORMEN 研究の対象地域

#### <本研究における調査対象項目>

- **Skeletal measures(体組成検査)：【図 2: Baseline survey】で測定済**
  - DXA 法による測定結果より、上肢骨格筋量、下肢骨格筋量、体幹骨格筋量、全身骨格筋量および骨格筋指数(Skeletal Muscle Mass Index：SMI [Kg/m<sup>2</sup>])を算出する。
- **体力検査：【図 2: Baseline survey】で測定済**
  - 体力検査として、10m 歩行検査(歩行速度)、開眼片足立ち検査(保持時間)、筋力検査(握力)および 5 回立ち上がり検査(時間)を実施している。これらの測定データについて、各対象者の身体的特徴と合わせて集計し、転倒に及ぼす要因の分析対象とする。
- **転倒歴の有無に関するアンケート調査：【本研究】で郵送調査を実施**
  - 本研究のアウトカムは、過去 1 年間における転倒歴の有無であり、郵送調査を実施する。質問紙票は、「Falling assessment Chart of Suzuki et al., 2003」を用いて、アンケート用紙を作成した。思い出しバイアスを考慮し、転倒時の状況を明瞭に想起できた者(必須調査項目：医療機関受診の有無・診断・転倒状況など)について、本研究では、「転倒歴あり群」と定義付ける。

本研究では、地域在住高齢者(FORMEN 研究参加者)に対し、過去 1 年間における転倒歴の有無(アウトカム)をアンケート調査にて抽出する。前向きコホート研究において、DXA 法で測定された骨格筋量、筋力および各種身体能力の複合的な要因(曝露情報)が、その後の転倒発生に及ぼす影響について、追跡研究を行う。

## 〈研究紹介〉 科学研究費補助金採択課題について 高齢者の掴み損ないを科学する -握る力と腕の力の持続出力調整機能の研究-

作業療法学科 津田勇人

### 1. 研究背景

朝起きてから晩床に就くまでの日常生活で「手」の果たす役割は非常に大きい。歯を磨く、髪をとく、服を着る、ボタンを留める、箸を使う、財布から硬貨を取り出す、教科書を開く、筆箱からペンを取り出す、ペンを操りノートをとる、蛇口をひねる、タオルを絞る、など枚挙に暇がないほど、我々の日常生活の多くが手の運動機能を基盤に営まれている。

手の働きは脳の働きを反映する。人間は脳の発達にともない手全体を使った“粗大な握り”から指先を用いた“精密な掴み”へと手の働きは巧みさを増し、やがて箸操作や相当な練習を積み重ねればピアノの演奏まで可能となる。しかし加齢により、物体の外観（形・大きさ）を見る視覚機能、物体の場所を正しく把握する空間認識機能、物体の感触を感じる指先の感覚機能、必要な力をタイミングよく発揮する運動機能は衰え、掴み損ない易くなり、今まで何の苦労もなくできていた細かな操作が徐々に難しくなる。

加齢による運動機能の低下の一つは最大筋力の低下である。2017年10月公表の政府統計によれば、最大筋力の指標である握力は加齢により減少し、男性では20-24歳の平均握力は $46.47 \pm 7.51 \text{kg}$ に対し、75-79歳の平均握力は $35.36 \pm 5.71 \text{kg}$ 、女性では20-24歳の平均握力は $27.97 \pm 4.97 \text{kg}$ に対し、75-79歳の平均握力は $22.78 \pm 4.01 \text{kg}$ 、率に換算すれば男性で76.1%、女性で81.4%となる。一方、Andreas W.らは歩行や物体を保持するような日常生活上の課題では、最大筋力よりもむしろ安定して最大下の筋収縮を維持することの必要性を指摘している。彼らは若年成人10名（男性50%、女性50%、平均年齢 $24 \pm 3$ 歳）と高齢者30名（男性37%、女性63%、平均年齢 $67 \pm 8$ 歳）を対象に最大握力の5%値、10%値、25%値それぞれを5秒間維持する実験を実施した。さらに同じ実験を7日後に実施し、結果の再現性を検証した。その結果、高齢者に比べ、若年成人は安定して最大下の筋収縮を維持していたことを明らかにしている(Andreas W. B., Fredric E. et al. Handgrip force steadiness in young and older adults: a reproducibility study. BMC Musculoskeletal Disorders; (2018)19:96)。

我々も“加齢により手の運動機能はどう変化するのか?”という研究疑問に対する答えを定量的に捉えるため、運動機能の中でも必要な力をタイミングよく発揮する力調節の観点から、人差し指と親指の指先で物体を把握する“精密掴み”と、個々の指を個別に操作する“タッピング”に着目し研究を重ねてきた。

“精密掴み”を正確に遂行するためには、指先が物体に触れる前に、視覚機能と空間認識機能を駆使して物体の位置・形・大きさを認識し、手を差し伸べる方向・高さを持ち上げに必要な筋力を予測するフィードフォワード制御と、指先が物体に触れた後に、感覚機能を駆使して物体の重さ・滑りやすさを認識し、持ち上げに最適な力（以下、至適筋力）をタイミングよく発揮するフィードバック制御の両方が系統的に正確に機能しなければならない。至適筋力以下の場合、目標の物体を把握しきれず滑り落としてしまう可能性があり、至適筋力以上の場合、軟体では物体を歪め、硬体では母指と示指の力発揮のタイミングが合わないと物体は手からはじき飛ばされるように落としてしまう。“精密掴み”を可能にする脳はどの部位が関与しているのだろうか。我々は健常成人を対象に“精密掴み”に関わる脳機能局在を解明するためにポジトロン断層撮影法(PET)を使用し、局所脳血流を測定し、運動に関連する一次運動野／感覚野、運動前野、補足運動野、帯状回運動野だけでなく、視覚に関わる後頭葉、空間

認知に関連する後頭・頭頂葉、感覚の中継点である視床、筋出力を巧み調節する小脳などが関与することを明らかにした。

加齢により“精密摘み”はどう変化するのか。我々は 33 名の高齢者(平均年齢 84.2±8.9 歳)を対象に摘み力を測定した結果、対照健常成人に比べ高齢者は①物体を保持するために発揮される力は大きく、②物体表面の素材に適応した摘み力の調整に時間を要し、③物体重量の変化に速やかに対応することが困難であったこと明らかにしてきた。特に注目される点は物体を持ち上げる際に、持ち上げ方向と真逆の下方方向へ押し付ける現象が高齢者で多かったことである。これらの結果から、高齢者は物体に対し手を差し伸べる際や物体を持ち上げる際には、力まないで腕を差し伸べ、指先で物体に触れ、ほどよいタイミングで手指筋と腕筋を働かせる力調節が衰えたためと考えられ、新たな研究命題“加齢は上肢の協調した筋出力調整機能を低下させる”が導かれた。

“タッピング”は指先でトントンと物体を軽いタッチで叩く反復運動である。より早くより正確にタップするためには、個々の指を独立して曲げ伸ばししなければならないだけでなく、タップしない指は力まないようにリラックスしなければならない。“タッピング”検査は手指の運動制御に関する中枢神経系および末梢の筋・神経系への加齢の影響だけでなく脳卒中など病気の影響も反映する有用な検査と考えられている。“タッピング”を可能にする脳はどの部位が関与しているのだろうか。我々は“タッピング”に関わる脳機能局在を解明するためにポジトロン断層撮影法(PET)を使用して局所脳血流を測定し、運動の難易度が高くなると、両側背側前運動野、一次運動野/感覚野、小脳の前方がより活性化されることを明らかにした。

年をとると“タッピング”はどう変化するのか。我々は 10 名の高齢者(平均年齢 84.2±8.9 歳)を対象に“タッピング”を測定した結果、対照健常成人に比べ高齢者は①人差し指、中指、薬指、小指のすべてでタップ回数が遅く、②タップしない指に加わる平均力も強かったことを明らかにした。これらの結果から、高齢者は「曲げるー伸ばす」の切り替えが遅くなり、タップしない指にも余計な力が働いてしまうのは、ほどよいタイミングで手指筋を働かせる力調節が衰えたためと考えられ、新たな研究命題“加齢は上肢の協調した筋出力調整機能を低下させる”が導かれた。

## 2. 研究目的

本研究では、手が至適筋力を発揮している時の上肢の筋緊張を、デジタル握力計と 16 マルチチャンネル表面筋電図を用いて測定し、新たな命題“加齢は上肢の協調した筋出力調整機能を低下させる”を証明することが目的である。

本実験の設定は、そのまま脳卒中患者の上肢運動機能評価に臨床応用できるので、また本研究の成果は、研究疑問に対する答えを得るだけでなく、高齢者に多い脳卒中に認められる“上肢の協調運動障害”との比較が可能となり、リハビリテーション介入の効果判定のための正確な運動機能評価への基礎データを寄与できる点で本研究の意義は高い。

## 3. 研究方法

1) 高齢者全員が脳ドックを受診し、専門医による所見を得る。

日本脳卒中学会脳卒中ガイドライン 2015[追補 2017]によれば、本人・家族がその症状に気づかない“無症候性脳血管障害”について、一般住民における無症候性頸動脈狭窄症の頻度は、中等度狭窄が 0~7.5%、高度狭窄が 0~3.1%であり、高齢者及び男性に多い。本ガイドラインに基づき、高齢者を対象とした実験では無症候性脳血管障害の影響を除外する必要があるため、本研究の対象となる高齢者全員に脳ドックを受診させ、専門医による所見を得る。

2) 至適握力を持続している時の左右の上腕二頭筋の表面筋電図を同期させる。

実験では姿勢の影響を除外するため、仰向け臥位とし、デジタル握力計でモニターしながら、至適握力を持続している時の左右の上腕二頭筋の表面筋電図を同期させてデータを収集する。

実験課題は最大握力の5%値、10%値、25%値、50%値とし、利き手・非利き手それぞれを5秒間維持する。実験課題はランダムに提示し、2回の平均値を求める。至適握力実行状況は、指定時間内の変動を積分し面積で評価する。筋電信号は安静時を基点として、至適握力持続期間中の平均振幅で評価する。



3) 超音波診断装置を用いて皮下脂肪厚を計測する。

表面筋電図結果の信頼性を高めるため、筋電信号に影響する皮下脂肪厚は超音波診断装置を用いて計測する。

#### 4. 関連論文

本研究は我々が継続してきた必要な力をタイミングよく発揮する力調節の研究に位置する。将来的には脳卒中患者の上肢運動機能評価への臨床応用へと繋げていく。

1996年：川合悟，津田勇人，木下博，生田香明，橋詰謙，村瀬智彦，山本高司．老齡化が精密把握時の握み適応調節に及ぼす影響．体力科学 Vol.46 pp501-512.

1996年：川合悟，津田勇人，橋詰謙，村瀬智彦，木下博，生田香明，山本高司．精密把握運動時の高齡者の握み力制御について．体力研究 Vol.91 pp77-88.

2003年：青木朋子，木下博，津田勇人．個々の指の運動機能の加齡的变化とその機能維持に及ぼす運動習慣の効果．大阪ガスグループ福祉財団研究調査報告書 16:pp65-71.

2005年：津田勇人，青木朋子，奥直彦，畑澤順，木下博．視覚誘導による小物体の精密把握持ち上げ運動に関わる脳機能局在の解明 —PET 研究—. 作業療法 Vol.24 pp40-49.

2005年：Tomoko Aoki，Hayato Tsuda，Masashi Takasawa，Yasuhiro Osaki，Naohiko Oku，Jun Hatazawa and Hiroshi Kinoshita．The effect of tapping finger and mode differences on cortical and sub-cortical activities: a PET study .Experimental Brain Research (160): pp375-383.

2005年：青木朋子，津田勇人，奥直彦，畑澤順，木下博．複雑な指運動は本当に脳の活動を促すの

か？. デザントスポーツ科学 Vol26,pp42-50.

2006年：津田勇人, 青木朋子, 奥直彦, 畑澤順, 木下博. 箸操作に関する脳賦活領域の解明. 作業療法 Vol.25 pp28-38.

2009年：Hayato Tsuda, Tomoko Aoki, Naohiko Oku, Yasuyuki Kimura, Jun Hatazawa, Hiroshi Kinoshita. Functional brain areas associated with manipulation of a prehensile tool: a PET study. Human Brain Mapping. 30(9): pp2879-2889

2014年：津田勇人, 佐竹勝, 上島健, 嶋野広一, 水野貴子, 坪田裕司. 筋緊張の定量化に関する研究 (第1報) —健康成人を対象とした表面筋電図の検討—. 大阪河崎リハビリテーション大学紀要 8(2):109-121.

2019年：Tomoko Aoki, Hayato Tsuda and Hiroshi Kinoshita. Temporal and force Characteristics of Rapid Single-Finger Tapping in Healthy Older Adults. Motor control. 23(4):pp518-534.

### 参考文献

Andreas W. B., Fredric E. et al. Handgrip force steadiness in young and older adults: a reproducibility study. BMC Musculoskeletal Disorders; (2018)19:96

## 『宇宙環境における内耳前庭の発生維持とバイオメカニクス』 - 細胞/分子レベルでの力学的特性の解明に向けて -

臨床工学科 田浦晶子

本研究は、2017年-2023年に文科省研究科目「基盤研究(C)」の助成を受けて行われた研究に関連したもので、臨床工学科 宮崎浩教授との共同研究についてご報告します。

### 【背景】

近年、国際宇宙ステーションの日本実験棟「きぼう」で、日本人が宇宙で長期間活動することも可能になった。さらに、民間会社による一般人の宇宙旅行も開始され、月面基地計画が予定されるなど、宇宙はより身近なものになってきた。将来的には、宇宙ステーションや月面基地で人類が恒常的に生活し、繁栄して行くことが期待されている。

そこで問題になるのが、宇宙環境で人類は正常に発生し、恒常維持することが可能であるか、ということである。すでに今までの宇宙実験において、魚類や両生類では正常に発生するが、鳥類では初期胚の生存率が低く、正常に発生しないことが知られている。哺乳類においては繁殖実験が困難であり、未だ詳細は不明である。微小重力環境実験では受精は可能であるものの、胚発生や出産率は約半分に低下するため、宇宙における正常発生は困難であると予想されている。また生後8日目までのラットの内耳前庭組織は宇宙環境においては分化が抑制されることも報告されており、**発生および発達期において重力は重要である**と考えられる。

一方で発達後においても重力の重要性は指摘されている。動揺病の一種である宇宙酔い(space motion sickness)は宇宙飛行士の約7割が経験し、急激な重力減少により生じるとされている。発症機序としては、体液移動説や感覚混乱説などが挙げられているが詳細は未だ不明である。平衡感覚保持に重要な内耳前庭からの入力信号の減少の関与が指摘されているため、内耳が正常に発生し、維持されることは、人類が宇宙に置いて繁栄していくには不可欠である。重力感知システムである前庭耳石器では、耳石膜の下に有毛細胞層が存在し、耳石のずれによる機械刺激を電気振動に変換し、前庭神経を介して中枢へ伝達される。この電気信号への変換システムとして感覚毛に存在する機械電気変換チャンネルが知られており、感覚毛維持は有毛細胞機能維持として非常に重要である。前庭耳石器についてはすでに「宇宙飛行における耳石の研究」や「宇宙での前庭神経支配の研究」などにより、宇宙環境での耳石サイズの縮小や神経支配の減少が報告されている。しかしながら耳石器で最も重要なのは**有毛細胞であるにも関わらず、有毛細胞自体についての報告は殆ど見られない**。また、従来の研究では前庭組織レベルでの研究がメインであり、細胞/分子レベルでの詳細も不明である。

### 【研究方法】

微小重力環境での感覚毛の発生と維持について検討した。

1) **発生段階**：まず重力刺激がない状態で有毛細胞は正常に発生することが可能であるのか、つまり感覚毛が細胞上面に規則的に成熟することが可能であるのかをES細胞から有毛細胞を誘導する方法を用いて検討した。微小重力負荷としては、模擬微小重力発生装置(3Dクリノスタット：直交する2軸により3次的に対象物(試料)を回転し、重力方向を連続的に変化させ、対象物が重力刺激を感受するまえに方向を変えることで対象物にかかる重力ベクトルの合計を時間的にほぼゼロにできる)(図1)にて行った。

2) **生後段階**：次に生後の感覚毛が無重力状態で長期に維持することが可能で

(図1)



あるか、つまり微小重力環境でも感覚毛の恒常性が維持できるかを検討し、有毛細胞のバイオメカニクスを分析することで有毛細胞に重力感知機構が存在するかを検討した。細胞のバイオニクスについては、宮崎浩教授の指導の下で、細胞の粘弾性解析を行った (図2)。

### 【結果まとめ】

(図2)



(図3)

マウス ES から誘導した内耳オルガノイドの大きさと質量を control 群と微小重力負荷群を分化誘導前期および後期に分けて比較検討した結果、両者に明らかな有意差は見られなかった。これは微小重力負荷時間が短時間であったためあまり変化は見られなかったが、分化誘導前期において若干増大傾向を認めたことから、生物の発生初期では外部刺激への感受性が高いため分化誘導後期と比べ微小重力負荷の影響を受けやすかったと考えられた。微小重力負荷による有毛細胞への分化誘導効率を検討したところ、control と比較して微小重力負荷の方が減少し、微小重力負荷により分化が抑制される傾向を認めた。これは過去の文献的報告結果とも合致し、細胞外マトリックスの分化が抑制された事によると考えられる。また前庭有毛細胞を単離し (図3)、細胞吸引実験を行った結果、両群において異なる傾向が見られたが、サンプル数が少ないこともあるため、更なる検証が必要であると思われる。

本研究は藍野大学中央研究所によって承認されている (承認番号: 第 10D-23008 号)

利益相反に該当する事項はありません。

なお、これらの実験については、日本再生医療学会および第 82 回日本めまい平衡医学会 (2023 年 10 月) にてポスター発表を行いました (下記写真)。ゼミ学生さん達も日本の最先端研究の学会に参加し、とても刺激を受け、大変有意義なものとなりました。



(第 22 回日本再生医療学会 京都にて ゼミ学生)



(第 82 回日本めまい平衡医学会、新潟にて)



## 看護学科教員による実習施設への研究支援の取り組み

看護学科 松本 晃子

### I. はじめに

看護学科では、実習施設における看護師への研究支援を開始した。臨床現場の看護師は看護研究の必要性を感じているが、具体的な実施方法や分析方法などでわからないことが多く、取り組みへのハードルが高いといった意見が聞かれる。また、看護研究は看護師のキャリアラダーに組み込まれる場合も多く、主に師長や主任といった管理職が日々の煩雑な業務と並行して研究指導にあたっている実態がある。研究支援を行っている施設のある看護部長は「院内の研究発表を行っている職種の中で、看護師の発表が最も少ない。看護師はスタッフ数も多く、医療への貢献度も高いにも関わらず、研究成果として表へ出ることがないのは非常にもったいない。」と話されていた。このような環境に対し、専門性をもった教育機関からの研究支援の需要は非常に高いといえる。

また、教員にとっても、学生の看護実践の学びの場である実習先との関係性の構築は、看護基礎教育の質を担保するために欠かすことができない。しかし、実際には、看護師は多忙な看護業務を行いながらの指導であるため、教員とのやり取りは限られた時間の中で行わなければならない。さらに、昨今の看護系大学の濫立により、実習先としての受け入れを確保することも困難な状況であることから、実習先との関係性において他大学との差別化を図ることも必要である。このような背景から、実習施設への看護研究支援は非常に有意義な取り組みとして実施されているため、その詳細について報告する。

### II. 藍野病院へ支援の実際

#### 1. 研究実施への導入

はじめに 2022 年 12 月に藍野病院の 3 年目看護師に対し、看護研究についての意義や研究計画書の作成方法等の研修を行った。これはラダー研修の一部であり、病院の研修に看護教員が指導者として参加する形であった。研修では講義の後、グループに分かれて模擬の研究計画書を作成してもらい、研修終了後に実際にやってみたいというグループを募った。参加した看護師の反応はとても良く「看護研究の意義が理解できた」「普段の看護実践を振り返る機会になった」という感想がみられた。結果、2 つのグループから看護研究を実践したいと申し出があり、看護師 7 名、教員 4 名で研究を行うことになった。

#### 2. 研究計画書の作成から研究実施

研究実施にあたり、藍野病院の窓口と、研究者である看護師のフォローとして岩村俊彦副看護部長に調整を依頼した。藍野病院では研究を実施するため、月 2 回午後から 2 時間の作業時間を確保していただいた。その時間を活用し、2023 年 1 月から 2 月にかけて看護師と共に研究計画書、病院内の倫理審査書類を作成した。研究を実施するグループのそれぞれのテーマは「病衣への尿汚染を減らすオムツパットの当て方」と「おむつ交換時の感染対策～ベッドの高さによって汚染被曝に違いはあるのか～」であり、どちらも排泄介助に関するものであった。藍野病院では日常生活援助が必要な患者が多く、どちらのグループも日々の看護業務の中で感じている思いに沿った研究テーマとなった。

双方とも実験研究となったため、2023 年 4 月に本学の基礎看護学演習室にて実施することになった。物品は本学のものを使用し、それぞれの研究内容に沿ったものを教員とともに 2 グループ合同で行った。1 日かけて行ったが、看護師は勤務日扱いとされており日勤帯の時間でデータの抽出まで終了することができた。

### 3. 抄録・ポスター作製から学会発表

学会発表は、2023年10月に大阪で行われた第31回日本慢性期医療学会にてポスター発表を行うことになった。研究結果の分析や考察は、月1回の研究指導日やメールを使用しながら指導を行い、同時に発表へ向けて抄録の文章校正やポスターのレイアウトなどの指導を行った。実験研究であったことから、写真の効果的な活用など発表方法についての指導を重点的に行った。参加登録や抄録の提出は藍野病院で行い、ポスターの印刷は本学にて行った。

学会前には予行演習として、院内の主任会にて発表を行った。発表者の緊張度は高かったものの練習を重ねて臨まれ、質問や高評価な意見をいただくことができた。学会当日のポスター発表は、どちらのグループも多くの方が参加されており、発表終了後にも個別に意見や質問が来るなど非常に良い反応がみられた。他職種や療養病棟のスタッフの参加が多く、同じような環境や思いを持たれている方からの反応があり、良い意見交換の場となっていた。研究を行った看護師からは「楽しかった、やってよかった」「新しい世界がみれた」といった意見があり、研究についてやりがいを持って取り組むことが出来たと考えられる。

### 4. 考察

今回の研究支援に参加された看護師は自主的に参加されており、多忙な業務の合間でも常に前向きな姿勢で取り組まれていた。これは、看護への志の高さに加え、はじめの研修の時点から研究の意義や教員側の支援する姿勢を示すことで研究に対するハードルが下がった背景があると考えられる。さらに、研究テーマも看護師が実際に勤務する上で感じた思いに沿ったものであったことから、研究を実施する上でモチベーションを維持することができたと推測される。また、今回の研究支援は全て看護師の勤務時間内で行われ、学会は出張扱いであった。病院が研究実施に対し支援的であり、大学との連携に向けて環境を整えてくださったことも円滑に進められた大きな要因であったと考えられる。

看護師への指導においては、研究計画書や抄録をはじめとした書類作成に時間を要した。研究動機や方法、考察といった思考を文章化する作業は、看護師は普段の看護業務では実施することは少ない。そのため、教員と対話しながら出来る限り看護師の考える内容に沿った文章を作成するように支援した。このような対話できる関係性を看護師と構築していくことは、研究に限らず、円滑な臨地実習にも効果的であると考えられる。また、今回はどちらのグループも実験研究であったことから、本学を研究実施場所として使用することができた。病院内だけでは実施できなかった研究方法であったことから、教育機関と連携することによって研究内容を深めることにつながったと考えられる。同時に、看護師は本学に来校することは普段ほとんどないため、学生への教育環境を見ていただく機会にもなった。このように、研究支援を行うことで臨床での看護研究の質の向上だけでなく、施設同士の結びつきの強化にもつなげることができた。

### III. 今後の展望

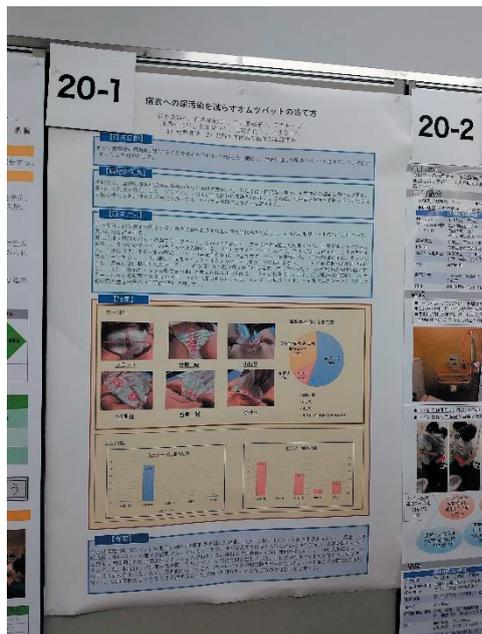
看護学科では現在、藍野病院以外にも京都済生会病院、京都桂病院、吹田徳洲会病院にて研究支援を行っている。これらは全て2023年度から開始され、それぞれの病院や看護師の特色に合わせた研究テーマのもと、施設毎に担当教員を配置して月単位での指導を実施している。今後は施設との関係性の構築を行いながら、臨床での看護実践から看護学の発展に寄与できるよう、研究支援を通して看護師の思いに沿った取り組みにつなげていきたいと考える。



本学での研究実施風景



学会発表ポスター



## 令和 4 年度看護学科卒業生のための卒業前看護技術演習実践報告

医療保健学部 看護学科

西上あゆみ、本多容子、中野玲子、林周子、長井雅代、齋野貴史、  
米澤知恵、真鍋由希、黄波戸航、前川麻記、松本晃子、松本七十子、  
阿部宏史、甲斐聖子、藤井沙葵、宮岡裕香、三宅光代

### 背景

看護基礎教育を実施する機関として、新人看護師の早期離職やリアリティショックに対する問題については見逃すことができない。令和 2 年度、新型コロナウイルスの発生により、影響を受けた看護基礎教育の補填を目的として、令和 2 年度より本学看護学科において、卒業前看護技術演習実践の企画を行ってきた（青藍,2021：米澤他,2023:松本他,2023）。また、少しでも臨床に近い状況を作るために梅花女子大学の先生をお誘いし、協力を得て、2 大学合同での取り組みとして進めてきた。この実践について学生の満足度が高いだけでなく、テレビに取り上げられるなど波及効果も大きく、令和 4 年度、3 回目の実践を実施することができた。今年度は、梅花女子大学が施設設備調整のため、本学のみ 1 日の開催となったが、その実践について報告する。

### I. 令和 4 年度卒業前看護技術フォローアップ研修の概要

#### 1. 研修の企画

##### 1) 時期

両校の卒業式の日程を鑑み、2023 年 3 月 9 日に企画した。

##### 2) 疑似体験となる研修の環境づくり

4 年生である学生が緊張をもって演習に取り組める仕掛けについて他大学に声をかけ、共同開催とすることにした。実際には、教員同士のつながりもある近隣の梅花女子大学の教員に企画を提案した。本学の教員ではない教員からの指導を受けること、さらに他大学の学生が混じることで、同窓の友人ではない看護学生とコミュニケーションをとることで、4 月入職に向けて新人看護師の疑似体験ができると考えた。2 日間の研修を企画し、双方の大学の演習室を利用することでより今までと異なる環境まで再現したいと考えたがこのことは実現できなかった。すでに既習の演習をさせることから事前学習の実施に関しては学生の裁量に任せること、演習項目は学生で決定できること、臨床を経験してきた教員が新人看護師に対するように実践的に指導することを提示した。

##### 3) 企画した研修内容と各所要時間

内容は、過去 2 年間の学生の希望や反応を踏まえ、(1)職場でのマナー（休みの取り方、先輩や師長との会話、患者との会話）、(2)採血・静脈注射、(3)導尿・膀胱留置カテーテル、(4)筋肉注射・皮下注射、(5)点滴・輸液管理、(6)経鼻経管栄養、(7)吸引・酸素吸入、(8)フィジカルアセスメントで計画した。これまでと同様にプログラムは各項目 40 分程度とし、3 時間の研修の中で 4 項目の演習ができるようにした。

#### 2. 研修の準備

2023 年 2 月 1 日、国家試験前の激励会でプログラムの説明を行い、2 月 17 日を期限として、manaba（クラウド型教育支援サービス）を通じて、申し込みができるようにした。梅花女子大学でも学生を募っていただいた。また、どの演習に参加したいかについての事前調査を入れたところ、全学生が、(2)採血・静脈注射、(5)点滴・輸液管理を希望することがわかった。そこで、これらを 1 つ

にまとめ、「採血・静脈注射、輸液管理」とし、全員が4回のうち1回はこれを実施できるように企画した。

参加教員は、梅花女子大学から6名、本学から17名が参加し、各項目に2-3名の教員を配置、均一に担当できるようにした。また、藍野病院に協力を求めたところ、快諾をいただき、3名の看護師が参加してくださった。今年度は、学内に看護シミュレーションルームを設置していたため、基礎看護演習室と2部屋を使用して実施した。

## II. 卒業前看護技術フォローアップ研修の実際（表1）

研修の概要は表1のとおりであり、参加学生は、56名（梅花22名、藍野34名）であった。当日午前中、参加教員で会場設営を行った。12:30に学生を集合させ、1項目ごとに3~4名の学生でグループを組ませ、グループごとに希望する項目を4項目選択させた。一部のグループでは、本学学生と梅花女子大学の学生を組み合わせるようにした。13:00から1項目につき、40分の演習を実施、5分の移動・休憩時間を持ちながら、グループ毎に自分たちの希望した演習を実施していった。NHK放送局より取材が予定されていたため、その点についても学生に事前に了解を得た。研修終了後に、これに関する評価調査に無記名で記載してもらった。

## III. 卒業前看護技術フォローアップ研修に関する調査結果

全体評価と各演習の満足度に対するアンケート結果を表2に示す。全体では「かなり期待通り」「期待通り」の回答のみ、各演習においても概ね「期待通り」以上という結果となった。

## IV. 卒業前看護技術フォローアップ研修の意義と今後の課題

参加した学生は結果の通り概ね好評を得た。今年度はコロナ禍も緩和され、卒業旅行・引越など従来の卒業関連イベントが再開され、参加者の確保に難渋するかと考えたが、1日であったこともあり、例年並みに学生は参加した。今年度の卒業生は2年の時期からコロナ禍となり、基礎実習Ⅱから領域実習において2年間、臨床実習を制限された学生である。一方、これまでの調査で、学生の不安はコロナ禍に特化したものでないこともわかっているため、今後もこのような取り組みが必要であることが示唆される。現在の学生はZ世代と言われ、タイムパフォーマンス、コストパフォーマンスを重視、実施する前にイベントを低く見積もり、利益に見合わないと考える可能性もある。卒業前の学生にとって本プログラムがよい経験となっても、後輩に伝達する機会は少ない。今後は学生に必要としてもらえる研修として動画などで卒業生からSNSで広報してもらおうなどの取り組みを考慮していきたい。

## 謝辞

本研修を実施するにあたり、藍野病院看護部の看護師様、梅花女子大学の看護学部の先生方におかれましては、研修中の指導で大変お世話になりました。また、京都科学様におかれましては、吸引モデルの借用にご支援いただきましたことに御礼を申し上げます。

## 引用文献

中山由美、重年清香、渡邊敦子（2021）COVID-19 禍における看護学生への卒業直前看護技術フォローアップ研修、梅花女子大学紀要、12、pp26-32  
 松本晃子（2021）コロナ禍の看護大学 4 年生への実習に対する取り組み、日本災害看護学会 HP

「What's New 災害看護メッセージ-備え-」、<http://www.jsdn.gr.jp/CMS/wp-content/uploads/ff0e0d16a20c0fd76cd84ecd43b199a8.pdf>(2021/9/28)

松本晃子他(2023)4年生の入職前の不安を払拭！卒業前フォローアップ研修前編、看護人材育成 Vol.20、No.4、pp44-48

松本晃子他(2023)4年生の入職前の不安を払拭！卒業前フォローアップ研修後編、看護人材育成 Vol.20、No.5、pp56-61

米澤知恵他(2023)新型コロナウイルス感染症流行下における卒業前技術フォローアップ演習に関する実践報告、藍野大学紀要 Vol.35、pp9-15

表1 卒業前看護技術フォローアップ研修の概要

目的	臨地実習の経験の不足を補うことにより、新人看護師のリアリティショックの軽減、職場適応を促進し、早期離職防止を図ることを目的とする。	
スケジュール	月日	内容
	2023年2月	国家試験激励会を通じて本プログラム開催の通知を学生に実施。 manabaを通じて卒業前看護技術フォローアップ研修の通知 学生の希望調査（内容、参加）（2023年2月17日締め切り） 学内参加教員の有志の募集
	3月4日	梅花女子大学の教員と打ち合わせ会議
	3月9日	卒業前看護技術フォローアップ研修実施 (13:00-16:00)
実施方法・内容	場所	藍野大学 看護演習室（通称:基礎看護学演習室） 看護学科シミュレーションルーム
	項目	1) 経管栄養 2) 中央配管を想定した吸引、酸素吸入と超音波吸入 3) 点滴、採血・静脈内注射 4) 導尿 5) 皮下・筋肉注射 6) フィジカルアセスメント 7) 職場でのマナー
	参加人数	学生合計56名（梅花22名、藍野34名）

表2 卒業前看護技術フォローアップ研修に関するアンケート調査結果

	全体評価		採血・ 静脈注射 輸液管理		筋肉注射 皮下注射		導尿・ 膀胱留置 カテーテル	
	総数	割合	総数	割合	総数	割合	総数	割合
1(かなり期待通り)	30	60.0%	37	74.0%	15	62.5%	15	62.5%
2(期待通り)	20	40.0%	13	26.0%	9	37.5%	9	37.5%
3(少し期待外れ)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
4(期待外れ)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	経管栄養		酸素投与・ 吸引		フィジカル アセスメント		職場のマナー	
	総数	割合	総数	割合	総数	割合	総数	割合
1(かなり期待通り)	14	53.8%	15	57.7%	20	76.9%	15	62.5%
2(期待通り)	10	38.5%	9	34.6%	6	23.1%	9	37.5%
3(少し期待外れ)	2	7.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
4(期待外れ)	0	0.0%	2	7.7%	0	0.0%	0	0.0%

藍野大学×茨木市南保健福祉センター 共同研究（活動報告）  
-中高年者に対する運動継続が身体機能（骨格筋・呼吸筋）に与える影響-

理学療法学科

山科吉弘，安藤卓，岩村真樹，森田恵美子，何川渉，梶本浩之，菊池唯，熊部翔

2023 年度の茨木市との共同研究を提案し採択され、テーマ「中高年者に対する運動継続が身体機能（骨格筋・呼吸筋）に与える影響-“運動”継続は力なり！全身の能力アップを目指して」を実施したので報告致します。

1. 研究計画と事前打ち合わせ：

この度の共同研究では、「身体機能」という言葉を使用しておりますが、私たちの研究計画の段階では、四肢や体幹の筋力だけではなく、「呼吸機能・呼吸筋力」に着目したいという思いを持っておりました。そこで、最初は「四肢の筋力だけではなく呼吸筋力をアップさせよう！」というテーマで茨木市の事務局ならびに保健師の方と打ち合わせを行いました。しかし、打ち合わせ会議を開いていく中で、「呼吸」をテーマにした場合、参加者が集まりにくいのではないかという意見をいただき、イメージのしやすい「身体機能」を使用し、その内容の中で「呼吸」の要素を入れていくことになり、上記テーマが決まりました。

2. なぜ呼吸に着目する必要があるのか：

一般的に、呼吸筋力が衰えますと、気道分泌物を除去するための咳嗽能力が低下し、術後や長期臥床後の無気肺や肺炎発症リスクが増大します。高齢者では日常生活活動が自立していても呼吸筋力や誤嚥を直接的に防御する機構である咳嗽能力が低下する<sup>1)</sup>ことがわかっており、日本人を対象とした研究では、自己排痰が可能な咳嗽能力（Cough Peak Flow）値は、240 L/min 以上が（感度 81.2%、特異度 94.5%）必要である<sup>2)</sup>とされておりますが、私たちの先行研究では、日常生活に支障のない高齢者の咳嗽能力の平均±標準偏差は、291.5 ± 100.5 L/min であり、240L/min を下回っている方も多数おられました<sup>1)</sup>。これらのことから日本の死因において肺炎や誤嚥性肺炎が高い割合を占めていることも鑑み、健康づくり対策において、呼吸筋力を含め呼吸機能の維持・改善は不可欠と考えております。

3. 共同研究内容の紹介：（全体の流れは表 1 参照）

表 1. 共同研究の全体の流れ 敬称略

身体機能測定会 1	（全員）	「体のことを知ろう」
講義 1 + 運動 1	（何川）	結果フィードバック, 筋肉はなぜ大切？
講義 2 + 運動 2	（何川）	運動時のリスク管理 四肢の筋トレやってみよう
講義 3 + 運動 3	（岩村）	筋肉をつけるための栄養について
講義 4 + 運動 4	（安藤）	口腔ケアについて
講義 5 + 運動 5	（山科）	呼吸筋力ってなに？
講義 6 + 運動 6	（大和）	体の硬さと血管の病気
講義 7 + 運動 7	（菊池）	尿失禁を防ごう 尿漏れに効果的な運動
身体機能測定会 2	（全員）	身体測定会 1 と同様の内容で測定し変化を確認

### 3-1. 身体機能測定会：

まず、ご自身の体のことについて知っていただくことを目的に身体機能測定会を実施しました。評価項目は、身長・体重・体組成・握力・膝伸展筋力・体幹筋厚・骨密度・血管年齢・糖化度・歩行速度・活動量・肺年齢・呼吸筋力・認知機能検査としました。私たちの測定会の取り組みの強みとしては、必ず身体測定会の結果のフィードバックを実施していることです。身体機能測定会の1～2週間後に必ず結果のフィードバックを実施しており、結果の見方や意味について、参加者全体に講義形式でお伝えし、その後に個別での相談会を実施しております。測定会の結果をフィードバックすることが、運動開始の1つの動機付けになると考えております。最後に、全ての講義ならびに運動メニューの終了後に、再度同じ内容で身体機能測定会を実施しました。最初と終わりに同じ内容の測定を行うことで、各個人で効果があった項目や効果のなかった項目などを見返すことができ、今後も継続して運動を継続していただく機会になると考えております。

### 3-2. 運動教室の開催：

測定会参加のみで終わるのではなく、できるだけ運動教室にも参加することを推奨しており、運動教室は週に1回90分程度（講義：60分、休憩：10分、運動：20分）で実施しました。

運動内容は、頸部・体幹のストレッチ体側、四肢の筋力トレーニング、呼吸筋トレーニング、バランス練習を取り入れ、四肢の筋力だけではなく、呼吸筋力を意識していただけるような内容にしました。

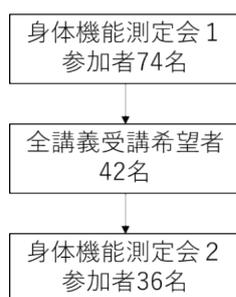


図1. 参加人数



図2. 講義の一場面



図3. 運動実施中の一場面

### 3-3. 取り組みの効果を一部紹介：

結果はまだどこにも公表していないため、具体的な数値の記載は割愛させていただきますが、一部ご紹介させていただきます。アンケート調査では、約8割の方が「健康を意識するようになった」「家でも運動するようになった」と答えており、さらに活動量の調査においても、座業時間数が減少し、中等度の運動強度時間が増えています。また、呼吸筋力は改善傾向を示しており、肺年齢も有意に若くなっていました。これらのことから、本共同研究には効果があったものと思われまます。

#### 今後の課題：

今後の課題は、「運動継続」だと考えます。取り組みが終了すると運動も止めてしまう方が多いため、今後も参加者が楽しみながら継続できるような運動メニューを考えていく必要があると思われまます。

#### 謝辞：

最後になりますが、本共同研究を採用していただいた茨木市南保健福祉センターの皆様、またご協力いただきました理学療法学科の教員の皆様、そしてご参加いただきました参加者の皆様へ御礼申し上げます。

参考文献：Yamashina Y, et al.: Cough Peak Flow of Independent Elderly People. *Advances in Physical Education*,10(4):347-353,2020.

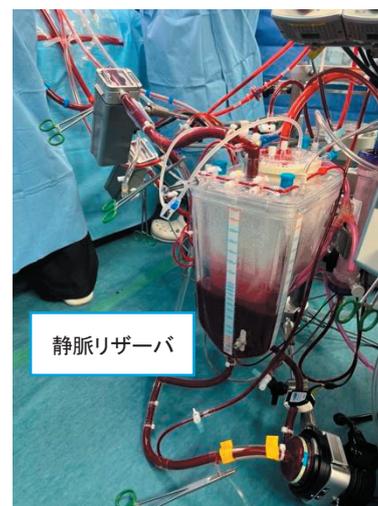
## ハードシェル静脈リザーバーにおける薬液拡散の性能評価 — 一時定数および薬液濃度比による評価 —

臨床工学科 畑中由佳

本研究は、郡慎平准教授と臨床工学科卒業研究生、臨床教授の畑中晃氏とともに行った研究で、藍野大学令和5年優秀研究賞を受賞いたしました。また、日本体外循環技術医学会において JaSECT Award 2023 優秀論文賞を受賞いたしましたので、研究内容の一部についてご報告いたします。

### 1. 研究背景

体外循環とは、上大静脈、下大静脈から心臓に灌流する血液を体外に導き、酸素加して大動脈に送血することで、無血視野を確保し、心臓血管外科手術の補助を行うものである。体外循環中には手術の進行や、刻一刻と変化する患者の生体情報に応じて、送血量や脱血量の変更、薬液投与などを行う必要がある。薬液投与は主に静脈リザーバーから行われるが、薬液投与する際の攪拌、混合性能に関する性能が定められておらず、各種静脈リザーバー間で比較することができないのが現状である。このことから、静脈リザーバーから投与する薬液を速やかに、適切な濃度で送血するためには、使用する静脈リザーバーの特徴を操作者が把握しておく必要がある。また、手術中には静脈リザーバーの液面レベルが変化するため、静脈リザーバーの構造や性能により大きく異なる場合には、その特性も把握しておくことが極めて重要となる。そこで本研究では、薬液の物質収支をもとにして静脈リザーバーから流出する薬液濃度変化に関して解析モデルを立て、液面レベルの変化と回路流出薬液濃度の関係について基礎実験を行い、薬液拡散性能の評価が行えるかどうかを検討した。



### 2. 研究方法

#### ① 解析モデルの作成

静脈リザーバーに流入、流出する薬液質量に注目し、物質収支の考え方をもとにした解析モデルを作成した。本モデルでは静脈リザーバー内のフィルタなど、複雑な構造は単純化した。静脈リザーバーに流入した薬液は、リザーバー内で拡散しても薬液質量自体は変化しないため以下の関係が成り立つ。

$$(\text{流入薬液の質量}) - (\text{流出薬液の質量}) = (\text{静脈リザーバー内残留薬液の質量})$$

ここへ、静脈リザーバーに流入する薬液濃度  $C_i$ 、静脈リザーバーから流出する薬液濃度  $C_o$ 、脱血および送血流量  $Q$ 、静脈リザーバー液面レベル  $V$ 、経過時間  $t$  とする時、式1のような微分方程式が得られる。

$$\alpha V \frac{dC_o}{dt} = (C_i - C_o)Q$$

式 1

ここで薬液流入開始時間を  $t=0$  とし、その時の静脈リザーバー流出薬液濃度  $C_0=0$  とする初期条件で式 1 を解くと、

$$C_0 = C_i(1 - e^{-t/\tau}) \quad \text{式 2}$$

となり、静脈リザーバー内に一定流量で薬液が注入される時の流出薬液濃度は理論上、一次遅れの反応を示す。式 2 より時定数  $\tau$  は、

$$\tau = \frac{\alpha V}{Q} \quad \text{式 3}$$

で表され、薬液注入から一定濃度に収束するまでの時間の目安として用いることができる。

## ② 実験方法

実験回路図を図 1 に示す。作動流体に水道水を使用したシングルパス方式の実験回路を作製した。静脈リザーバーに塩化カリウム溶液 (1mol/L) を一定速度で注入し、回路流出部における電気伝導率を測定することでカリウムイオン濃度の変化を確認した。脱送血の流量は変化させず、4 種類のリザーバー (VR1~VR4) の液面レベル  $V$  を変化させて実験を行った。

## 3. 研究結果

### ① 回路流出部におけるカリウムイオン濃度について

回路流出濃度  $C_0$  の経時変化を図 2 に示した。全ての静脈リザーバーに共通して、液面レベル  $V$  が多い条件では回路流出濃度  $C_0$  が収束するまでに時間がかかり、液面レベル  $V$  が少ない条件では速やかに収束していた。条件別に見ると液面レベル  $V \leq 500\text{mL}$  の条件 (図 2 a,b,c) においては、どの静脈リザーバーも解析モデルと同様に一次遅れの形状で濃度収束と

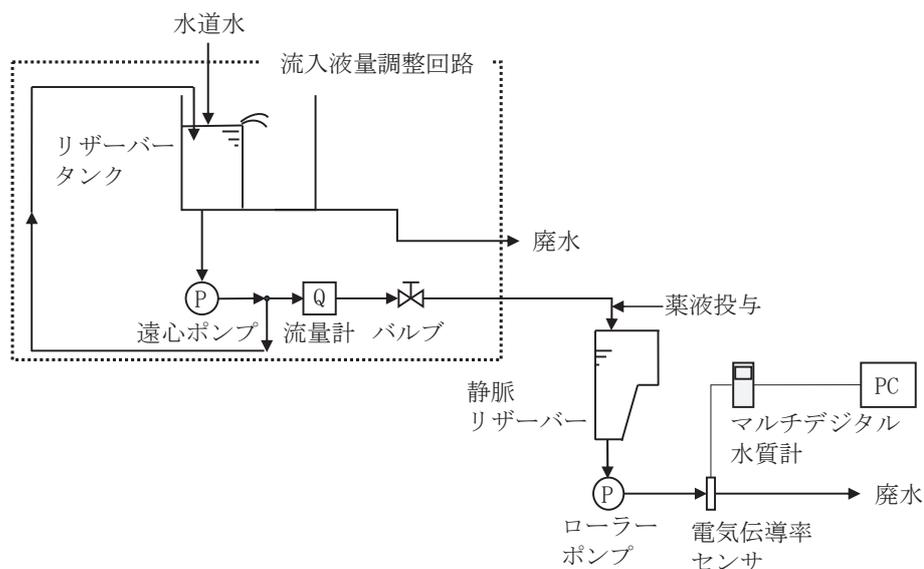
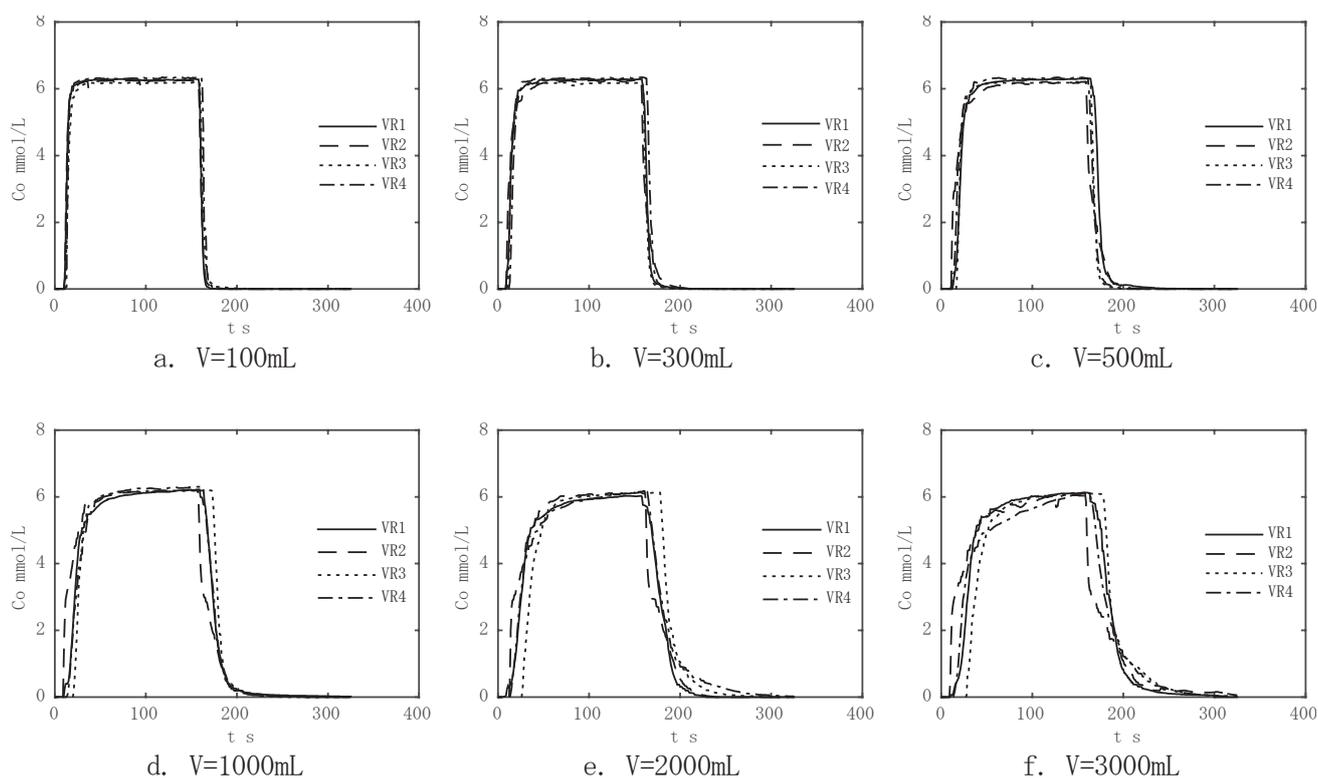


図1 実験回路図

図2 回路流出濃度 $C_0$ の経時変化

なっていたが、液面レベル $\geq 1000\text{mL}$ の条件（図2 d,e,f）においては一次遅れの形状とならないものがあった。特にVR2およびVR4において特徴的な濃度上昇が見られた。

## ② 時定数について

濃度が収束するまでの時間を比較するため、得られた結果を一次遅れとみなして式4をもとに時定数 $\tau$ を算出した結果を表1および図3に示した。時定数 $\tau$ は全ての静脈リザーバーにおいて液面レベル $V$ の少ない方が短くなり、液面レベル $V$ の多い方が長くなる傾向にあった。

## 4. 考察

時定数 $\tau$ は回路流出濃度 $C_0$ が収束に達するまでの目安となるが、図2から液面レベル $V \leq 500\text{mL}$ の条件では濃度変化が一次遅れとなっており解析モデルとよく一致していた。表1、図3から、全条件で時定数 $\tau$ は液面レベル $V$ の増加に伴って曲線的に長くなることがわかった。しかし、液面レベル $V \geq 1000\text{mL}$ においては特にVR2、VR4のように一次遅れから外れるものがあったため、立ち上がり時間 $T_R$ で比較を行ったものを表2、図4に示した。時定数で比較した時と同様の傾向となったが、特にVR4の液面レベル $V=3000\text{mL}$ の時を時定数 $\tau$ で表した場合、液面レベル $V=2000\text{mL}$ の時より時定数 $\tau$ が短くなり、一見、液面レベル $V=3000\text{mL}$ の方が早く濃度収束に達するよう見えたとしたが、立ち上がり時間で評価すると異なる結果となった。これはVR4の液面レベル $V=3000\text{mL}$ の波形（図2 f）をみると、傾きを2つ持つような直線的な変化となっており、一次遅れとみなした解析では見かけ上で時定数 $\tau$ が短くなっていたことが原因である。

表1 時定数  $\tau$ 

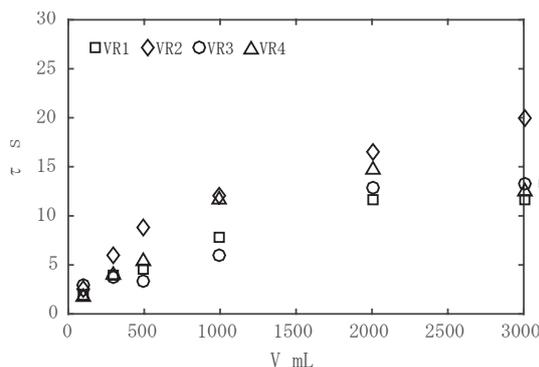
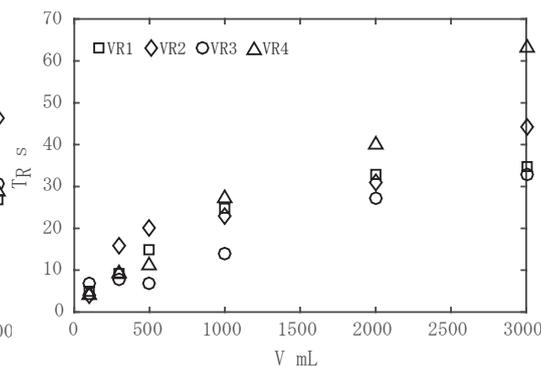
VmL	VR1	VR2	VR3	VR4
100	2.0	2.5	2.9	1.7
300	4.0	6.0	3.8	3.9
500	4.5	8.8	3.3	5.3
1000	7.8	12.0	6.1	11.7
2000	11.6	16.6	12.9	14.7
3000	11.7	19.9	13.2	12.4

unit:s

表2 立ち上がり時間  $T_R$ 

VmL	VR1	VR2	VR3	VR4
100	5	4	7	4
300	9	16	8	9
500	15	20	7	11
1000	25	23	14	27
2000	33	31	27	40
3000	35	44	33	63

unit:s

図3 時定数  $\tau$  の推移図4 立ち上がり時間  $T_R$  の推移

このような場合には、波形の形状に関わらず結果が得られる立ち上がり時間  $T_R$  を活用して評価することは有用であると考えられるが、時定数  $\tau$  との使い分けを検討していく必要がある。

## 5. まとめ

静脈リザーバーから流出する薬液濃度変化に関して解析モデルを立て、液面レベルの変化と回路流出薬液濃度の関係について基礎実験を行った。その結果、液面レベルが少ない条件では解析モデルと実験結果がよく一致しており、時定数を利用することで薬液拡散の評価を行うことができると考えられた。しかし、液面レベルが多い条件では静脈リザーバーの形状や内部構造の違いが影響を及ぼすため、立ち上がり時間による評価が妥当であると考えられた。

参考文献は多数ありますが、割愛させていただきました。

なお、本研究は本論文の一部について示しており、以下の URL にて公開されています。

<https://doi.org/10.7130/jject.49.87>

いつもたくさんのアドバイスを与えてくださる郡准教授、大変な実験であったにもかかわらず一生懸命取り組んでくれた持垣さん、幸地くん、新名くん、主人であり戦友でもある臨床教授の畑中晃氏に深く感謝いたします。



## 拍動流および定常流脳分離体外循環における脳微小循環の検証

医療保健学部 臨床工学科 稲盛 修二

### 1. はじめに

現在、臨床現場では胸部大動脈瘤に対して脳保護を目的とした定常流順行性脳分離体外循環(SCP)が行われている。しかし、低体温・心停止・体部循環遮断等の非生理的状态が伴い、さらに SCP を行うと、術後脳に対する合併症が 3.7~9.3%生じるとも報告されている<sup>1)</sup>。加えて、低体温が脳保護効果に大きな影響を与えと言われてきたが、近年中枢温の設定温度に上昇傾向が見られ、目標とする中枢温が、超低体温(20℃)から高度低体温(25℃)へと移行している<sup>2)</sup>。これらの動向を踏まえて、我々は順行性脳灌流における拍動効果を検証する目的で、世界最大級の放射光施設(SPring-8)において血管造影を行った。

### 2. 実験方法

#### 2-1 Surgical Procedure

実験は、大型放射光施設(SPring-8)で行われた(Fig.1)。ウィスター・ラット(オス,12週 400-500 g ,n = 8)が用いられ、無作為に拍動流発生装置(K-beat)を装着した拍動流群(P群)および装着しない定常流群(NP群)に分類された。麻酔導入のためペントバルビタール(ソムノペンチル) 60 mg/kg (倍希釈)が、腹腔内に投与された。その後実験終了まで、25 mg/kg/h (5倍希釈)の持続投与が行われた。頸部正中切開後、14 G 外筒を用いて気管挿管を行い、ラット用人工呼吸器(RESPIRATOR MODEL SN-480-7 シナノ製作所製)により一回換気量 10 ml/kg、呼吸回数 50 b/min (開胸前) 70 b/min (開胸後)、酸素濃度 100%で呼吸管理が行われた。次に心電図モニターが装着され、血行動態管理および薬剤注入を目的とした動脈ラインが大腿動脈に確保された(22 G 留置針外筒)。さら

に喉頭に温度プローブが挿入され、中枢温を維持する目的でラットの下に電気パッドを使用した。次に胸骨正中切開が行われ、動脈ラインより全身へパリン化 100 IU/kg が行われた。実験を通して出血時間は、全ての症例で 400 秒以上に維持された。送血管として、直径 1.1mm のポリエチレン・カテーテルが、順行性に右総頸動脈に挿入された。続いて、ドレナージ用脱血管として直視下で 18 G 留置針外筒が右心房に挿入された。SPring-8 の実験配置図を Fig.2 に示す。



Fig.1 大型放射光施設 SPring-8

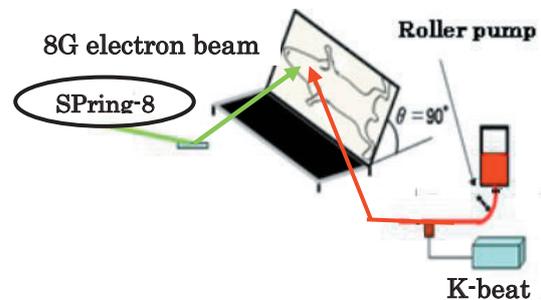


Fig. 2 実験配置図

#### 2-2 Selective Cerebral Perfusion

ラット体外循環システムは回路、熱交換器、人工肺(膜面積: 0.03m<sup>2</sup>、充填量: 2.0ml; 泉工医科工業社製)とローラーポンプ(JMS社製)から構成され、総充填量は 15 ml であった。順行性脳灌流の基本条件として、動脈血二酸化炭素分圧(PCO<sub>2</sub>)を一定に保持する目的で人工肺に 95:5 の比率で酸素と炭酸ガスを付

加し、動脈血  $\text{PCO}_2$  分圧を 40 mmHg 前後に維持した。またヘマトクリット値は、右総頸動脈に送血され右心房より排液される一方通行の間、同種血輸血により約 35% に維持された。

また拍動流は、我々が作成したラット CPB システムに拍動流発生装置 (K-Beat: 特許: 第 5557175 号) を装着し、1Hz の信号で磁気弁を起動させることにより発生させた。

### 2-3 Evaluation

心停止後、常温および表面低体温法を用いた高度低体温における P 群および NP 群に対して、4 ml/min の送血量で順行性脳灌流が施され、血管造影画像より血管径・血管数(Angiographic Score)・灌流分布状態の評価が行われた(Fig.3)。

最後に、P 群において高度低体温時における造影が終了した後、一酸化窒素(NO)の合成阻害剤である L-NAME 50 mg/kg の投与を行い、再び同様の評価を行った。

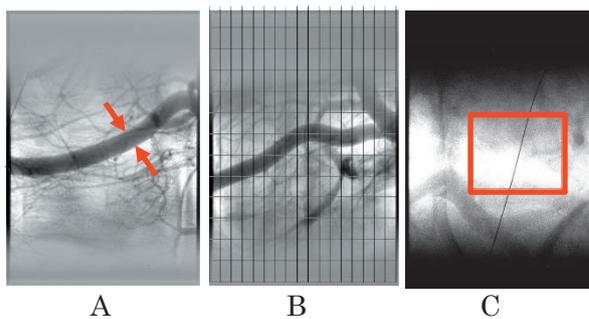


Fig.3 評価項目  
A:血管径・B:血管数・C:灌流分布

## 3. 実験結果

従来の X 線装置では判別が困難であった、微小血管レベルにおける拍動流および定常流順行性脳灌流を検証する目的で、大型放射光施設(SPring-8)においてラットを用いた脳分離体外循環を施行

し、拍動流および定常流における血管造影を行った。

### 3-1 血管径

全症例 300  $\mu\text{m}$  以上の内頸動脈が選択され、造影剤が毛細血管に均等に達した時点で、血管内径を用手的方法により計測を行った(Fig.3-A)。結果、常温での定常流および拍動流において  $12.50 \pm 1.91 \text{ mm}$  vs  $17.01 \pm 2.77 \text{ mm}$  ( $p < 0.05$ )となり、高度低体温において  $11.80 \pm 0.60 \text{ mm}$  vs  $13.28 \pm 0.58 \text{ mm}$  ( $p < 0.05$ )であった。常温および高度低体温いずれの温度においても、血管内径は拍動流のほうが有意に大きい値を示した(Fig 4)。

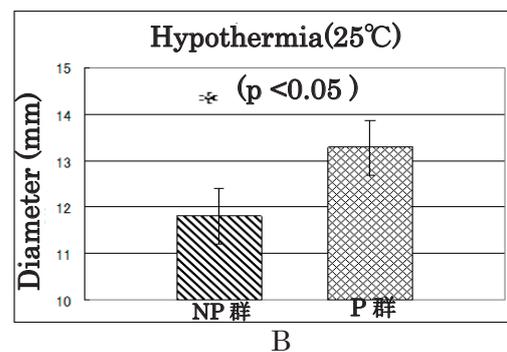
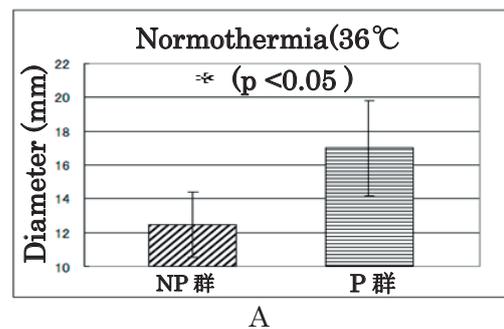


Fig.4 血管径  
A:常温・B:高度低体温

### 3-2 血管数(Angiographic Score)

定常流および拍動流順行性脳灌流を施行し、血管造影画像から血管数の差異を評価した。測定方法は、画像全体に格子図(grid)を投影させ、全直交点と造影された血管内に存在する直交点の比を計

測する方法を用いた (Fig 3-B)。なお、測定は任意の観察者 3 名によって行われその平均値とした。結果、常温での脳分離体外循環における定常流および拍動流の Angiographic Score は、それぞれで  $0.201 \pm 0.018$  vs  $0.266 \pm 0.013$  ( $p < 0.001$ ) となった。また高度低体温においては、定常流および拍動流それぞれで  $0.151 \pm 0.028$  vs  $0.208 \pm 0.023$  ( $p < 0.005$ ) となり、常温および高度低体温いずれにおいても、Angiographic Score は定常流より拍動流が有意に大きい値を示した (Fig. 5)。

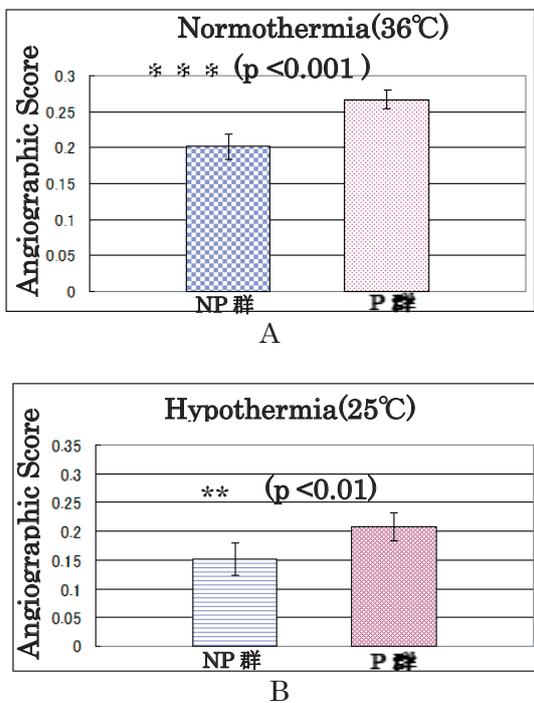


Fig.5 血管数  
A:常温・B:高度低体温

### 3-3 灌流分布

各灌流方法における造影画像に対して、特定の関心領域 (ROI) を設定し、造影開始時の輝度を基準として、造影剤が毛細血管に均等に達したときの輝度を測定した (Fig.3-C)。結果、常温時の定常流で  $87.32 \pm 1.79\%$ 、拍動流で  $83.13 \pm$

$3.00\%$  となり、高度低体温時には、定常流で  $81.54 \pm 5.35\%$ 、拍動流で  $80.07 \pm 2.96\%$  となった。常温ならびに高度低体温のいずれにおいても、拍動流は定常流に比べ灌流の初期段階から著大な輝度の低下が見られ、造影剤の灌流分布が細動脈以下にまで及んでいる事を示したが、高度低体温での最終段階では両者の有意さは認められなかつた (Fig.6)。

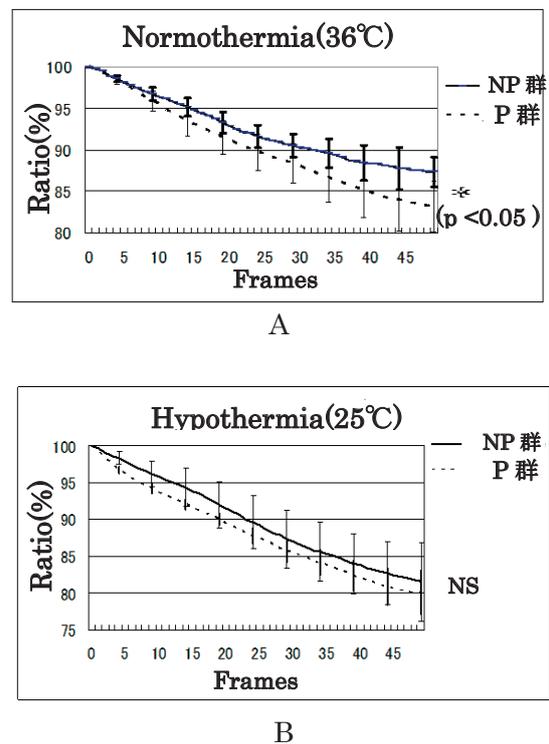


Fig.6 灌流分布  
A:常温・B:高度低体温

### 3-4 Pulsatile Flow With L-NAME

拍動流脳灌流が果たす役割を検証する目的で、P 群において高度低体温の造影後、L-NAME を投与し再び拍動流脳灌流下で造影を行った。結果、高度低体温時における定常流の最大血管径に対する比率は  $97 \pm 1.5\%$ 、Angiographic Score は  $0.137 \pm 0.029$ 、灌流分布状態の輝度は、 $82.11 \pm 2.66\%$  となり、同様の拍動流であるにもかかわらず、L-NAME 非投与時に示された拍動流の有意性は著し

く低下し、全ての評価項目において定常流レベルの値を示した(Fig.7)。

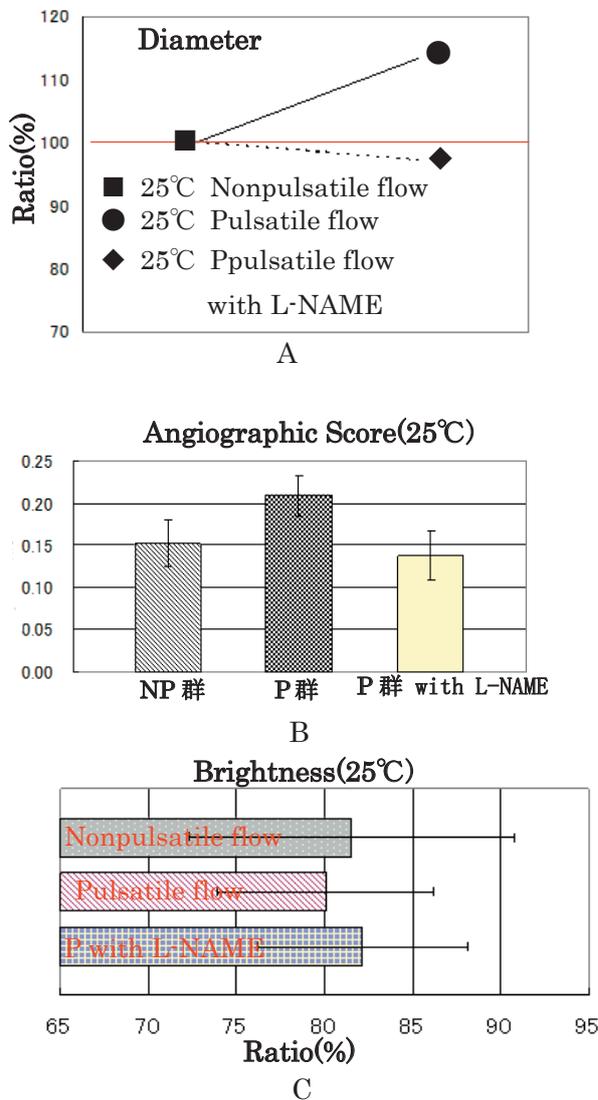


Fig.7 高度低体温時の L-NAME 投与  
A:血管径・B:血管数・C:灌流分布

#### 4. 考察

今回、ラットを用い常温および高度低体温において、脳分離体外循環を施行し、定常流および拍動流灌流における脳微小循環の検証を行った。SPring-8 は、出力エネルギーが 8 GeV であり、従来の一般的な病院および研究施設に設置されている X 線造影装置の約 10 万倍の出力であり、これまで判別が困難であった、

生体における 20  $\mu$  m 以下の微小循環の検証が可能である<sup>3)</sup>。

結果より、脳血管径にける定常流に対する拍動流の有意性は、常温で 36%、高度低体温で 12%認められた。また血管数では、常温で 30%、高度低体温で 33%であった。さらに灌流分布領域においては、高度低体温での有意差は確認できなかったが、常温では 4.7%の有意差が生じた。いずれの評価項目においても常温時の有意差が顕著であったことから、近年中枢温の上昇傾向が見られる脳分離体外循環における拍動流脳灌流は、超低体温の代替法として期待が持てる。

また拍動流の有意性に関して、結果より L-NAME 投与時における拍動流の有意性が全評価項目において定常流以下であったことから、血管内皮細胞に生じるせん断応力によって分泌が惹起される一酸化窒素(NO)の影響が大きいものと考えている。

#### 5. 参考文献

- 1) Harrington DK, Walker AS, Kaukuntla H, et al. Selective antegrade cerebral perfusion II):231-6
- 2) Minatoya K, Ogino et.al. Evolving selective cerebral perfusion for aortic arch replacement: high flow rate with moderate hypothermic circulatory arrest. *Ann Thorac Surg.* 2008 Dec;86(6):1827-32.
- 3) Gabriela A Eppel, David Lo Jacono, Shirai M, Umetani K, Roger G. Evans, Pearson J. Contrast angiography of the rat renal microcirculation in vivo using synchrotron radiation. *A J P- renal physiol.* 2009 ;(296):1023-1031.



# 学年暦・学生の状況



## 2023（令和5）年度 学年暦

事 項	2023 年度
始業	4 月 1 日（土）
入学式	4 月 5 日（水）
前期各種ガイダンス	4 月 3 日（月）～ 4 月 7 日（金）
前期授業開講	4 月 10 日（月）
履修登録締切	4 月 6 日（木）
創立記念日	5 月 1 日（月）
前期履修中止申請期間	① 4 月 20 日（木）～ 4 月 21 日（金） ② 6 月 22 日（木）～ 6 月 23 日（金）後半科目のみ
補講 試験日を含む	5 月 13 日（土）、7 月 1 日（土）、 7 月 22 日（土）、 8 月 7 日（月）～ 8 月 11 日（金）
前期授業終了 試験日を含む	8 月 4 日（金）
夏期休暇	8 月 12 日（土）～ 9 月 20 日（水）
後期履修ガイダンス	9 月 21 日（木）
後期授業開講	9 月 22 日（金）
後期履修登録修正期間	9 月 12 日（火）～ 9 月 14 日（木）
あいの祭	10 月 21 日（土）～ 10 月 22 日（日）
後期履修中止申請期間	① 10 月 5 日（木）～ 10 月 6 日（金） ② 12 月 7 日（木）～ 12 月 8 日（金）後半科目のみ
冬期休業	12 月 27 日（水）～ 1 月 7 日（日）
後期授業再開	1 月 9 日（火）
補講 試験日を含む	10 月 28 日（土）、12 月 2 日（土）、 1 月 20 日（土）、1 月 23 日（火）、 1 月 30 日（火）、1 月 31 日（水）、 2 月 5 日（月）～ 2 月 16 日（金）
後期授業終了 試験日を含む	2 月 2 日（金）
学位記授与式	3 月 12 日（火）
春期休業	3 月 14 日（木）～ 3 月 31 日（日）
終業	3 月 31 日（日）

収容定員および在学する学生数等（藍野大学ホームページより）

(1) 収容定員および在籍学生数（2023年5月1日現在）

医療保健学部

学部・学科等	入学定員	編入定員	収容定員	学年別在籍者数				在籍者数	収容定員 充足率
				1年	2年	3年	4年		
看護学科	115	2 (3年次)	464	129	121	122	116 (6)	488	1.05
理学療法学科	100	-	400	117	116	108	103 (5)	444	1.11
作業療法学科	40	-	160	45	40	32	53 (6)	170	1.06
臨床工学科	40	-	160	23	31	51	42 (9)	147	0.92
医療保健学部	295	2	1,184	314	308	313	314	1,249	1.05

※4年次の（ ）は、留年者内数。1～3年次における留年制度を設けていないため4年次までは自動的に進級し、必要な必修科目の単位を修得していないと4年次で留年となる。

看護学研究科

学部・学科等	入学定員	編入定員	収容定員	学年別在籍者数		在籍者数	収容定員 充足率
				1年	2年		
看護学研究科	6	-	12	8	10 (3)	18	1.50

※2年次の（ ）は、留年者内数。1年次における留年制度を設けていないため2年次までは自動的に進級し、必要な必修科目の単位を修得していないと2年次で留年となる。

(2) 退学者数および除籍者数

退学者数

年度	学科	1年	2年	3年	4年	合計
2020 (令和2)	看護	2	1	0	0	3
	理学療法	1	1	3	2	7
	作業療法	0	1	1	1	3
	臨床工学	1	4	3	0	8
	合計	4	7	7	3	21
2021 (令和3)	看護	5	2	2	4	13
	理学療法	4	4	1	1	10
	作業療法	1	0	0	2	3
	臨床工学	0	1	4	2	7
	合計	10	7	7	9	33

学年暦・学生の状況

2022 (令和4)	看護	2	0	0	5	7
	理学療法	2	7	3	1	13
	作業療法	0	4	1	5	10
	臨床工学	2	2	2	2	8
	合計	6	13	6	13	38

退学の理由（複数回答あり）

年度	学科	就学意欲の低下	進路変更（他学校）	進路変更（就職等）	経済的困難	学力不足	身体疾患	心身衰弱	海外留学	その他
2020 (令和2)	看護	1	1	1	0	0	0	0	0	0
	理学療法	1	4	0	1	0	1	0	0	0
	作業療法	1	1	0	1	0	0	0	0	0
	臨床工学	2	5	0	0	1	0	0	0	0
	合計	5	11	1	2	1	1	0	0	0
2021 (令和3)	看護	2	6	1	1	0	1	1	0	1
	理学療法	3	4	0	0	2	0	0	0	1
	作業療法	0	2	1	0	0	0	0	0	0
	臨床工学	1	4	1	0	0	0	1	0	0
	合計	6	16	3	1	2	1	2	0	2
2022 (令和4)	看護	2	3	1	1	0	0	0	0	0
	理学療法	4	5	1	0	3	0	0	0	0
	作業療法	3	7	0	0	0	0	0	0	0
	臨床工学	2	3	1	1	1	0	0	0	0
	合計	11	18	3	2	4	0	0	0	0

除籍者数

年度	学科	1年	2年	3年	4年	合計
2020 (令和2)	看護	0	0	0	1	1
	理学療法	0	0	0	0	0
	作業療法	0	0	0	0	0
	臨床工学	0	0	2	0	2
	合計	0	0	2	1	3
2021 (令和3)	看護	0	1	0	0	1
	理学療法	0	0	0	0	0
	作業療法	0	0	0	0	0
	臨床工学	0	0	0	0	0
	合計	0	1	0	0	1

2022 (令和4)	看護	1	0	0	0	1
	理学療法	0	1	0	0	1
	作業療法	0	0	0	0	0
	臨床工学	0	1	0	0	1
	合計	1	2	0	0	3

除籍の理由

年度	学科	就学意欲の低下	進路変更(他学校)	進路変更(就職等)	経済的困難	学力不足	身体疾患	心身衰弱	海外留学	その他
2020 (令和2)	看護	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	理学療法	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	作業療法	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	臨床工学	0	0	0	1	0	0	0	0	1
	合計	0	0	0	2	0	0	0	0	1
2021 (令和3)	看護	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	理学療法	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	作業療法	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	臨床工学	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	1
2022 (令和4)	看護	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	理学療法	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	作業療法	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	臨床工学	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	3

看護学研究科

退学者数

年度	研究科	1年	2年	3年
2020 (令和2)	看護学	0	3	3
2021 (令和3)	看護学	0	0	0
2022 (令和4)	看護学	0	0	0

除籍者数

年度	研究科	1年	2年	3年
2020 (令和2)	看護学	0	0	0

2021 (令和3)	看護学	0	0	0
2022 (令和4)	看護学	0	1	1

(3) 社会人学生数 (2023年5月1日現在)

学科	社会人学生数
看護	4
理学療法	2
作業療法	1
臨床工	1
学科合計	8
看護学研究科	18

※ここでの社会人学生とは、25歳以上の者、または職に就いている者。

卒業生数および国家試験の状況 (藍野大学ホームページより)

看護学科

学科	年度	卒業生数	看護師国家試験			保健師国家試験		
			受験者数	合格者数	不合格者数	受験者数	合格者数	不合格者数
看護	2020 (令和2)	93	93	88	5	18	18	0
	2021 (令和3)	92	92	92	0	20	19	1
	2022 (令和4)	93	92	92	0	20	20	0

※編入生含。保健師国家試験は選択制。

理学療法学科

学科	年度	卒業生数	理学療法士国家試験		
			受験者数	合格者数	不合格者数
理学療法	2020 (令和2)	86	86	84	2
	2021 (令和3)	89	89	83	6
	2022 (令和4)	88	88	88	0

作業療法学科

学科	年度	卒業生数	作業療法士国家試験		
			受験者数	合格者数	不合格者数
作業療法	2020 (令和2)	47	47	39	8
	2021 (令和3)	41	41	27	14
	2022 (令和4)	36	36	36	0

臨床工学科

学科	年度	卒業生数	作業療法士国家試験		
			受験者数	合格者数	不合格者数
臨床工	2020 (令和2)	38	38	37	1
	2021 (令和3)	26	26	25	1
	2022 (令和4)	35	35	34	1

看護学研究科

研究科	年度	修了者数
看護学	2020 (令和2)	2
	2021 (令和3)	3
	2022 (令和4)	5

# 研究業績と社会貢献



## 科学研究費助成事業について(2023年度)

※研究代表者。研究種目別、学科別、研究代表者五十音順

### ◎基盤研究(C)

#### 看護学科

課題番号	研究課題	研究代表者
22K11077	学校で働く看護師のコンピテンシーモデルに基づく教育プログラムの構築	岩佐 美香
22K10889	1型糖尿病患者の療養と社会生活の両立を支援するソーシャルサポートの開発と評価	梅田 英子
23K10277	アルコール関連問題をもつ対象者への訪問看護・介護職によるケアガイドラインの開発	河野 由理
21K10900	妊婦の会陰部裂傷と産後の QOL に対する会陰部マッサージの効果検証と手技の確立	齋藤 祥乃
21K11068	病院勤務の看護師の防災リテラシーの実態と向上	西上 あゆみ
20K11146	認知症の高齢者に対するカラーテープを用いた転倒予防策の実用化の検証	本多 容子
19K11265	舌苔を有する高齢者に対する効果的で心地よい舌苔除去方法の検証	米澤 知恵
21K02011	医療と看護と介護の連携に活かされるホームヘルパーの観察項目の研究	和田 恵美子

#### 理学療法学科

課題番号	研究課題	研究代表者
22K11328	超音波画像診断装置を用いた中間広筋の効果的なトレーニング方法の検討	熊部 翔
23K10573	地域在住高齢者の転倒に及ぼす筋量・筋力の複合影響についての追跡研究	高田 昌寛
22K11515	日本人アスリートのスポーツ損傷における発症頻度の個人差に遺伝子多型が及ぼす影響	福山 友見

#### 作業療法学科

課題番号	研究課題	研究代表者
21K12167	子どもの書字能力の質的評価ツールの開発	高畑 脩平
20K11224	高齢者の握り損ないを科学する ―握る力と腕の力の持続出力調整機能の研究―	津田 勇人
21K11232	脊髄損傷における新規電気刺激リハビリ方法開発へ向けた生化学的解析によるアプローチ	宮本 陳敏

#### 臨床工学科

課題番号	研究課題	研究代表者
20K09722	宇宙環境における内耳前庭の発生維持とバイオメカニズム	田浦 晶子

## ◎若手研究

## 看護学科

課題番号	研究課題	研究代表者
21K13430	医療・保健・福祉分野に従事する対人援助職の人材確保に関する研究	中井 良育
20K13961	発達障害児の両親支援に活用するペアレント・リフレクティブ・インタビューの指針作成	西田 千夏
23K12757	発達障害児の両親支援に向けたリフレクティブ・インタビュー実践プログラムの開発	西田 千夏

## 理学療法学科

課題番号	研究課題	研究代表者
23K16831	高齢者の抑うつ症状改善のためのナッジを活用した身体活動プログラムの開発と効果検証	安藤 卓
20K19329	クール・レジスタンス・運動が筋組織内酸素代謝に及ぼす影響と臨床への応用	後藤 昌弘
23K12805	アカデミック・ライティングにおける論証の「型」の特徴と可能性	杉山 芳生
21K17521	腸内環境のエース「短鎖脂肪酸」をいかに増やすか、運動処方の開発	森田 恵美子
22K17528	下肢に慢性的な痛みを有する高齢者の呼吸筋力増強のための水中運動プログラムの作成	山科 吉弘

## 作業療法学科

課題番号	研究課題	研究代表者
22K17644	脊髄損傷の再生医療における運動介入の効果に関する研究	塚越 千尋
23K16596	ひきこもり当事者の自宅内活動と主観的価値の解明	真下 いずみ

## 中央研究施設客員研究員

課題番号	研究課題	研究代表者
22K17448	温電法が慢性炎症と動脈硬化度に与える影響	長井 雅代

## ◎研究活動スタート支援

## 看護学科

課題番号	研究課題	研究代表者
20K23243	ダブルケアを行う介護者の介護負担軽減につながるストレスコーピングに関する研究	堀川 尚子

## 著書・教科書

著者, 共著者	書名または章名	(左欄が章名るとき) In: 編者名, editors. 書名. 発行地: 出版社; 出版年. ページ (左欄が書名るとき) 発行地: 出版社; 出版年
佐々木恵雲	同朋運動ブックレット②『老病死をめぐる医療と差別』-感染症と優生思想を中心に-	京都: 一般財団法人同和教育振興会; 2023
岡崎伸, 合田友美, 西田千夏 (編)	第2章 家族が語ってくれたこと	In: 岡崎伸, 合田友美, 西田千夏 (編). 家族の声・専門家の体験から学ぶ 小児緩和ケア児と家族支援のヒント. 神奈川: 大和出版; 2023. 12, 24-32
岡崎伸, 合田友美, 西田千夏 (編)	第3章 小児緩和ケア児の支援メンバーからのメッセージ	In: 岡崎伸, 合田友美, 西田千夏 (編). 家族の声・専門家の体験から学ぶ 小児緩和ケア児と家族支援のヒント. 神奈川: 大和出版; 2023. 42, 45-48
佐藤浩章 (監修)、大串晃弘 (編集)、大串晃弘、前田裕介、上月翔太、根岸千遥、西田千夏	Ⅲ部 教育指導力向上のための応用問題と解説	In: 佐藤浩章 (監修)、大串晃弘 (編集)、看護教員のための問題と解説で学ぶ教育指導カトレーニング. 東京: 医学書院; 2023. 129-145
泉澤真紀, 井須孝弘, 今井江里, 入江安子, 岩佐美香, 岩本真紀, 太田浩子, 王志霞, 岡本綾子, 小出淳貴, 佐藤由恵, 鈴木智子, 副島堯史, 竹内千夏, 土岐弘美, 戸高理恵, 永吉円, 西元康世, 平谷優子, 藤澤盛樹, 法橋尚宏, 三木佳子, 宮原真二, 森口由佳子, 守屋薫, 山川恵子, 山田暢子, 渡邊幹生, 和辻雄仁, 法橋尚宏 (編集)	基礎看護学 35 バイタルサイン 36 生活・療養環境 37 移動と移送 38 片麻痺患者の援助 39 清潔操作 40 日常生活援助	In: 法橋尚宏 (編著)、看護師国家試験アップデート2024、神奈川: EDITEX; 2023. 76-86
尾藤祥子	第3章 領域別の実習指導方法 V小児期領域	In: 一般社団法人日本作業療法士協会 (編)、MTDLPを活用した作業療法参加型臨床実習ガイド. 東京: 一般社団法人日本作業療法士協会養成教育委員会; 2023. 33-36
真下いづみ	第3章 領域別の実習指導方法 Ⅲ精神科領域	In: 一般社団法人日本作業療法士協会 (編)、MTDLPを活用した作業療法参加型臨床実習ガイド. 東京: 一般社団法人日本作業療法士協会養成教育委員会; 2023. 22-30
真下いづみ	第1章 検査・尺度による評価 50 改訂版フレンチアイ活動指数 (FAI) 71 興味・関心チェックシート	In: 早坂友成, 岩根達郎, 森元隆文 (編著)、精神科リハビリテーション評価法ハンドブック. 東京: 中外医学社; 2023. 215-219, 318-322
真下いづみ	第6章 養成教育における教育実践 6 (養成校6) 藍野大学	In: 小林幸治編, 臨床作業療法NOVA MTDLPと作業療法参加型臨床実習. 東京: 青海社; 2023. 129-133

<p>小林彬, 臼田孝, 栗山敏秀, 室英夫, 高田敬輔, 石垣武夫, 柴崎一郎, 石森義雄, 浅野安人, 大木眞一, 関口眞吾, 足立正二, <u>五十嵐朗</u>, 薦田夏樹</p>	<p>15 生体計測における各種センサの利用</p>	<p>In : 計測自動制御学会編、次世代センサ協議会編. 計測・制御セレクションシリーズ6 センサ技術の基礎と応用、東京：コロナ社；2023. 221-234</p>
---	----------------------------	--

## 学術論文(原著論文・総説等)

著者, 共著者	タイトル	雑誌名 出版年; 巻(号) : ページ
Yoshikawa K, Kunishima S, <u>Kurihara H</u> , Takahashi K, Fukuda A, Murai K, Echizenya T, Nakaya I, Soma J	Renal injury associated with MYH9 disorder with 5773delG mutation	Clin Nephrol 2023 ; 99(3) : 153-160
松本晃子、西上あゆみ	COVID-19により修学に影響を受けた新人看護師に対する教育的支援の実態	日本看護評価学会誌 2023 ; 13(1) : 1-8
Akiko MATSUMOTO, Yuki MANABE, Ayumi NISHIGAMI, Reiko NAKANO	Future Perspectives on Methods of Integrated Practice-Review of Syllabi in nursing colleges-	AINO JOURNAL 2023 ; 20 : 1-9
Tomomi FUJIMOTO, Yuri <u>KAWANO</u> and Yumiko OHSHIMA	Using manga/picture books to understanding of patients with mental disorder -In-school psychiatric and mental health nursing clinical practicum during the Covid-19 pandemic-	AINO JOURNAL 2023 ; 20 : 17-25
Takeshi Shibukawa, Akira Fujiyoshi, Mohammad Moniruzzaman, Naoko Miyagawa, Aya Kadota, Keiko Kondo, <u>Yoshino Saito</u> , Sayaka Kadowaki, Takashi Hisamatsu, Yuichiro Yano, Hisatomi Arima, Ikuo Tooyama, Hirotsugu Ueshima, Katsuyuki Miura	Association of step counts with cognitive function in apparently healthy middle-aged and older Japanese men	Preventive Medicine Reports ; 38
Reiko NAKANO, Yuki MANABE, Akiko MATSUMOTO, Glenn MORI	Trends and Teaching Medical Safety in Basic Nursing Curriculum in Japan- An Analysis of Seventeen Research Articles on Nursing Teachers and Clinical Instructors-	AINO JOURNAL 2023 ; 20 : 27-39
谷野多見子, 上野美由紀, <u>山田和子</u> , 森岡郁晴	男性労働者の休養を評価する尺度の開発	日本公衆衛生雑誌 2023 ; 70(11) : 775-783
岩佐美香	特別支援学校で働く看護師に必要な看護技術の研修項目の検討	文理シナジー 2023 ; 27(1) : 63-71
岩佐美香	看護教諭と学校で働く看護師の連携に関する研究動向	文理シナジー 2023 ; 27(2) : 157-164
<u>Mika Iwasa</u> , Hiromi Kawasaki	Examining the Effectiveness of Using Disaster Scenarios in Health Care Education	The Japanes Journal of Safety Education 2023 ; 23(1) : 3-17
<u>和田恵美子</u> , 千葉宏毅, 藤原奈佳子, 丹野克子	在宅ケアにおけるホームヘルパーと多職種の連携課題の概念構造から抽出した観察項目の特定—療養者の以上穂早期発見を目指して—	日本在宅ケア学会 2023 ; 27 (1) : 84-92

中井良育	社会福祉施設に従事する対人援助職の職場定着策に関する検討－対人コミュニケーション・スキルが職務特性に与える影響から－	日本地域政策研究 2023 ; 31 : 58-67
中井良育	要支援高齢者の重度化予防に向けた地域ケア会議のあり方にかかる考察－専門職からの助言とコーディネート機能による介入の効果検証－	ケアマネジメント学 2023 ; 22 : 93-105
堀智子、松本七十子、前川麻記	在宅療養を送る重症心身障害児のコミュニケーションスキルの発達と養護者のニーズに関する研究	日本看護福祉学会誌 2023 ; 28(2) : 97-104
堀川尚子、赤井由紀子	ダブルケアを行う女性が感じるストレスの特徴	日本ヒューマンヘルスケア学会誌 2023 ; 8(2) : 31-40
安藤卓、山科吉弘、岩村真樹、大和洋輔、森田恵美子	高齢者の身体活動促進のための行動変容アプローチ	地域ケアリング 2023 ; 25(6) : 38-41
Ando S, Iwamura M, Yamato Y, Shinbo K, Nanikawa W, Higuchi Y	Exploring the Profile of Community Day House Attendees: An Investigation of Older Adults in Ibaraki City, Japan	Japanese Journal of Community-based Comprehensive Physical Therapy (地域理学療法学) ; In press
佐藤亮、平山朋子、中野渡達哉、三宮克彦、田中貴広、坪田朋子	大規模災害の被災経験の有無による理学療法専攻学生の 災害に関する価値意識の違い	日本災害医学会雑誌 2023 ; 28(3) : 128-130
山科吉弘	人生100年時代の元気長寿のための身体機能向上－姿勢と呼吸機能に着目して－	介護予防・健康づくり 2023 ; 10(1) : 32-34
Yamashina Y, Aoyama H, Hirayama T, Morita E, Sakagami N, Honda H, Tabira K	Inspiratory Muscle Training Effects on Respiratory Function and Coughing Ability in Men With Obesity	Physical Therapy Rehabilitation Science 2023 ; 12(4) : 365-371
Yamashina Y, Kumabe S, Tabira K	Sustained effects of underwater walking on respiratory muscle strength of the elderly	The Journal of Japanese Society of Balneology, Climatology and Physical Medicine 2023 ; In press.
新名岬、宮澤子龍、辻岡哲夫、渡辺一志、松浦義昌、横山久代、川端悠、山科吉弘	吹き戻し棒の内圧・流速・流量のワイヤレス計測 ～ 内蔵型電子吹き戻し棒の試作 ～	信学技報 2023 ; 123(248) : 47-52
高田昌寛、阪上奈巳、熊部翔、青山宏樹、塚越千尋、山科吉弘	キャンパス内における障がい者の働く場所と学生がつながる仕組みの創出	地域理学療法学 2023 ; 3 : 1-8.、Online ISSN : 2758-0318
菊池唯、永井由美子	医療系女子学生のヘルスリテラシーと学業パフォーマンスの実態調査 ～月経随伴症状からの検討～	ヘルスプロモーション理学療法研究 2023 ; 12(3) : 137-145
高畑脩平、塚越千尋、江尻知穂、松本康志、津田勇人	視機能の専門家と作業療法士の協働～「見る」ことに問題を抱える2事例を通して～	大阪OTジャーナル 2023 ; 37(1) : 33-39
宮本年也、杉村孝彰	臨床実習を直前に控えた学生の実習指導方法へのニーズと不安要因との関係	リハビリテーション教育研究 2023 ; 29 : 6-11
宮本年也、杉村孝彰	文章読解・作成能力検定の設問と作業療法士国家試験の可否との関連	リハビリテーション教育研究 2023 ; 29 : 12-17
高畑脩平、榎本大貴、田村亮太、野田遥、石田祥一、寺山慧	読み書き困難児の包括的・網羅的スクリーニング検査の 開発にむけた予備的研究	日本発達系作業療法学会誌 2023 ; 10(1) : 15-23

山口桜子、友利幸之介、齋藤佑樹、高畑脩平	学校作業療法を円滑に実践できるようになるまでのプロセス：障壁やその対処方法に関する質的研究ー	作業療法 2023 ; 42(5) : 630-637
高畑脩平	【いま,精神科の作業療法士ができること】発達障害に対して作業療法士ができること	日本精神科病院協会雑誌 2023 ; 42(3) : 46-50
真下いづみ	精神科領域の就労支援にMTDLPを活用する意義	作業療法ジャーナル 2023 ; 57(1) : 16-21
Izumi Mashimo, Kayano Yotsumoto, Hirokazu Fujimoto, Takeshi Hashimoto	Factors Influencing Subjective QOL Among Community-Dwelling People with SMI Receiving Home-Visit Occupational Therapy	Journal of Psychosocial Rehabilitation and Mental Health 2023
真下いづみ、干飯純子、四本かやの、橋本健志	生活行為向上マネジメントを用いた訪問支援を利用した統合失調症圏・気分障害圏の人々の生活行為と時間使用の変化	作業療法 accepted
井出千束、中野法彦、兼清健志、安部征哉、塚越千尋、宮本陳敏、玉地雅浩、横山雛子、林部美紀	脊髄の再生ー再考ー	びわこ健康科学 2022 ; 1 : 11-17 (年報2022未掲載)
森田真美、田浦晶子、伊藤通子、宮崎真和、辻純、嘉田真平、安里亮	喉頭蓋顆粒細胞腫例	耳鼻咽喉科臨床 2023 ; 116(6) : 593-599
Akiko TAURA, Hideaki OHGITA, Kazuo FUNABIKI, Jun TSUJI	A study of the head positional nystagmus in a PPPD case successfully treated with SSRI and vestibular rehabilitation (a case report)	AINO JOURNAL 2022 ; 20 : 11-16
Sato T, Takahashi Y, Mizutani Y	Why have different key biomarkers been reported in the same types of samples from patients with identical diseases?	Urine 2023 ; 5 : 53-56
Shimpei Kohri, Koki Matsuda, Yuka Hatanaka, Akira Hatanaka	Influence on the concentration of drug solution in a venous reservoir by the change of flow rate of a blood pump	Journal of Biorheology 2023 ; 37(2) : 83-87
山本祐輔、原地絢斗、村松歩、長原一、武村紀子、水野（松本）由子、下條真司	脳波による脳機能ネットワークの結合性を用いたRNNによる不安状態判別評価	電気学会論文誌C 2023 ; 143(4) : 430-440
備前宏紀、木村大介、村松歩、山本祐輔、原地絢斗、水野（松本）由子	「単一脳領域における賦活」および「脳内ネットワーク」の2つの視点による運動学習の脳機能変化と運動学習の遅速による脳機能変化差異の解明	作業療法 2023 ; 42(3) : 270-278
飯尾祐加、山本祐輔、原地絢斗、村松歩、水野（松本）由子	若年女性における呼吸エクササイズの自律神経活動への影響の分析	日本感性工学会論文誌 2023 ; 22(3) : 265-271

## 学会発表等(含座長)

発表者, 共同発表者	タイトル	学術集会名・会議名, 場所, 日程, 雑誌名等 (雑誌名は任意)
吉田麻美、宮河小百合、中嶋素子、永田浩志、山本直宗、杉野正一、 <u>佐々木恵雲</u> 、大澤仲昭	2型糖尿病患者におけるGLP-1受容体作動薬セマグルチドの有用性の検討	第66回日本糖尿病学会年次学術集会、鹿児島、かごしま県民交流センター、2023.5.11
西上あゆみ、松本晃子	インフォメーション・エクステンジ25、病院看護師の防災リテラシーを考えてみよう	第27回日本看護管理学会学術集会、東京、2023.8.25
西上あゆみ、渡邊智恵、 <u>松本晃子</u> 、宮岡裕香	交流集会4、病院看護師の防災リテラシーを考えてみよう	日本災害看護学会第25回年次大会、兵庫、2023.9.2-3
下村実邦子、 <u>西上あゆみ</u>	妊娠期における災害時のトイレの備えについての実態と関連要因	日本災害看護学会第25回年次大会、兵庫、2023.9.2-3
塚原幸世、 <u>西上あゆみ</u>	災害発生時の病院看護師の参集に関する研究の動向	日本災害看護学会第25回年次大会、兵庫、2023.9.2-3
井村享子、 <u>西上あゆみ</u>	病院に勤務する看護師の災害対策に関する意識調査の研究の動向	日本災害看護学会第25回年次大会、兵庫、2023.9.2-3
西上あゆみ	共催セミナー：災害現場に求められる看工連携(座長)	日本災害看護学会第25回年次大会、兵庫、2023.9.2-3
西上あゆみ、渡邊智恵、 <u>松本晃子</u> 、宮岡裕香	交流集会10.病院看護師の防災リテラシーを考えてみよう	第43回日本看護科学学会学術集会、山口、2023.12.9
下村実邦子、 <u>西上あゆみ</u>	災害時における妊娠期の備えについての実態～初産婦と経産婦の比較～	第43回日本看護科学学会学術集会、山口、2023.12.9
渡邊智恵、 <u>西上あゆみ</u> 、藤井知美	風水害を経験した被災者が認識した復興感に関する調査	第43回日本看護科学学会学術集会、山口、2023.12.9
上田愛子、 <u>西上あゆみ</u> 、田中裕樹	高等学校(本科)の衛生看護科で学ぶ高校生における自己効力感とBigFive性格特性との関連	第43回日本看護科学学会学術集会、山口、2023.12.9
西上あゆみ、渡邊智恵、 <u>松本晃子</u> 、宮岡裕香	病院勤務の看護師の防災リテラシー項目の妥当性	第29回日本災害医学会総会・学術集会、京都、2024.2.22
西上あゆみ、渡邊智恵、 <u>松本晃子</u> 、宮岡裕香	災害対応経験のある看護師による病院勤務看護師の防災リテラシー	第29回日本災害医学会総会・学術集会、京都、2024.2.22
池端 優樹、 <u>西上あゆみ</u>	がん患者への防災教育に関する研究の動向	第29回日本災害医学会総会・学術集会、京都、2024.2.22
中野玲子、西上あゆみ、真鍋由希	統合看護学実習における病院移転体験による学生の看護マネジメントの学び	第43回日本看護科学学会学術集会、山口、2023.12.9
田丸朋子、 <u>本多容子</u>	採血を行う看護師の姿勢分析 苦手意識の有無による違い	日本健康行動科学学会
<u>本多容子</u> 、田丸朋子、 <u>三宅光代</u>	個別性をふまえたカラーテープの活用は認知症高齢者の転倒予防に有効か?	
田丸朋子、 <u>本多容子</u>	カラーテープを用いた認知症治療病棟における転倒予防効果の検討	日本看護技術学会第21回学術集会、熊本、2023.10.14-15
田丸朋子、 <u>本多容子</u>	学生の臥床患者へ採血における全身姿勢と穿刺成功率との関係	日本看護技術学会第21回学術集会、熊本、2023.10.14-15
<u>本多容子</u> 、田丸朋子、 <u>三宅光代</u>	着色したベッド柵は高齢者がベッドまで歩行する際の目印になるか	第43回日本看護科学学会学術集会、山口、2023.12.9-10

小林俊博、中村葉月、鎌田琴、井上智恵、本多容子	術後膀胱留置カテーテル挿入患者の不快感についての実態調査	第54回日本看護学会学術集会、大阪、2023.9.29-30
久保翔太郎、畑中悠位、山中詩穂、松本晃子、米澤知恵、三宅光代、本多容子	おむつ交換時の感染対策～ベッドの高さによって汚染被曝に違いはあるのか～	第31回日本慢性期医療学会、大阪、2023.10.19、16時30分～17時10分
浦添美海、浦埜有未加、下川原亮子、テキセ化、米澤知恵、松本晃子、三宅光代、本多容子	病衣への尿汚染を減らすオムツパットの当て方	第31回日本慢性期医療学会、大阪、2023.10.19、16時30分～17時10分
Sanae Ninomiya, Kiyoko Naito, Yoshino Saito, Hisayo Okayama	Prevalence of lower urinary tract symptoms based on a web survey in 5,000 Japanese women	27th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) The University of Hong Kong, March 6 and 7, 2024
兵頭麻利、川端慶子、堀内真弓、倉島梨花、長本摩耶、田中愛子、實村誉子、前川麻記、齋藤祥乃	産後ケア利用前後の疲労感の変化に及ぼす要因の検討	第62回大阪母性衛生学術集会、大阪、2023.12.9
堀内真弓、倉島梨花、長本摩耶、田中愛子、兵頭麻利、川端慶子、實村誉子、前川麻記、齋藤祥乃	当院における産後ケア利用者のニーズの特性－対象別の比較検討－	第62回大阪母性衛生学術集会、大阪、2023.12.9
Y. Nakada, S. Sakaguchi, M. Horii, Y. Yabuta, H. Yokoyama, T. Nakano	Drug resistance analysis of meropenem and amikacin-resistant Escherichia coli	The 96th Annual Meeting of Japanese Society for Bacteriology, Himeji, Mar. 16-18, 2023, Abstract. P.39 P1-169
野田亨、中田裕二、横山雛子	大和言葉による体表解剖	コ・メディカル形態機能学会 第21回学術集会・総会、山形、2023.9.9（形態・機能 2023；22(1)：37)
安河内英則、中田裕二、山本直宗、山本浩平、三浦典恵、大澤仲昭	毛髪中糖化タンパク濃度簡易測定法の検討	日本分析化学会 第72年会、熊本、2023.9.13-15（講演プログラム集p42）
中田裕二	次世代シーケンサーを用いた薬剤耐性菌の分子疫学解析	2022年度中央研究施設シンポジウム、大阪、2023.3.6（藍野大学紀要 2023；35：39）
西田千夏、松本七十子、黄波戸航、藤村聡子、西尾恵美	子どものエンドオブライフと向き合う看護師を育てるために看護基礎教育、病棟・在宅看護で今できること	日本小児看護学会第33回学術集会・交流集会、神奈川、2023.7.15-16
隍智子、合田友美、西田千夏、倉橋理香、森つばさ	外国人患者家族が持つ価値観や信念を尊重したケアとは～訪日外国人夫婦の事例をもとに考える～	日本家族看護学会第30回学術集会・交流集会、大阪、2023.9.9-10
谷野多見子、前馬理恵、山田和子	母親からみた産後2週間健診のあり方	第34回日本医学看護学教育学会学術学会、和歌山、2024.3.2.
講演：若宮英司 座長：高畑脩平	DCDと学習	第6回DCD学会学術集会、岡山、2023.4.22
岩佐美香、川崎裕美、植田陽子	学校で医療的ケアを担う指導的立場の看護師の活動	第43回日本看護科学学会学術集会、山口、2023.12.9
中井良育（研究代表者）、阿部行宏、丸田秋男他	要支援高齢者の重度化予防に関する研究－「質」が保証されたケアマネジメントモデルの構築に向けて－	令和4年度新潟市医師会地域医療研究助成発表会、新潟、2023.1.28

堀智子、松本七十七子	在宅療養を送る重症心身障害児ときょうだい児を育てる養育者のニーズに関する研究	第36回日本看護福祉学会学術大会、福岡、2023.7.8-9
神野大輔、斎藤佐知子、松浦由美、仙田紀代美、芦田香梨、天野妙子、石田善之、中島淳美、堀智子	訪問看護ステーションと看護小規模多機能型居宅介護の連携で可能になったコロナ禍の看取りの実践	第30回日本ホスピス・在宅ケア研究会全国大会、宮城2023.10.28-29
真鍋由希、太田祐子、安酸史子	アンラーニングを推進する要因と看護師への応用可能性の検討	第43回日本看護科学学会学術集会、山口、2023.12.9-10
大岩美樹、上山千恵子、真鍋由希、芦原百里、森永聡美、安酸史子	看護師国家試験対策におけるアダプティブラーニング（AL）教材の使用の現状と課題	第43回日本看護科学学会学術集会、山口、2023.12.9-10
黄波戸航	入院している子どもに付き添う家族への看護実践に関する国内文献検討	日本家族看護学会第30回学術集会、大阪、2023.9.9-10.
長谷川由香、鬼頭泰子、井上寛、早川りか、黄波戸航	特別支援学校で働く看護師のワーク・エンゲージメントと職場環境の関連	第54回日本看護学会学術集会、大阪、2023.9.29-30
長谷川由香、早川りか、高間さとみ、鬼頭泰子、井上寛子、黄波戸航	特別支援学校における協働をシステムと捉えることで見えてくる新たな課題 -看護師の自由記述から-	第43回日本看護科学学会学術集会、山口、2023.12.9-10
鬼頭泰子、長谷川由香、早川りか、井上寛子、高間さとみ、黄波戸航	特別支援学校で看護師が担う医療的ケアの現状	第43回日本看護科学学会学術集会、山口、2023.12.9-10
Keiko Kumatani, Junko Yamamoto, Naoko Horikawa, Tomomi Kawakami, Keiho Kou	Current Status and Issues of Global Nursing Education Affecting Fundamental Nursing Education in Japanese Nursing Universities.	26th East Asia Forum of Nursing Scholars 2023 (EAFONS2023), The University of Tokyo, Tokyo, JAPAN, 10-11 March 2023.
Tomomi Kawakami, Junko Yamamoto, Naoko Horikawa, Akiko Kawakami, Yuka Hirose	End-of-life Care for Foreign resident older adults at the Nursing home staff in Japan.	International Council of Nurses Congress, Montreal, Canada, 1-5 July 2023.
廣澤有香、堀川尚子、山本純子	多文化を持つ高齢者に関するEOLCを体験した施設職員の意思決定支援の必要性.	第43回日本看護科学学会学術集会、山口、2023.12.9-10
Goto M, Yamashina Y, Kumada H, and Terada S	Intoramuscular hypoxia and muscle hypertrophy induced by resistance exercises with a cold pack	16th Asian Cofederation for Physical Therapy Congress 2023, Grand Richmond Hotel, Nonthaburi, Thailand, 25th-26th November 2023
安藤卓、山科吉弘、岩村真樹、大和洋輔、森田恵美子	ケアハウス入居高齢者の歩行速度の違いが活動強度の日内推移に及ぼす影響	第10回日本地域理学療法学会学術大会、東京、2023.12.16-17
杉山芳生、平山朋子、斎藤有吾	ジグソー法の要素を含んだ医療系多職種連携PBLの実践	第29回大学教育研究フォーラム、web、2023.3.15-16
山科吉弘	内部障害① 座長	北支部新人症例発表会、web、2023.2.26
山科吉弘	シンポジウム 座長	第10回日本介護予防・健康づくり学会、大阪、2023.3.18
山科吉弘	ワークショップ 座長	第10回日本介護予防・健康づくり学会、大阪、2023.3.18
山科吉弘	呼吸理学療法① 座長	第13回 呼吸・循環リハビリテーション研究大会、兵庫、2023.8.19
山科吉弘	traditional research 座長	第9回日本呼吸理学療法学会学術大会、東京、2023.9.3

山科吉弘	地域セッション 座長	第10回日本予防理学療法学会学術大会、北海道、2023.10.28
山科吉弘	水中歩行が高齢者の呼吸筋力に与える影響と持続効果	第88回日本温泉気候物理医学会総会・学術集会、大分、2023.5.14
山科吉弘	12週間の水中歩行プログラムが高齢者の呼吸機能に与える影響	第33回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会、宮城、2023.12.1
Yamashina Y, Aoyama H, Hirayama T, Morita E, Kumabe S, Sakagami N, Nanikawa W, Tabira K	Effect of underwater walking for twelve weeks on respiratory and trunk functions in older adults: Compared with walking on land	ACPT CONGRESS 2023 in Thailand, 2023. Nov 25
高田昌寛、阪上奈巳、熊部翔、青山宏樹、塚越千尋、山科吉弘	キャンパス内における障がい者の働く場所と学生がつながる仕組みの創出	第60回日本リハビリテーション医学会学術集会、福岡、2023.6.29-7.2、一般口演127
Yamada Y	Tumor vessels are stabilized by the basic helix-loop-helix transcription factor LYL1	第82回日本癌学会学術総会、神奈川、2023.9.21-23
阪上奈巳、青山宏樹、信迫悟志	染色体異常などの病児における Calming Responses	第9回日本小児理学療法学会学術大会、新潟、2022.11.12-13
Jeong S, Xue C, Aoyama H, Ogawa K	Measurement of Gait Information in Wheeled Assistive Walker Using RGBD Camera	Conference: 2023 23rd International Conference on Control, Automation and Systems (ICCAS) eosu Venezia Hotel & Utop Marina Hotel, Korea. October 17(Tue)-20(Fri)
Aoyama H, Yonenobu K, Ogawa K, Jeong S	Physiotherapist's Assistance Patterns to the Pelvis During Partial Weight-Bearing Gait: Implications for Robotic Walker Control	The 16th ACPT Congress 2023 Grand Richmond Hotel, Thailand, from 25th to 26th November 2023
岩村真樹、岡本祐輔、大塩祐子、中野明子、重清太郎、山根一志、杉野正一	パーキンソン病患者への集学的アプローチが運動機能に与える効果の検証	第64回日本神経学会学術集会、千葉、2023.5.31-6.3
Sugimoto A, Horii H, Matsushita M	The Clinical Utility Of A Three-Dimensional Motion Analyzer That Can Be Operated Using Two Portable Devices	16th Asian Confederation for Physical Therapy Congress 2023, 25-26 November 2023, Thailand
杉山芳生	初年次学生が有する論証の型に関する試行調査	大学教育学会第45回大会、大阪、2023.6.3-4.
田中貴広、長谷公隆、森公彦、脇田正徳、有馬泰昭、久保峰鳴、田口周	地域在住高齢者の降段動作の表現型は高度なバランス能力と筋力によって決定づけられる	第10回日本予防理学療法学会学術大会、北海道、2023.10.28-29
久保峰鳴、間野直人、桑原嵩幸、倉本仁、Dorjradvan Munkhdelger, 田中貴広、長谷公隆	変形性膝関節症患者における新たな膝関節の機械的負荷指標 —成分別レバーアーム解析手法を用いた歩行解析—	第11回日本運動器理学療法学会学術大会、福岡、2023.10.13-15
阪上奈巳、信迫悟志	出生状況の違いによる 乳幼児のCalming Responses	日本赤ちゃん学会第22回学術集会、栃木、2022.07.1-3
Fukuyama E, Nakanishi Y, Shinohara Y, Murakami H, Tabata I, Iemitsu M	Effect Of Col12a1 Gene Polymorphism On Adolescent Tendon And Ligament Injuries In Female Basketball Players	American College of Sports Medicine Annual Meeting 2023 in Denver, CO 2023/5/30~6/2

福山友見、中西悠衣、篠原靖司、村上晴香、家光素行	日本人バスケットボール選手における青年期の腱・靭帯損傷の発症にCOL5A1遺伝子多型が及ぼす影響	第11回日本運動器理学療法学会学術大会、福岡、2023.10.13-15
尾藤祥子	こどもを支えるユニバーサルな学校づくり	第37回大阪府作業療法学会、大阪、2023.12.10
梶谷竜之介、中岡和代、原田瞬、高畑脩平	粗大運動を通じた介入と家庭でのプログラムの併用により日常生活動作の実用性が改善した一事例	第57回日本作業療法学会、沖縄、2023.11.11
Chiho Ejiri, Zhiwei Luo, Chihiro Tsukagoshi, Toru Nagao, Rumi Tanemura	The Characteristics of the Alpha/Beta Ratio in Patients with Fatigue after Traumatic Brain Injury in Relation to Workload	INS Taiwan Meeting, Taipei, July 7
江尻知穂、羅志偉、塚越千尋、長尾徹、種村留美	頭部外傷者における作業負荷時の易疲労・ストレスの特徴－疲労可視化と易疲労コントロールのための予備的研究－	第57回日本作業療法学会、沖縄、2023.11.11、口述発表(OK-3-5)
真下いずみ	精神科作業療法のリーズニング	湘南OT交流会WEB学会、web、2023.9.15-10.13
小川真寛、藤本一博、真下いずみ	リーズニングを用いて「作業療法の実践の仕組み」を可視化する	第57回日本作業療法学会、沖縄、2023.11.12
Chimi Miyamoto	Application of SI in ASD: Occupational Therapy Perspectives (ASDにおけるSIの応用:作業療法の展望)	2023 The 4th Interdisciplinary Public welfare forum on Autism Spectrum Disorders (Online Conference, Chengdu, 2023.4.20)
宮本陳敏	地域在住高齢者における呼吸機能と握力の関係	第57回日本作業療法学会、沖縄、2023.11.10-12
Chimi Miyamoto	Trends in stroke rehabilitation treatment in Japan (日本の脳卒中リハビリテーション治療の動向)	2023 China Guangdong Stroke Non-acute Rehabilitation Forum( (Online Conference, Shenzhen.2023.12.2)
五十嵐朗、山本裕大、種池緋菜、松下航大、林拓世	生体組織の光学的特性に基づいた非接触血流計測における脈波抽出手法に関する検討	第62回日本生体医工学会、2023.5.18-20、口頭発表、日本生体医工学 2023
林拓世、高良樹生、五十嵐朗	機械学習を用いたスピーチ課題後における自発脳波の経時的変化の評価	第62回日本生体医工学会、愛知、2023.5.18-20、ポスター発表
田浦晶子、大西弘恵、西村幸司、扇田秀章、伊藤壽一、大森孝一	ヒト内耳オルガノイドを用いた前庭再生への試み	第22回日本再生医療学会総会、京都、2023.3.24
田浦晶子、扇田秀章、西村幸司、伊藤壽一	内耳前庭における血管新生と低酸素応答についての検討	第82回日本めまい平衡医学会、新潟、2023.10.26
田浦晶子 (座長)	【ポスターセッション1】P2群検査その他	第82回日本めまい平衡医学会、新潟、2023.10.26
水谷陽一、佐藤孝明、米田公彦、野々村光生、勝岡洋治	総会賞セッション：尿臭をバイオマーカーにマウス行動実験による前立腺癌の鑑別診断	第110回日本泌尿器科学会総会、兵庫、2023.4.20-23
水谷陽一 (座長)	自治体病院の使命と悲鳴 (金子隆昭)	2023年度Kyoto 60 Medical Meeting、京都、2023.8.26
定亮志、郡慎平、石本大揮、山谷莉織、山崎康祥	経皮的脱血カニューレにおける部位別脱血量の基礎的検討	第7回日本低侵襲心臓手術学会学術集会、大阪、2023.7.1

Hiroura, Yasunori Yamasaki, Tetsuro Nakamura, Takeshi Matsumura, Osamu Yoshida	Global Healthcare Disparities Can Be Eliminated-Technology Transfer through Cardiovascular Surgery in Zambia-	5th International Clinical Engineering & Health Technology Management Congress (ICEHTMC), November 10-13, 2023 in Visakhapatnam (aka "Vizag"), India
畑中由佳、佐内佳太、鈴木郁斗、小川充洋、内藤尚、田中志信	近赤外LEDを用いた簡易光学式透析液排液成分モニタの基礎的検討	第68回日本透析医学会学術集会、兵庫、2023.6.18
原地絢斗、山本祐輔、村松歩、長原一、武村紀子、水野（松本）由子、下條真司	AIを用いた生体信号解析～脈波による精神状態の判別～	知の交流シンポジウム2023、兵庫、2023.9.22
田邊晃史、原地絢斗、山本祐輔、村松歩、長原一、武村紀子、水野（松本）由子、下條真司	コヒーレンス解析およびtimelag解析を用いた軽度認知障害患者の脳波の特徴抽出	第53回日本臨床神経生理学会学術大会、福岡、2023.11.30-12.2
荒木陽孝、十川哲、村松歩、山本祐輔、原地絢斗、田邊晃史、長原一、武村紀子、水野（松本）由子、下條真司	機械学習を用いたてんかん異常波直前脳波の判別	第53回日本臨床神経生理学会学術大会、福岡、2023.11.30-12.2
川口侑亮、坂口雄哉、村松歩、山本祐輔、原地絢斗、長原一、武村紀子、水野（松本）由子、下條真司	映像デバイスを用いた運動イメージ時における脳波の定量評価	第53回日本臨床神経生理学会学術大会、福岡、2023.11.30-12.2
十川哲、山本祐輔、原地絢斗、村松歩、長原一、武村紀子、水野（松本）由子、下條真司	軽度認知障害における脳波の機械学習を用いたスクリーニング手法の開発	第53回日本臨床神経生理学会学術大会、福岡、2023.11.30-12.2
原地絢斗、山本祐輔、村松歩、長原一、武村紀子、水野（松本）由子、下條真司	脳波と脈波を用いたTransformerベースの情動判別モデルの開発	第53回日本臨床神経生理学会学術大会、福岡、2023.11.30-12.2
井上竜汰、村松歩、山本祐輔、原地絢斗、長原一、武村紀子、水野（松本）由子、下條真司	ウェーブレット解析を用いた認知症患者と健常者の脳波スケログラムの評価	第53回日本臨床神経生理学会学術大会、福岡、2023.11.30-12.2
野口大輝、山本祐輔、村松歩、原地絢斗、田邊晃史、長原一、武村紀子、水野（松本）由子、下條真司	コヒーレンス解析を用いたうつ状態判別指標の開発	第53回日本臨床神経生理学会学術大会、福岡、2023.11.30-12.2
村松歩、山本祐輔、原地絢斗、田邊晃史、長原一、武村紀子、水野（松本）由子、下條真司	視聴覚情動刺激時における脳波の無向ネットワーク解析を用いた媒介中心性の抽出	第53回日本臨床神経生理学会学術大会、福岡、2023.11.30-12.2
坂口雄哉、川口侑亮、野口大輝、村松歩、山本祐輔、原地絢斗、田邊晃史、平上尚吾、奥谷研、水野（松本）由子	脳波コヒーレンス解析によるヘッドマウントディスプレイを用いた運動観察が直後の運動想起に与える影響の評価	第53回日本臨床神経生理学会学術大会、福岡、2023.11.30-12.2

## 社会貢献(1)講演等

講演者, 担当者, 役職者等の氏名	講演のタイトル, 内容等	講演会・組織等の名称, 開催場所, 日付等
佐々木恵雲	職員教育研修「医療倫理について」	社会医療法人仙養会 北摂総合病院、大阪、2023.2.17
佐々木恵雲	講師団研修「感染症と差別－医療の歴史から学ぶ－」	一般財団法人同和教育振興会、京都、2023.6.7
佐々木恵雲	学術講演会「エンドオブライフケアにおける医療倫理と死生学の重要性－APCを中心に－」	一般社団法人甲賀湖南医師会、滋賀、2023.6.24
佐々木恵雲	職員人権研修会「ハンセン病差別と向き合う～本願寺教団の歩みと課題～」	西本願寺、京都、①2023.9.1、②2023.11.29
西上あゆみ	危機管理 ～災害時の事業継続計画～	公益社団法人滋賀県看護協会、2023.7.20
西上あゆみ	生涯教育「災害時の看護を考える」	公益社団法人滋賀県看護協会、2023.8.31
西上あゆみ	認定看護管理者教育課程 セカンドレベル安全管理の実際「災害看護」	2023年度認定看護管理者教育課程、藍野大学キャリア開発・研究センター、2023.9
西上あゆみ	特別講義「災害看護学」	和歌山県立医科大学保健看護学部、2023.11.29
西上あゆみ	認定看護管理者教育課程 セカンドレベル安全管理の実際「災害看護」	公益社団法人滋賀県看護協会、2023.11.30
西上あゆみ	徳島県災害看護研修会、災害支援ナースフォローアップ研修会：災害時に向けた看護師の備えと支援のあり方	公益社団法人徳島県看護協会、2023.12.18
西上あゆみ	災害支援ナース育成研修	公益社団法人滋賀県看護協会、2023.12.19
西田千夏	2022年度お父さんに役立つ育児セミナー第6回「子どもが病気・けがのときのお世話」	お父さんの育児を応援する会、大阪市北区子ども子育てプラザ、2023.2.26
中野玲子	認定看護管理者教育課程セカンドレベル「統合演習」講師	藍野大学キャリア開発・研究センター、2023.7-9
中野玲子	認定看護管理者教育課程ファーストレベル「組織管理論Ⅰ」「統合演習」講師	藍野大学キャリア開発・研究センター、2023.11
林 周子	認定看護管理者教育課程ファーストレベル「組織管理論Ⅰ」「コミュニケーション・ファシリテーション」	藍野大学キャリア開発・研究センター、2023.11.2
山田和子	地域母子保健学	山口県立大学別科助産学専攻、2023.11.21
植田陽子、岩佐美香、菅井裕行、宇野理沙、小篠史郎、	個別の教育支援計画	Nurse Fight ; Nurse@Scool研究会、Web、2022.3.25
植田陽子、岩佐美香、菅井裕行、宇野理沙、小篠史郎、	養護教諭の養成課程	Nurse Fight ; Nurse@Scool研究会、Web、2022.7.22
植田陽子、岩佐美香、菅井裕行、宇野理沙、小篠史郎、	医療的ケア児が使っている福祉サービスについて知ろう！	Nurse Fight ; Nurse@Scool研究会、Web、2022.12.23
植田陽子、岩佐美香、菅井裕行、宇野理沙、小篠史郎、	子どもたちが自分らしい生き方を見つけるために学校で学んでいる事って何だろう？	Nurse Fight ; Nurse@Scool研究会、Web、2022.12.24

研究業績と社会貢献

中井良育（座長）	レビー小体型認知症サポートネットワーク大阪シンポジウム「福祉サービス事業者を選ぶとき。あなたならどうする？」	レビー小体型認知症サポートネットワーク大阪、藍野大学・茨木市、2023.10
堀智子	令和5年度医療福祉の地域創造会議総会・研修会 コミュニティコーピングファシリテーター	令和5年度医療福祉の地域創造会議総会・研修会、滋賀、2023.8.26
堀智子	第33回東大阪プロジェクト 縁起でもない話をしよう会「いま巷で話題のコミュニティコーピングってなんやねん」 コミュニティコーピングのゲーミフィケーションについて	第33回東大阪プロジェクト 縁起でもない話をしよう会@東大阪、オンライン、2023.12.21
堀智子	コミュニティコーピングオンライン体験会主任ファシリテーター	コミュニティコーピングオンライン体験会、2023.12.30
真鍋由希	認定看護管理者教育課程セカンドレベル「人材を育てるマネジメント」	藍野大学キャリア開発・研究センター、2023.9.7
真鍋由希	認定看護管理者教育課程ファーストレベル「人材育成の基礎知識」	藍野大学キャリア開発・研究センター、2023.11.24
安藤卓	職員研修会 講師（口腔機能について）	珠寿会 輝きのまちケアハウス池田、2023.2
岩村真樹、安藤卓、森田恵美子、山科吉弘、大和洋輔、何川渉、菊池唯、熊部翔	R4年度藍野大学×茨木市連携講座。「はつらつといきるための健康測定講座」	茨木市立生涯学習センター、2023.2.25、3.4
山科吉弘、安藤卓、梶本浩之、熊部翔	いばらぎ×立命館DAY2023出展。体力測定会	いばらぎ×立命館DAY2023、2023.5.21
山科吉弘、安藤卓、岩村真樹、森田恵美子、何川渉、大和洋輔、菊池唯、熊部翔、梶本浩之	藍野大学×茨木市南保健福祉センター測定会および講義	茨木市南保健福祉センター、2023.8-10
岩村真樹、安藤卓、森田恵美子、山科吉弘、大和洋輔、何川渉、菊池唯、熊部翔	R5年度藍野大学×茨木市連携講座。「はつらつといきるための健康測定講座」	茨木市立生涯学習センター、2023.9.14、9.21
山科吉弘、安藤卓。	茨木市健康フェア2023に出展。測定会実施	大阪府茨木市、2023.10.21
平山朋子	医療の連携とリハビリテーション	交野女子学院、2023.12.14
山科吉弘	スタッフへの運動方法指導	社会福祉法人珠寿会ケアハウス池田（月1回）、2023
山科吉弘、岩村真樹。	ミルシルフェスタ（茨木市）出展。体力測定会	茨木市青年会議所、2023.4.22
山科吉弘	ストレッチ体操	茨木市太田地区敬老会、2023.9
千住秀明、山科吉弘。	甲賀市在宅医療と介護の市民講演会にて肺機能測定会実施	滋賀県甲賀市、2023.10.10
杉山芳生	藍野大学の教学IRについて	藍野大学・びわこリハビリテーション専門職大学共催教学IRセミナー、Web、2023.9.21
田中貴広	運動器理学療法法のネクストジェネレーション最新研究	第11回日本運動器理学療法学会学術大会、福岡、2023.10.13-15

田中貴広	運動器理学療法の現状、課題、そして展望	第11回日本運動器理学療法学会学術大会、福岡、2023.10.13-15
社会貢献委員会・市民公開部会	藍野大学市民公開講座	①2023.6.24、②2023.9.30
宮本年也	臨床実習施設における臨床実習プログラムの立案	臨床実習指導者講習会・全国リハビリテーション学校協会、Web開催、2023.3.4-5
宮本年也	臨床実習における学生評価	臨床実習指導者講習会・大阪府作業療法士会、Web開催、2023.9.2-3
尾藤祥子	リーディングチーム研修	茨木市教育委員会 学校教育部 学校教育推進課、茨木市市民総合センター（クリエイトセンター）、2023.5.25
尾藤祥子	通常学級における支援と合理的配慮	平田中学校教職員研修、茨木市立平田中学校、2023.7.20
尾藤祥子	学校のできる子どもたちへの合理的配慮	彩都西小学校 教職員研修、茨木市立彩都西小学校、2023.7.26
尾藤祥子	基礎的環境整備と合理的配慮	白川小学校教職員研修、茨木市立白川小学校、2023.7.27
尾藤祥子	姿勢と学力との関係	中条小学校教職員研修、茨木市立中条小学校、2023.8.24
尾藤祥子	未熟児教室（らっこ教室）研修：赤ちゃんから幼児期の発達と遊びへの関わり方	高槻市子ども未来部子ども保健課、高槻市子ども保健センター、2023.9.4
尾藤祥子	子どもの特性とサポート方法	いわで・きのかわファミリーサポートセンター「そらまめサポート」、紀の川市貴志川支所、2023.10.12
尾藤祥子	子どもの特性とサポート方法	御坊市ファミリーサポートセンター「そらまめサポート」、御坊市財部会館、2023.10.12
尾藤祥子	茨木市子育て支援者研修「遊びながら体と手先をきたえよう」	茨木市立子育て支援総合センター、zoom開催、2023.10.18
尾藤祥子	合理的配慮とユニバーサルデザインについて知っておきたいこと	茨木市教育委員会、茨木小学校、2023.11.15
尾藤祥子	リーディングチーム研修	茨木市教育委員会 学校教育部 学校教育推進課、茨木市市民総合センター（クリエイトセンター）、2023.11.16
尾藤祥子	不登校児に向けた支援	藍野大学短期大学部あいの発達支援リハビリ訪問看護ステーション、2023.11.29
白井雅子	2023年度第2回現職者共通研修「実践のための作業療法研究」講師	大阪府作業療法士会、オンライン研修、2023.9.3
白井雅子	高槻市地域ケア会議OT助言者	高槻市、三箇牧地域包括支援センター、2023.9.20
白井雅子	滋賀県立八幡高等学校，高大連携，模擬授業	滋賀県立八幡高等学校、①2023.10.16、②10.23
高畑脩平	子どもの行動理解とサポート -作業療法・感覚統合の視点から-	京都市営保育所プロジェクト主催研修会、京都市、2023.1.19
高畑脩平	読み書き障害の理解と支援	奈良県難聴言語発達障害研究会主催 講演会、奈良市、2023.1.20
高畑脩平	子どもの行動理解と支援	福島区役所，大阪市。2023.1.21

高畑脩平	学習の土台になる感覚・運動・身体	久御山町役場主催講演会、京都府久御山町、2023.1.25
高畑脩平	読み書き障害の理解と支援	静岡県作業療法士会、web、2023.1.29
高畑脩平	子どもの行動理解とサポート -作業療法・感覚統合の視点から-	天理市保育士会主催講演会、奈良県天理市、2023.2.15
高畑脩平	読み書き障害の理解と支援	東京都作業療法士会、web、2023.2.23
高畑脩平	感覚過敏・鈍麻の理解と支援	広島県三次市役所主催講演会、web、2023.2.28
高畑脩平	姿勢・運動の問題に対する理解と支援	広島県三次市役所主催講演会、web、2023.3.6
高畑脩平	子どもの行動理解とサポート -作業療法・感覚統合の視点から-	久御山町役場主催 保育者向け講演会、京都府久御山町、2023.3.8
高畑脩平	子どもの行動理解とサポート -作業療法・感覚統合の視点から-	茨木市主催 幼稚園教諭向け講演会、茨木市、2023.4.21
高畑脩平	書字障害の理解と支援	NPO法人はびりす主催 講演会、web、2023.5.6
高畑脩平	子どもの行動理解とサポート 作業療法の視点から-	生駒市保育士会主催講演会、奈良県生駒市、2023.5.26
高畑脩平	読み書き障害の理解と支援	近畿作業療法学会 教育講演、web、2023.6.4
高畑脩平	保育・教育に活かす感覚統合の視点	京都国際社会福祉センター、京都市、①2023.6.13、②6.20
高畑脩平	子どもの行動理解と支援	奈良市公開保育、奈良市、2023.6.28
高畑脩平	感覚過敏・鈍麻に合わせた遊びと環境設定	京都市南区プロジェクト主催講演会、京都市、2023.7.19
高畑脩平	子どもの行動理解とサポート -作業療法・感覚統合の視点から-	茨木支援学校 教員向け研修会、茨木市、2023.7.21
高畑脩平	子どもの行動理解とサポート 作業療法の視点から-	全国民間保育連盟主催研修会、奈良県王寺町 & web、2023.8.21
高畑脩平	子どもの行動理解とサポート 作業療法の視点から-	全国体育部会主催 講演会、大阪市、2023.8.23
高畑脩平	子どもの行動理解とサポート 作業療法の視点から-	香芝市特別支援教育研究会主催 講演会、奈良県香芝市、2023.8.21
高畑脩平	感覚過敏・鈍麻に合わせた遊びと環境設定	京都市中京・右京区プロジェクト主催講演会、京都市、2023.8.31
高畑脩平	子どもの行動理解とサポート 作業療法の視点から-	京都市伏見・山科・醍醐地区保育の質を高める研究会主催 講演会、京都市、2023.9.6
高畑脩平	子どもの行動理解とサポート 作業療法の視点から-	奈良市役所主催 保育者向け講演会、奈良市、2023.9.14
高畑脩平	子どもの行動理解とサポート 作業療法の視点から-	阿倍野区障がい児部会主催講演会、大阪市、2023.10.11
高畑脩平	子どもの行動理解とサポート 作業療法の視点から-	京都市幼保総合支援室主催 講演会、京都市、2023.11.1

高畑脩平	感覚統合療法 実践研修会	京都国際社会福祉センター、京都市、2023.11.3-4
高畑脩平	読み書き障害の理解と支援	群馬県作業療法士会、web、2023.11.15
高畑脩平	子どもの行動理解とサポート 作業療法の視点から-	京都市保育士会主催 講演会、京都市、2023.11.22
高畑脩平	子どもの行動理解とサポート 作業療法の視点から-	茨木市あけぼの学園主催 講演会、茨木市、2023.11.29
高畑脩平	子どもの行動理解とサポート 作業療法の視点から-	茨木市公開保育研究会、茨木市、2023.12.18
白井雅子, 津田勇人, 塚越千尋	茨木市介護予防事業 太田地区「元気はつらつ体操」教室	太田地区福祉委員会、①2023.8.7、②9.21、③10.19、④11.16
尾藤祥子, 塚越千尋	福祉体験授業	茨木市立太田中学校、2023.6.9
尾藤祥子, 塚越千尋	福祉体験授業	茨木市立西陵中学校、①2023.11.17、②11.24
真下いづみ	教育ツールとしての MTDLP活用の実践例紹介 ～学内教育編～ 教員と実習指導者のためのMTDLP教育法②	一般社団法人 日本作業療法士協会、Web、2023.02.05
真下いづみ	働くうえでのストレスマネジメント	はびねす在职者交流会、障害者就業・生活支援センター はびねす、2023.2.18
真下いづみ	教育ツールとしての MTDLP活用の実践例紹介 ～学内教育編～ 教員と実習指導者のためのMTDLP教育法①	一般社団法人 日本作業療法士協会、Web、2023.11.19
真下いづみ	柔らかい頭になろう！認知リハビリテーション	京都府若者等就職・定着総合応援事業、障害者就業・生活支援センター はびねす、2023.11.30
真下いづみ	発達のかたよりによる生きづらさがある人に作業療法ができること	一般社団法人 日本作業療法士協会、Web、2023.12.09
真下いづみ	高大連携授業 SST	大阪府立汎愛高等学校、藍野大学、2023.12.19
宮本陳敏	外国籍の生徒のご家庭に適切に対応していくためには	大阪府立西淀川支援学校、2023.8.30
宮本陳敏	母国の働く文化と日本の働く文化の違い	OFIX外国人材を受け入れ企業向けの研修、マイドームおおさか、2023.9.7
五十嵐朗	生体計測の基礎	第83回次世代センサセミナーシリーズ 生体計測とウェアラブルセンサの最新技術動向、オンライン、2023.9.22
発明者（所属）：佐藤孝明（産総研）水谷陽一（藍野大学）、尾添淳文、松永光平、小林健太郎、高橋康彦（住友化学）	METHOD OF EXAMINING THE POSSIBILITY OF SUFFERING FROM PROSTATE CANCER	特許出願人：住友化学株式会社、学校法人藍野大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所 出願番号202180089607.X 出願日：2023.7.6
発明者（所属）：佐藤孝明（産総研）水谷陽一（藍野大学）、尾添淳文、松永光平、小林健太郎、高橋康彦（住友化学）	前立腺がんの罹患の可能性を検査する方法	特許出願人：住友化学株式会社、学校法人藍野大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所 出願番号：PCT/JP2021/048082 出願日：2023.7.7

発明者（所属）：佐藤孝明（産総研）水谷陽一（藍野大学）、尾添淳文、松永光平、小林健太郎、高橋康彦（住友化学）	METHOD OF EXAMINING THE POSSIBILITY OF SUFFERING FROM PROSTATE CANCER	特許出願人：住友化学株式会社、学校法人藍野大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所 出願番号18/260701 出願日：2023.7.10
発明者（所属）：佐藤孝明（産総研）水谷陽一（藍野大学）、尾添淳文、松永光平、小林健太郎、高橋康彦（住友化学）	METHOD OF EXAMINING THE POSSIBILITY OF SUFFERING FROM PROSTATE CANCER	特許出願人：住友化学株式会社、学校法人藍野大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所 出願番号21917707.8 出願日：2023.7.14
宮崎浩	主催者側責任者として、会場に人工臓器等についての展示ブースを設けることを決め、本学臨床工学科からホール内外に3ブース出して来場者への展示解説を実施した。	第8回「豊かで健康な人生のために」大阪市城東区医師会 市民公開講座 & 大阪府医師会フィルハーモニー ウィンターコンサート、大阪市立城東区民センター、2023.12.16
畑中由佳	2022年度生涯教育セミナー「臨床現場で働く臨床工学技士×学位（修士）」Webセミナー、運営	大阪府臨床工学技士会、Web、2023.1.21
畑中由佳	第4回いきいき子育てサロン	茨木市社会福祉協議会・太田地区福祉委員・藍野大学共催、藍野大学A棟001教室、2023.3.2
畑中由佳	2023年度基礎教育セミナー これから臨床工学技士として働くための心構、Webセミナー	大阪府臨床工学技士会、Web、2023.4.22
畑中由佳	生命維持装置学（清潔操作、腹腔鏡操作体験）	明浄学院高等学校高大連携授業、藍野大学D棟D104教室、2023.6.7
畑中由佳	第5回職業体験セミナー 臨床工学技士体験	大阪府臨床工学技士会、イオンモール大日、2023.8.6
畑中由佳	2023年度学術教育セミナー 臨床工学技士認定制度について、Webセミナー、運営	大阪府臨床工学技士会、Web、2023.9.9
畑中由佳	「大阪市城東区医師会市民公開講座&大阪府医師会フィルハーモニー・ウィンターコンサート」における医療機器展示および来場者説明	大阪コミュニティ協会城東区支部協議会 大阪市城東区医師会 大阪府医師会フィルハーモニー、大阪私立城東区民センター（城東スギタレストホール）、2023.12.16

## 社会貢献(2)役員, 委員等

役職者等の氏名	役職・従事職務等	組織等の母体または名称, 日付等
佐々木恵雲	顧問	内分泌糖尿病心理行動研究会
佐々木恵雲	顧問	西本願寺 医師の会
佐々木恵雲	顧問	<身>の医療研究会
佐々木恵雲	評議員	日本自律神経学会
佐々木恵雲	客員研究員	一般財団法人同和教育振興会
佐々木恵雲	評議員	一般財団法人本願寺ピハ-ラ医療福祉会
栗原秀剛	外部コンサルタント	JT医薬総合研究所
栗原秀剛	評議員	日本臨床分子形態学会
後藤昌弘	保健医療学学会	副理事長
西上あゆみ	先遣隊	日本災害看護学会、2013～継続
西上あゆみ	学会誌査読委員	日本災害看護学会、2009～継続
西上あゆみ	推薦理事	日本災害看護学会、2023～継続
西上あゆみ	実行委員、査読委員、会計監事	日本災害看護学会第25回年次大会
西上あゆみ	和文誌専任査読委員	日本看護科学学会、2021.10.1～継続
西上あゆみ	評議員	日本災害医学会、2018.1.1～継続
西上あゆみ	査読委員	日本災害医学会第28回年次大会、2022.11
西上あゆみ	学会誌査読委員	日本リウマチ看護学会、2021.9～継続
西上あゆみ	査読委員	日本リウマチ看護学会第4回学術集会、2023.6
西上あゆみ	災害連携委員	日本看護系大学協議会、2021.6～継続
西上あゆみ	災害支援対策委員	日本看護系大学協議会、2022.7～継続
西上あゆみ	災害支援ナース	公益社団法人大阪府看護協会、継続

西上あゆみ	防災・災害看護委員会	公益社団法人大阪府看護協会、2023～継続
本多容子	副代表	レビー小体外認知症サポートネットワーク大阪支部
本多容子	委員	大阪府地域福祉推進審議会
本多容子	会長	大阪府地域福祉推進審議会 福祉基金運営分科会
本多容子	会長	茨木市総合保健福祉審議会 高齢者施策推進分科会
本多容子	委員	茨木市地域包括支援センター協議会
本多容子	会長	茨木市社会福祉法人設立認可及び施設整備審査委員会
本多容子	委員	茨木市介護保険苦情調整委員会委員
本多容子	委員	大阪府看護協会「看護基礎教育を考える会」
本多容子	副会長校	大阪府看護系大学協議会
齋藤祥乃	査読委員	滋賀母性衛生学会誌、2011～継続
西田千夏	日本子ども学会学会誌 査読委員	日本子ども学会、2023.3～
西田千夏	第7回スペシャルキッズサポーターの集い 実行委員	スペシャルキッズサポート振興協会、2023.3
西田千夏	日本家族看護学会第30回学術集会 実行委員	日本家族看護学会、2023.9
西田千夏	文部科学省事業「大学・専門学校等における生涯学習機会創出・運営体制のモデル構築」 (小児期に発症した医療的ケアを必要とする重度重複障がい者や小児がん経験者であるAYA世代の生涯学習-「生きる体験」を目指し-) 運営委員	代表大学：大阪教育大学、2023.4～
林周子	日本災害看護学会第25回年次大会 実行委員	一般社団法人日本災害看護学会 2023年9月2日・3日
山田和子	大阪府社会福祉審議会児童福祉専門分科会里親審査部会委員	大阪府、2023.9～
岩佐美香	事務局・世話人	Nurse Fight ; Nurse@Scool研究会
和田恵美子	京都市中京区在宅医療・介護連携支援センター 運営会議オブザーバー	一般社団法人中京区在宅医療センター 2023年5月24日、8月23日、2024年2月21日
和田恵美子	高槻市介護認定審査委員	高槻市 2023年4月1日～2024年3月31日 年間約20回、月曜日
中井良育	ファシリテーター	レビー小体型認知症サポートネットワーク大阪、2023.4～

堀智子	みとりまちdays実行委員	尼崎「みとりまちプロジェクト」
堀智子	NPO法人安住荘理事	NPO法人安住荘2020.11.25～
堀智子	ORGANIZING COMMITTEE	DEMENTIA WEBINAR 2022 Organizing Committee
松本晃子	日本看護系大学協議会 災害ネットワーク活動 関西・近畿ブロック	日本看護系大学協議会
黄波戸航	学術集会 実行委員	日本家族看護学会第30回学術集会、大阪、2023.9.9-10
宮岡裕香	日本災害看護学会第25回年次大会 実行委員	一般社団法人日本災害看護学会、2023.9.2-3
安藤卓	機関誌「地域理学療法学雑誌」 査読者	日本理学療法学会連合 日本地域理学療法学会
安藤卓	第10回日本地域理学療法学術大会 演題 査読者	日本理学療法学会連合 日本地域理学療法学会
安藤卓、何川渉、大和洋輔、菊池唯、熊部翔	第1108回臨床実習指導者講習会運営	公益財団法人日本理学療法士協会、藍野大学、2023.9.9-10
平山朋子	理事	保健医療学学会
平山朋子	障がい支援区分市町村審査会委員	豊中市
平山朋子	講師	交野女子学院
平山朋子	代議員	日本医学教育学会
平山朋子	大阪地区理学療法士委員	理学療法士・作業療法士・言語聴覚士 養成施設 教員等講習会
平山朋子	機関誌編集委員	日本理学療法教育学会 機関誌編集委員会
山科吉弘	第35回大阪府理学療法学術大会 査読者	大阪府理学療法士協会
山科吉弘	日本呼吸・循環器合同理学療法学会学術大会2023 査読者	日本理学療法士協会
山科吉弘	北支部新人症例発表会査読者	大阪府理学療法士協会
山科吉弘	第63回近畿理学療法学術大会 査読者	大阪府理学療法士協会
山科吉弘	第11回日本筋骨格系徒手理学療法学会研究会学術大会 査読者	日本筋骨格系徒手理学療法学会研究会
山科吉弘	日本呼吸理学療法学会 評議員	日本呼吸理学療法学会
山科吉弘	日本呼吸理学療法学会機関誌編集委員会 事務局長	日本呼吸理学療法学会
山科吉弘	呼吸理学療法学 論文査読委員	日本呼吸理学療法学会

山科吉弘	社会福祉法人珠寿会 評議員	社会福祉法人珠寿会
山科吉弘	The Journal BIOPHILIA Reviewer	International Biophilia Rehabilitation Academy
山科吉弘	事業化研究委員会委員（経済産業省事業再構築補助事業「創動運動実施技術を利用した医療器具の開発及び商品化」）	バイオフィリア研究所有限会社
熊田仁	大阪府理学療法士会 茨木市理学療法士会 監事	公社）大阪府理学療法士会、2018.10～
熊田仁	第11回日本理学療法教育学会学術大会 投稿演題 査読委員	一般社団）日本理学療法学会連合 日本理学療法教育学会
熊田仁	第34回大阪府理学療法学術大会 査読委員	公社）大阪府理学療法士会
熊田仁	日本理学療法教育学会 機関誌「理学療法教育」 査読委員	一般社団）日本理学療法学会連合 日本理学療法教育学会
杉本明文	理事	大阪府理学療法士会
杉本明文	委員	大阪府理学療法士会 組織率向上・人材育成特別委員会
杉本明文	委員	大阪府理学療法士会 万博事業準備特別委員会
田中貴広	第11回日本運動器理学療法学会学術大会 準備委員長	日本運動器理学療法学会
田中貴広	第13回日本運動器理学療法学会学術大会 副大会長	日本運動器理学療法学会
田中貴広	第11回日本筋骨格系理学療法研究会学術大会 副準備委員長	第11回日本筋骨格系理学療法研究会
田中貴広	機関誌調整委員	運動器理学療法学
田中貴広	運動器分野 作問委員	認定理学療法士 試験問題作成部会
大和洋輔	大阪府理学療法士会 広報部・副部長	大阪府理学療法士会
大和洋輔	第11回日本運動器理学療法学会学術大会 準備委員（総務）	第11回日本運動器理学療法学会学術大会
熊部翔	準備委員	第11回 日本筋骨格系徒手理学療法研究会 学術大会、2023.5.12-2024.5.12
新保健次	会長	近畿SCD・MSA友の会
新保健次	共同代表	全国SCD・MSA患者連絡協議会
高田昌寛	一般社団法人大阪府理学療法士会生涯学習センター 大阪府理学療法学術大会における応募演題の査読	一般社団法人大阪府理学療法士会生涯学習センター、2023.11.14-2025年度定時総会の終結の時まで（※任期満了後であっても、新たに選任された者が就任するまで任期伸長）

津田勇人	第50回（令和5年度）理学療法士・作業療法士・言語聴覚士 養成施設教員等講習会 大阪地区、大阪地区運営委員	【共催】厚生労働省 医療研修推進財団【主管】日本リハビリテーション医学会【運営】日本理学療法士協会・日本作業療法士協会・日本言語聴覚士協会【協力】全国リハビリテーション学校協会【会場】リモート、2023.8.14-9.2
津田勇人	日本作業療法士協会 教育部 委員	一般社団法人日本作業療法士協会
津田勇人	第57回日本作業療法学会演題査読委員	一般社団法人日本作業療法士協会
宮本年也	大阪府作業療法士会学術局教育部老年期領域チーム 代表	大阪府作業療法士会
宮本年也	第37回大阪府作業療法学会 査読者	大阪府作業療法士会
尾藤祥子	特別教育相談員	茨木市教育センター
尾藤祥子	合理的配慮協力員	茨木市教育委員会学校教育推進課 茨木市教育委員会学校教育推進課
尾藤祥子	福祉医療人材活用事業 特別非常勤講師（医療福祉）	大阪府教育委員会
尾藤祥子	母子保健事業 高槻市長期療養児訪問リハビリ事業 派遣作業療法士（アドバイザー）	高槻市子ども未来部
尾藤祥子	難病訪問リハビリテーション 専門相談員	高槻市保健所 健康福祉部保健予防課
尾藤祥子	専門職相談会 専門相談員	寝屋川市子ども子育て支援課
尾藤祥子	特別支援教育チーム	大阪府作業療法士会地域局・地域推進部
尾藤祥子	子育て支援団体連絡会C地区担当者	茨木市子ども支援センター
白井雅子	大阪府作業療法士会学術局教育部新人教育チーム部員	一般社団法人 大阪府作業療法士会
高畑脩平	日本作業療法士協会 制度対策部	日本作業療法士協会、2022.4～現在
高畑脩平	日本臨床作業療法研究 査読委員	日本臨床作業療法学会、2020.4～現在
高畑脩平	作業療法ジャーナル 査読者	三輪書店、2021.12～現在
高畑脩平	奈良県作業療法士会 研究助成委員会 委員長	奈良県作業療法士会、2020.4～現在
塚越千尋	大阪府作業療法士会学術局 機関誌編集部門	一般社団法人 大阪府作業療法士会
塚越千尋	障害支援区分認定審査委員	茨木市
塚越千尋	第37回大阪府作業療法学会 査読者	大阪府作業療法士会、2023.9.12-10.15
真下いづみ	学術誌「作業療法」査読者	日本作業療法士協会

真下いずみ	学術部 部員	日本作業療法士協会
真下いずみ	教育部 精神領域チーム 部員	大阪府作業療法士会
真下いずみ	ひきこもり支援OTチーム部員	京都府作業療法士会
真下いずみ	大阪市障害支援区分認定審査委員	大阪市
真下いずみ	茨木市障害支援区分認定審査委員	茨木市
宮本陳敏	理事	中国リハビリテーションセラピスト協会、2019.8
宮本陳敏	研究員	神戸大学大学院、2023.4
五十嵐朗	学会抄録査読者	45th Annual Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society, 2023.7.24-27
五十嵐朗	査読者	Physiological Measurement
五十嵐朗	学科代表者	一般社団法人 日本臨床工学技士教育施設協議会
五十嵐朗	養成施設代表者	Clinical Engineering
田浦晶子	学術委員会 委員長	日本耳鼻咽喉科学会京都府地方部会、2015.4.1-
田浦晶子	めまい相談医制度運営委員会 担当理事	日本めまい平衡医学会、2023.10.28-
田浦晶子	日本めまい平衡医学会査読委員	日本めまい平衡医学会、2017.12.17-
田浦晶子	日耳鼻会報査読委員	日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会、2022.8.22-
田浦晶子	京都大学医学部耳鼻咽喉科頭頸部外科学教室同窓会幹事	京都大学医学部耳鼻咽喉科頭頸部外科学教室同窓会、2021-
田浦晶子	一般社団法人日本めまい平衡医学会理事	日本めまい平衡医学会、2023.10.28-
田浦晶子	めまい平衡医学会 専門会員資格審査委員会(医師講習会) 担当理事	日本めまい平衡医学会、2023.10.28-
田浦晶子	めまい平衡医学会 学会のあり方委員会 担当理事	日本めまい平衡医学会、2023.10.28-
水谷陽一	学術評議員	腎癌研究会
水谷陽一	クラス委員	京都大学医学部同窓会芝蘭会
水谷陽一	技術専門員	京都府立医科大学臨床研究審査委員会
水谷陽一	査読者	International Journal of Cance

研究業績と社会貢献

水谷陽一	査読者	Scientific Reports
水谷陽一	査読者	Cancer Science
水谷陽一	査読者	Urology
畑中由佳	学術委員	一般社団法人大阪府臨床工学技士会、2012～現在に至る
畑中由佳	代議員	一般社団法人大阪府臨床工学技士会、2018～現在に至る
畑中由佳	幹事	一般社団法人電解水透析研究会、2020～現在に至る
山本祐輔	査読者	Advanced Biomedical Engineering

## 専門的学術講演(企業, 研究施設, 病院, 班会議等)

著者, 共著者	タイトル	学術集会名・会議名, 場所, 日程
中田裕二, 横山雛子, 板垣博之, 福留むつみ, 水野友美子	医療施設内および検体検査分離薬剤耐性菌の解析	藍野大学・藍野病院共同研究、2023
山田和子	母子保健の役割と保健機関との連携	堺市要保護児童対策調整機関の調整担当者研修、2023.8.7
山田和子	母子保健関係業務報告から見えてくるもの	大阪府富田林保健所健やか親子21研修会、2023.11.6
山田和子	地域保健活動と保健師の計画及び評価について	和歌山県田辺保健所管内研修会、2023.12.25
真鍋由希	院内ラダー研修「組織変革理論」	八尾市立病院、2023.8.29
真鍋由希	院内ラダー研修「ナッジ理論」	八尾市立病院、2023.9.15
山科吉弘	吸引の基本と実際－人工呼吸器を用いて－実習② 人工呼吸管理と気管内吸引（開放式）の実際 講師	奈良県理学療法士協会、2023.2
山科吉弘	ワークショップ講師：姿勢と呼吸機能	第10回日本介護予防・健康づくり学会 大阪、2023.3.19
山科吉弘	呼吸療法認定士試験対策	大阪社会医療センター附属病院、やすだ医院、2023.4-12
熊田 仁	第1108回 臨床実習指導者講習会 講義5「臨床実習における学生評価」講師	藍野大学主催：臨床実習指導者講習会、2023.9.9-10、Web開催
前田智香子	厚生労働省指定第1108回臨床実習指導者講習会 講師・世話人(予備)	厚生労働省指定第1108回臨床実習指導者講習会、藍野大学、2023.9.9-10
前田智香子	厚生労働省指定第1108回臨床実習指導者講習会 運営補佐	厚生労働省指定第1108回臨床実習指導者講習会、藍野大学、2023.9.9-10
梶本浩之	厚生労働省指定第1108回臨床実習指導者講習会 講師・世話人	厚生労働省指定第1108回臨床実習指導者講習会、藍野大学、2023.9.9-10
田中貴広	はじめての臨床研究	院内研修会、かわむらクリニック、2023.4.9
田中貴広	臨床研究法	院内研修会、堺若葉会病院、2023.11.21
新保健次	特別講義	大阪電気通信大学医療健康科学部理学療法学科、2023.4.19
高田昌寛	自身の環境で最大限に職能を発揮するために必要なこと	部門会、博愛記念病院、2023.10.13
尾藤祥子	教員と実習指導者のためのMTDLP教育法①「教育ツールとしてのMTDLP活用の実践例紹介 ③卒前～卒後教育の連携」	日本作業療法士協会重点課題研修 MTDLP委員会、zoom開催、2023.2.5
尾藤祥子	教員と実習指導者のためのMTDLP教育法①「教育ツールとしてのMTDLP活用の実践例紹介 ③卒前～卒後教育の連携」□	日本作業療法士協会重点課題研修 MTDLP委員会、zoom開催、2023.11.19
高畑脩平	学習の土台になる感覚・運動・身体	(株) LITALICO スタッフ向け講習会、web、2023.2.26

高畑脩平	感覚統合遊びの実践	(株) CODOMOカレッジ、web、2023.11.9
宮崎 浩	新規投与デバイスの基礎研究 —細胞への物質導入に関する検討—	ダイセル—エンジニアリング・サイエンス共同研究講座報告会、大阪大学、2023.3.27

## 新聞、雑誌、放送等

該当者	見出し・題名	媒体、期日
松本晃子、西上あゆみ、本多容子、中野玲子、長井雅代、真鍋由希、米澤知恵、三宅光代、宮岡裕香	4年生の入職前の不安を払拭! 卒業前フォローアップ研修(前編)	看護人材育成; 20(4): 44-48
松本 晃子, 西上 あゆみ, 本多容子, 林 周子, 斎野 貴史, 前川 麻記, 松本 七十子, 黄波戸 航, 藤井 沙葵	5年生の入職前の不安を払拭! 卒業前フォローアップ研修(後編)	看護人材育成; 20(5): 56-61
高畑脩平	Eテレ「でこぼこポン！」	NHK、火曜日（隔週放送）
高畑脩平	よく転ぶ、よくぶつける・・・これってボディイメージがあいまいなのかも!?	保育雑誌 POT 特集記事
五十嵐 朗	アナログとデジタルの併用で成績向上 藍野大学 専門基礎科目「電子工学 I」	教育学術新聞、2023.3.1
畑中由佳	JaSECT Award 2023 優秀論文賞 受賞	第48回日本体外循環技術医学会大会（仙台）において表彰、2023.10.20

## 民間企業助成制度採択

該当者	内容	期間
新保健次	【助成事業活動名】田辺三菱製薬手のひらパートナープログラム 【団体名】近畿 SCD（脊髄小脳変性症）・MSA（多系統萎縮症）友の会 【事業名】「難病患者のためのリハビリテーションについてのアンケート調査」	2023.4.1-2024.3.31



## 悠々として急げ 編集後記にかえて

上記は古代ローマの帝政の創始者たるアウグストゥスの座右の銘である。急に寒さが増してきた今年の11月、61歳で肺がんが見つかり1年半の闘病をへて天国へと旅立った父の形見のジャケットを田舎の家に帰省した時持ち出してきた。学生諸君には不評であるが古いのは仕方がない。自分も父の肺がんの年になり、遺伝子の構成は半分が父からのものであるから、我が人生もあと一年余の覚悟をもって生きよ・・・との意味で父のジャケットを着る。父の生きることのできなかつた日々もあわよくば共に生きたいとも思う。が、時間が残り少ない！とにかく急いで生きよ！

軍事でも内政でも天才であり、天才であったゆえに改革を急ぎすぎ、多くの共和制を支持する若者たちに暗殺された義理の父ユリウス・カエサル成功と挫折から学んだアウグストゥスは、悠々として急げ・・・と自らに言い聞かせたのであろう。時間がかかっても立派にやり遂げることが重要だと考えたに違いない。若いころならともかく、色々な人生の条件の中、引退を前にやり残した仕事を思い悶々とする方は多かろう。体力と集中力の低下は避けられない。悠々とはしてはいられないとの心境はわかるが、人が仕事をする目的は若者たちにより良い世の中を残すことにあり、と割り切ってしまうと必ずしも自らがやりとげる必要もない。研究に関していえば急いでも進まないときは進まない。無理に急ぐとかえって泥沼にはまる。その成果はなかなかひとには伝わらない。だから、悠々として急げ！

その一方で、ありがたいことに教育は自分が学んだことを若者たちに直接託す生業である。本学の真摯な学生には時を置かずそれを伝えうる。教育内容は長い年月に耐えたもののみを教えることにすれば、その咀嚼にじっくり時間をかけることができる。「研究だけでなく教育にも携わることができる幸せを知りなさい」・・・最後の職場が山口県立夜市小学校であった父の遺言である。

山田義博（藍野大学中央図書館長）

令和5年11月17日



【題字揮毫】

佐々木真美

2015年 2016年 2022年 日展入選

2019年 日本芸院展 大賞 受賞

2017年 小野市展 小野市長賞 受賞

2018年 三木市展 三木市長賞 受賞

## 藍野大学年報 2023

---

発行日 令和6年4月1日

編集 藍野大学年報編集部会  
藍野大学中央図書館事務センター

発行 学校法人 藍野大学 藍野大学  
〒567-0012 大阪府茨木市東太田4丁目5番4号  
電話 072-627-1711(代表) FAX 072-627-1753

印刷 株式会社プリント大阪



学校法人 藍野大学 藍野大学  
大阪府茨木市東太田4丁目5番4号  
072-627-1711(代表) <http://univ.aino.ac.jp>